都市伝説“モトメルモノ”

凪薙壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
都市伝説“モトメルモノ”

【Ｎコード】
Ｎ１２５０Ｆ

【作者名】
凪薙壱

【あらすじ】
この街には、紅い石にまつわる都市伝説がある…それは、再会を約束された石で…誰がその話を広めたかは、定かではないだけど…その石を求める者は…藁を掴む思いの人間…そして、その人もまた…その石を求めた…この物語は…この石を求めた伝説を書き記したノートを受け取った男の物語男は、このノートをくれた先輩を尊敬していた…だけど…このノートを託した先輩は…数日後…公園の中央でナイフを胸に刺されて死んでいた…それは…運命の悪戯か…神の導きか…男は次第に先輩の託したノートによって…危険な世界に

…引き寄せられていく…

0．無名の都市伝説

0．無名の都市伝説
この町では、一つの都市伝説がある
それは、怖いものではなく、愛に関する物語…
伝説と言っても、噂話程度の知名度しかない…
その話とは、ある場所で、ハート型の石を見つけたら、失った恋人に出会えると言う
原型は、いろいろな説がある。
例えば、その土地の企業の陰謀（観光客狙い）
例えば、バカップルの噂話
例えば、魔女の作った反魂石など、
くだらないものが、原型と言われている…
馬鹿馬鹿しい…恋人に出会える石など、そんな石があれば…
間違いなく、その石は俺の願いを叶える事は出来ないだろう…
なぜなら…俺の恋人は死んでいるからだ…
しかし、失った意味が、失恋ととらえるなら、
だが、俺は、その石に興味を示した…もしかしたらと…一目でも彼女に…
だがすぐに笑って、自分の考えを嘆き、俺は、その事を忘れようとするが…
だけど…俺は…その石を探そうと考えてしまう…
そして、あの日…夕日の中で…俺は…ハート型の紅い石を見つけた…
そこは、ただの鉄橋の上…いつもなら、もう少し人通りもあるはずなのに、
この逢瀬の時間…誰も人が居ない…車も通らない…
まるで、世界に俺一人が居ると考えてしまうような…幻想…

俺は、その石を拾った…

辺りを見回す…何も居ない…誰も人が居ない

ああ、やっぱり、ただのデマっと言うよりも、そんな話を信じた俺が馬鹿か…

俺は石を川へ投げ捨て、涙を零す…もう彼女の為に泣くのはこれで最後にしよう…

俺は、涙を拭き、鉄橋を渡りだそうとした時、鉄橋の真ん中辺りに濃い霧が…出来ていた。

とても濃い霧で端の向こうが見えない…

なんだ!?夕方に霧?って言うか…そんな部分的に出来るものなのだろうか?

その霧の向こうから…誰かの足音が聞こえた…

そして、その霧から…顔が現れる…それは…

忘れもしない…大切な人…俺は喜び、その人に近づく!!

ああ…本当に在ったんだ!!あの伝説は!!俺は、両手を上げて…

後もう少しで…抱きしめることが出来ると…そのとき…ふと、気づく…

霧の向こうの夕日がうつすシルエットに…それは…

その人は、何かを振り上げている体勢…疑問になって、立ち止まっ

た俺の目の前を・・

何かがすり抜けた…・それは…斧…

その人は、俺に笑いかけながら、霧の中から姿を現した…

あの死んだ日に来ていた服装…右手には…斧…で、俺を…見ている・・

何かを呟いている…いっ…に…こう

一…しょ…いこう…一緒に逝こう！！

その人が斧を振り上げる！！

逃げろと心が訴えるのに…体が動かない…

死ぬ…俺は死ぬ！！！

俺の頭に…彼女との思い出が…流れる…

出会い…勘違い…喧嘩…仲直り…最後の電話…

最初で最後のデート…

俺は、優しく微笑み、その斧を抱きしめるように…両手を広げる…

大好きだよ…・そう呟きながら…俺は…斧を振り下ろす彼女を見た…

その顔は…泣きながら…笑っていた…俺の頭に斧がめり込む…

意識が暗くなる…俺は彼女に連れて逝かれるのか？

もし本当に、そうなら…それはなんて、素晴らしい事なんだろう…
もう俺たちは、離れる事のない存在になれるのだから…
だけど、そんなことを考えていた俺の耳に聞こえたのは…あまりにも残酷な一言だった

…私を忘れて…生きてよ…私は、貴方の思い出を連れて逝きます…

嫌だ…忘れたくない！！
俺は…何かを掴もうと…手を伸ばした…・

眼が覚めると、そこは病院だった…どうやら俺は、鉄橋で足を滑らせ、車道に出てしまい、
車に跳ねられたらしい…が、運転手が、あまり速度をだしてなかったらしく、
俺の傷は軽傷だった。が、頭を強く打ったせいで、検査入院だ。
ただ、おかしいことがあるとすれば、俺の体についていた血だろう…
服に血が付いていたのだが外傷は無し、打撲はあるが、切り傷は無い…
気を失っている間、俺は、何か夢を見ていた気がするが、思い出せない…
ただ覚えていることは、あの石の伝説…彼女の居ない俺が何で知っているんだ？
と考えてしまうくらいに、調べた記憶…
そして、泣いている誰か知らない人の顔…だけど…
その顔は、まるで霧が消えるように薄れていく…そして…霧は消えた…

1．出会いと別れと

見つからない…見つからない…愛しい人が、大切な人が見つからなかった
私の事を愛してくれて、私も愛したあの人、私はあの人に会いたい
私はあの人と共に居たい、あの人の為に、あの人と私の為に、
その為に私は探す、再び廻り会える筈だから…
そう願い続けながら、私はあの人を探す…自分の足で探していたが、
いつしか足を失い、足が使えないのなら、私は手を使い這いながら、
探す…
だけど、指を失い、手を失い、腕も失った…それでも諦めなかった…
だけど、私の体は失っていく…胴も失せ、頭だけになっても…私は
探し続けた…
いや、もう動けない私は、この世に在り続ける事にした…
いつしか、あの人が、私を見つけてくれると信じて…その場で石に
なることを決めた…
あの人に廻り会う為に…私は今も待ち続ける…物も言わぬ石になり、
あの人を探す為に
私は、今も求め動く、私と同じ悲しみを持つ者を助けながら…いつ
しかあの人に出会う為に…

本来、恋人の居ない先輩…鷲見　連子（スミ・レンジ）先輩が、見せてくれた日記に
書いてあった、再び会う石の話
先輩は自分に物語を作る才能があるんじゃないかと思って、文系に
なったけど、
ほぼ体育会系のバリバリのスポーツマンだ。
結局この先輩は、この作品の書かれたノートを俺に託して、有名ス
ポーツ校へ、
特待生で進学し行く筈だった。

別れ際に先輩がこのノートをくれた時変な事を言っていた
「月影（ツキカゲ）　雅春（マサハル）お前に、この本を進呈しよう！！
まあ、俺が書いて本の原稿のネタ帳だけど、この話を書いているときは、恋人はいなかったけどさ…いつか俺にもこんな気持ちになれるような人がいるんじゃないかって…
人生は、まだ先があるんだ、だからさ、オレはその先を見ようと思うんだ」
まだ、人生は先があるって、確かに、そうだ
俺も、まだ未来がある……先のわからない未来が…
「だから、お前も頑張れよ」
先輩はそう言うと、俺の肩を二、三回叩き、
「恋人が居ないオレのような悲しい青春を送らないように、精一杯生きろよ」
そのときの先輩の顔は、とても眩しくて、晴れ渡っていた。
数日後…先輩は死んでしまった。
公園の中央で心の蔵にナイフを突き立てられ…死んでいた……

2．誰かの死と忘却

人の死とは二つある
それは肉体的な死
もう一つは、精神的な死である
忘却と言う名の…死

いろんなものが死に、忘れられていく世の中で、
先輩は、大切な人を失った。
それは、幼馴染の女の子、先輩は彼女の事が好きだった。
彼女も先輩の事を好きだと俺は知っていた。
俺も彼女が好きだったから、彼女を見ていれば、彼女の好きな人ぐらいわかってしまった。
だけど、その好きな人を先輩に言う事は無かった…
いや、言う事は無いと思っていたのに、俺は言ってしまった…最悪の状況で…
その日は、彼女の誕生日だった
先輩は、この日、彼女に告白する為に、デートに誘った
その帰りに、事件は起きたのだ。
先輩が告白しようと、昔一緒に遊んだ公園に、彼女を誘い、
喉が渇いたと言う彼女に缶コーヒーを買いに行った、ほんの少しの時間に、
先輩は、彼女と永遠に別れてしまった…告白をする事も出来なかった
彼女は、公園の中央で…ナイフで胸を刺されて、倒れていたから…
犯人はわからなかった…なぜ彼女が殺されたのかも……
それどころか、先輩が犯人ではないかと、疑うマスコミの記事…
その無神経な記事が、先輩の心を傷つけ……
そんなときに、俺は言ってしまった……

なぜ彼女を守れなかったと、なぜ彼女を死なせてしまったと…
彼女は先輩の事が、好きだったと…俺は言ってしまった。
大切な幼馴染を失い、マスコミの中傷を受け、俺の言葉に、先輩は、心を病み…
未来を見る事を止め、過去ばかりを見ていて…
学校帰りに、先輩は…車に撥ねられて入院した。そして、先輩は大きく変わった…
未来を見ず、過去しか見ていなかった先輩は…彼女の事しか考え切れなかった先輩は……
交通事故の後、幼馴染を……彼女を忘れた。
医者が言うには、記憶障害の一つだと言うが、幼馴染の存在は、先輩の心を傷つけることしか出来ない存在になってしまったから、誰も彼女のことは言わなかった……
思い出させようともしないかった…
きっと、皆も彼女の事を忘れたかったのだろう……あの忌まわしい事件と一緒に…
だから、先輩が彼女を忘れたのを、きっかけに自分たちも忘れようと…そうやって彼女の存在は忘れ去られていった……
あんなに騒いだマスコミも、既にこの事件は過去のもので、記事にする事もなく…
自分たちの記事のせいで、人が病んだ事も気にもせず、世間からも、彼女は忘れ去られた……

3．去る者と残された者

俺は、先輩の葬式に参列して…先輩の棺桶を見た…
それは、作り物のようで、まるで寝ているだけで、大声を上げれば、起きるんじゃないのかと、思わせる死に顔だった…
そして、先輩の葬式は何の変化もなく…終わった

人が死ぬとは、生きている限り、起こらない事ではない…
いや、生きているからこそ、死ぬ
ただ、その死に、その生きていたときに、行なった事に、意味を持つかどうかだ
俺は、慣れないスーツを着て、初めて身近な人の死で、死を感じた。

葬式中に、俺は、ある事を考えていた…それは、俺のこれからの事だった。
何をしたら良いのだろう…俺は一体どうしたら良いのだろう？
先輩を殺した奴を見つけ出して、何かするべきなのか？
それとも、警察に任せるべきなのだろうか？
だが、一介の学生として身を置くようになった自分に何が出来るのだろうか？
昔だったら、そんな事気にせずに、自分の気のおもむくままに探しにいけたのに…
いつの間にか、世間のしがらみに囚われた俺は、地に落ちた鳥のようだと思った。
俺は、何を求めているのか、それすらも、わからなくなっていた。
身近な者を失うとは…ここまでも虚無感が漂うのか…

俺が先輩に出会ったのは、この街に親の都合で引越して、編入した

学校の必ず部活に入部しないといけない校則により、入部した文芸部で先輩に出会った。
その時に、御世話をしてくれたのがこの先輩だった。
この街の事を知らない俺に、いろんな事を教えてくれた…
今の友達の大半も先輩の関係者だ。

火葬場の外のベンチで俺は、先輩の焼かれている方向を見て、
俺の他にも、火葬場を眺めている女の子がいた。
彼女は涙を流しながら、じっと火葬場の煙突から上る煙を見ていた。
先輩の妹だ…
人目を気にしないで、彼女は声も出さずに涙だけを流していた。
彼女は、これからどうなるのだろう…
両親は、交通事故で死んだと先輩は言っていた。
そして、両親の生命保険と自分がバイトして、今まで暮らしてきたと聞いた事がある。
彼女は…どうなるのだろか？

俺に出来る事は無いのか…

さっきまでそんな事を考えていたせいか、俺は彼女に話しかけた…
涙を流していた彼女は…俺のほうを見る…

泣いていた彼女の眼が…とても綺麗で…俺は惚けてしまった…
いつも見ていた、彼女とは違う雰囲気に……とは思ったものの、
あまり親しくない関係だったから、よくわからない…
とりあえず、彼女に俺はハンカチを渡すと、彼女は黙って受け取り涙を拭う。
何を言えば良いのだろう…出来る事は…なにを話そうか悩んでいると、
「先輩の事、本当に残念だったね」

いつの間にか、先輩の知り合いらしき人が、彼女に話しかけてきた。
彼女は、顔を俯ける…
「人の良い先輩だったけどさ、あんな死に方するなんて、辛いだろうけど」
それ以上言わせては、いけない…俺の中で誰かが警告する…
「犯人は誰なんだろうな、あんな殺され方が、身近で起こるなんて…初め…」
彼女が、言葉を遮るように、相手の男の顔を叩いた。
「うるさい…うるさい…黙って…」
叩かれた人は、何が起きたかよく解らず、叩かれた頬を押さえ…理解した!!
「慰めているのに!!何だ!!オレの顔を叩きやがって!!」
彼女の腕を掴んで引き寄せ、その顔を殴ろうとする…
危ない…俺はそう思ったとき…体が動いていた…
顔面に、衝撃が、視界には閃光が走る…ああ、どうやら俺が殴られたようだ。
「お前が、急に飛び出してきたから…俺が悪いんじゃないんだからな!!」
急に出てきた俺を殴って、ビビリが入る男を見て、俺は呆れた…
この人は先輩の友人じゃない…先輩の友人なら、こんな事をする奴はいない…
だから、この人は、先輩の友人と言うよりも、知人だったのだろう…
そう考えた俺は、俺を殴った奴の顔を睨みつける…
「悲しい事があったばかりに、情緒が不安定になった女の子を殴ろうとするなんて…
最低だな」
俺は、口の中に広がる懐かしい味に眉をひそめ、襟首を掴んで顔に引き寄せると…
「いくら、先輩の知り合いだからと言っても、次、この子に涙を流させてみろ…全力で潰すぞ」

そう言いきり、押し飛ばした
「くそっ…気取りやがって…」
無様に倒れた男は、立ち上がりながら、つまらない捨て台詞を残して、走り去るのを見送ると…殴られた頬に手を当て屈み…
「いっ痛ぇ～「きゃぁ」～」
空を見て大声を上げ…きゃぁ？
俺は…恐る恐る…後ろを振り向く…そう言えば、俺は先輩の妹さんを庇うようにして…
前に出たから…屈んで天を見れば…俺はすぐに距離を取った

「すいません、本当にわざとではなく…」スカートの中を見るような体勢になっていた事を謝ろうとしたが…
彼女は、自分を落ち着かせるように、口元に手を当てると…深呼吸をして、俺の元に歩いてきた。
そして、俺の目線まで屈むと…俺は叩かれると思って、顔を庇う様にして目を閉じるが、
俺の顎を掴み取られると口元に何かを当てられ…拭かれる感覚…俺は眼を開けると
彼女は、俺のハンカチで俺の口から流れ出る血を拭いていた…
「なんで、庇ったの…」
俺の頬を拭きながら彼女が聞いてくる
「無我夢中で…気がついたら、体が動いていた」
緊張して、俺は無愛想に返事をしてしまった
「直情型…レンと同じですか…」
彼女は、クスリと笑った…
「確かに、先輩も頭で考えるよりも行動する人だからな」
あんまりにも可愛く笑うから、俺も口元を緩めるが、すぐに口の中の痛みで変な顔になったと思う。
「レンが庇ってくれたと本当に思うくらい、似ていたのですからねぇ」

彼女は、俺の顎から手を離すと、少し溢れた自分の涙を拭う…
「先輩は、俺の憧れだから…見間違えてくれて、俺も嬉しいよ」
今度は、普通に俺は微笑む事ができた…たぶん、先輩の死を聞いてから、
初めて、微笑んだと思う…そんな事を考えていた時…
「レンがよく血を流して帰ってくるから…その度、私がこうやってレンの血を拭いていたんですよ」彼女が、俺の口元をまた拭く…少ししょっぱい気がして…なぜ、しょっぱいのかを考え…俺はある事実に気づき、顔を真っ赤にして、口を魚のようにパクパクさせる。
そんな俺の動作を見て、彼女は、俺の目線の先の物を見た…
それは、ハンカチ、どこにでもある平凡な物…
そんな物に、なぜ俺が動揺しているのか、彼女はまだ理解してはいない…
いや、今、気がついて、彼女も顔を赤くさせた。
なぜなら、そのハンカチは…俺が彼女の涙を拭く為に渡したハンカチだから…
二人で、相手を見つめ合う様に俺たちは固まっていた…

４．恥は掻き捨て、世は情けない

その後、気恥ずかしくなって、逃げ出した俺は、このあと用事が無いから、
家に帰ろうと思った矢先、携帯が鳴る。
（メールか…母さんか）
「母様です！！今から用事があって、家の鍵を取り替えたので、貴方が持っている鍵が
使えません～」
鍵を変えた！？過去形！？
「ｏｒｚな気分でしょうけど…（≧ｗ≦）ｂのはず！！５時くらいに家に帰るので、
ピッキングとかしたら…（＾＜＞＾）ｑです」
下手な絵文字を使いやがって…（≧ｗ≦）ｂのはずってなんだよ…
俺はため息をついた。
しかも、ピッキングで開けたらって…俺を何だと思っているんだよ…
げんなりしている俺に、さらに母さんからメールが…
「追伸、お父さんが、頑張ってくれているので、もしかしたら家族が増えますｖ（＾Ａ＾）ｖ」
……あのババア…息子になんてものメールしてやがんだ…若作りのとし…
またメールが…
「あと一言発言したら、産まれた事を後悔させてやるｂｙ若くて綺麗で妖艶な妻のあなたの母より」
俺を産んだのは貴方です…俺の自由意志はありません！！と失礼な事を考えてしまったが
…お母様…ｂｙの後に“より”はいらないぞ…
ああ！！どこまでツッコミを入れれば良いメールなんだよ！！

とりあえず、時間を潰す為に俺は、ゲームセンターに行く事にした。
最新のゲーム機設置と張り紙が張られていて、そこには行列が出来ていた。
面白そうだと、思ったが、こうも行列が出来ていると…
「うぉおぉぉぉおおぉぉぉ！！」
急に、行列が、ざわめきだす…何か凄い事でもあったのかと、つい、その行列を退き
観客用のスクリーンのある人ごみの方に移動してスクリーンを見た…
「隠し弾とは、やるね…だけど、僕には勝てないよ！！」
スクリーンには、たくさんの敵が、子供に襲い掛かっているところだが、彼は、攻撃を寸前で見切り、打撃で、敵をなぎ払っていく…小さい大人が、大人気なく、子供のように、いや、見た目相当の年齢の様に一目を気にせず遊んでいた…
これが新作だったのか…
今スクリーンに映っているゲームは、グレート・スピリッツ・ファイト４
ガンシューと格闘ゲーを合わせる事に成功し、ドーム型のゲームで３６０。スクリーン、
そして、全周囲のセンサーでプレイヤーの動作をインプットさせ、自分の動作が忠実に反映される故に、自分で攻撃を避け、接近されたら、自分の動作で、攻撃も防いだり、敵を打ち倒したり出来るゲーム…ちなみにプレイヤーの姿は、本人の好きな姿をオリジナル作成できる…だから、大人でも子供の姿を作成したり、男性が女性の姿でゲームする事も出来る。そして、この４は３の時に作ったキャラデーターを引き継ぐ事も出来ると宣伝していた。
故に、俺は、すぐに理解出来た…
今、このゲームに熱中している子供の姿をしたプレイヤーは…俺の親父だ…
同じ姿の別人のキャラじゃないかと考えるが…
そのキャラの上に、表示されている名前は、雅継…俺の親父の名前

だった。
さっき…母のメールで、俺の家族を増やす要因を作る為に奮闘しているとか言われていた男だが…
なぜ、ここにいるんだ？
「まさか…この僕が…」ゲームに視線を戻すといつの間にか、親父はドームの端に追い詰められていた。
普通このゲームは、複数の人が共同で遊ぶゲームである為に、一人では、やはり限界であったのだろう…周りの人が緊迫した雰囲気を表す…
親父が、ゲームオーバーしたら、なぜこんな所にいるのか、聞いてみるか。
そんな事を考えつつ、じりじりと追い詰められていく親父を見ていると、何だか嫌な予感がするものだ…
「どうやら、帰れそうもないよ…春夏（しゅんか）」母さんの名が、スピーカーで…
俺は顔を赤くする…自分の母親の名前が、こんな人のたくさんいる所で…
まあ、この名前が母だと解る人はいないだろうが…そう考えている間にも、
親父の体力ゲージが、少しずつ削られていく…もう誰もが、終わったと思い画面から眼を逸らした瞬間…奇跡は起きた…
スクリーンに共闘者参戦！！と大きく表示され、親父の様子が見えない…
そして、文字が消えた瞬間、親父の周囲にいた敵は、一掃されていた…
共闘者は、あの文字が現われた瞬間に、助けたと言うのか！？
緊迫した表情で、皆が再び画面に注目する…
黒い魔神のような甲冑を着たガントンファーを構えた女性が親父の前に立っていた
共闘者は誰だ！！俺は、そいつの名前を見た…登録名…春夏…母さ

んの名前だ…
「パートナー登録…プレイヤー、シュンカ接続確認！！」
コンピューターが、共闘者の名を読み上げ、順番待ちの皆が、歓声を上げた。
母さん！！！あんたもゲームセンターに来ていたのかよ！？
さっき親父が呟いたなと同じ名前の者が、現れ、ゲーム待ちのお客以外も、スクリーンに注目している…
「雅継さん、助けに着たわ」
ガントンファーを構えている母さんを見て…親父は…
「春夏…僕の為に…こんな所まで…」
悔しそうに、親父は顔を俯けるが…母さんは、そんな親父の頬を叩き、両肩を掴んだ
「貴方は独りじゃない…一人だと困難な事でも…私たち二人なら、困難じゃない！！」
母さんの激励で親父の目に、何か力が蘇るのを、ゲーム越しに感じた。

そして、雑魚が一掃された為か、親父たちのいるステージが暗くなる…
そして画面が明るくなったとき、母さんたちの前に、巨大な筋肉の塊の様な人物が立っていた。
「よくぞ、ここまで来られたものだな、雅継と春夏よ…たった二人で我が前に来るとは…」
どうやら、ボス戦のようだ…ボスが、一歩、二人に近づこうと足を動かした瞬間…
ボスが武器を落とした！？
ボスの背後には母さんが…いつの間にか居て、ガントンファーでボスの腕に連撃を叩き込んで…そのまま、足の関節を叩きボスはｏｒｚの形で倒れると…
親父が…ボスの頭に銃を押し付けていた…

「そう、二人なら…僕たち（私たち）の敵じゃない」
二人して、自分たちに酔いしれたようにそう言う…
「ひっ…卑怯者！！いきなり襲ってくるとは…」
ボスは、この二人の行いに、率直な感想を口走ると…
親父は、容赦なく銃を発砲した…

それから、ボスは2、3回変身し、何度か、瀕死のピンチをボスは乗り越えてきたが、
結局…撃滅された…鬼だ…俺たちは…きっと、この時…心を一つにしてそう考えただろう。
だが、ゲームが終了し観客と化していた人ごみは、まるで、俳優に会うのを楽しみにしている。
ファンのように…ドームから出てくるプレイヤーを待っていた。
どんな人なのだろうかと、観客は思っているだろう…
一人目のプレイヤーがドームから出てきた。
黒い長髪の髪をなびかせながら、黒いスーツを着た２０代後半くらいのクールな男が出て…
その背後から、ポニーテールの１０代後半くらいの女の子が、長髪に甘えるように抱きついていた。
長髪の男が、俺に気づく…
「あっ雅春」長髪の男（親父）が、人懐っこそうな声で俺の名を呼び、俺のところ来る
そして…
「あら、雅春じゃない、こんな所になんでいるよ？」俺と同い年ぐらい容姿の母が、意外そうな顔をして、俺に話しかけてきた。
「なにやっているんだよ！！親父も母さんも…あのメールで家族を増やす為に頑張っているって…」俺のこの不用意な発言に、周りの観客がざわめく…
「こんな人前で、何を言っているの！」親父が、顔を赤く恥ずかしそうに、俺を睨む

「人のことを考えずに、そんな卑猥な事を言うなんて…誰に似たのかしらね？」
たぶん、あんたです母さん…
とりあえず、今日は恥ずかしい事に会いまくっているから、俺は、親父と母さんの手を掴むと、ゲームセンターから出て問い詰めようとしたが…
「なんで、「ごめん！！雅春、今から春夏さんと一緒に行かなきゃいけないことがあるんだ！！」」親父が、俺の手を解くと…母さんの手を掴んだ
「５時までには家に帰るから、じゃあ、お父さん頑張ってくるからね！！」
「上手くいけば、４人家族よ！！」
そう言うと、親父たちは、走り去った…街中で…さっきの発言を聞いた人たちが、
俺の方をチラチラ見てくる…母さん…さっき俺に言った言葉を…貴方に返そう
母さん１００％貴方たちです…。

5．別れし日常

嵐のような出来事とは、この事を意味するのだろう…
疲れた…俺は、ゲームをする気力もなく、近くの喫茶店に入ると、紅茶を頼んだ
ここ数日、いろんな事があったけど…先輩の妹さんと初めて会話した…
今まで会話と言うよりも、挨拶ぐらいしかしたことがないな…
よく考えると、俺は彼女の名を知らない…先輩の紹介も…
「あれが、俺の妹だ」それだけだったからな…
俺は紅茶を一口飲み…心を休める…2月の寒空を見上げ、俺はこれからの事を考える
期末試験も終わり、あとは、卒業式と終業式…それが済めば、3年か…
「進学か、就職か…」
無意識にそう呟いた瞬間…俺は口に手を当てた。
何を考えているのだろう…こんな時に…未来を…未来を失った人がいるのに…
俺は、まだ熱い紅茶を一気に飲み干す…喉を焼くような熱さが、胃に染み渡り、俺は歯を食いしばった…
先輩の居た、今までの日常、一緒にいる筈だった日常は終わった…
その日常で描いていた夢は、未来は無い…俺だけが、先に進む…いや、先輩以外が先へ進んでしまう…
大切な人を、今の俺を形成した先輩を…俺は過去へと捨てて行こうとしている…
胸の中が苦しい…頭が痛い…イライラする…
「やっぱり、お前か～」
こんなにも俺が苦しんでいるのに…能天気な…いや、馬鹿な声が、俺に向かって発せられる…

俺は、頭を抑えつつ、その声の主へ顔を向ける…
「誰かと思えば…さっき俺に怯えて逃げた臆病者じゃないか」
俺の眼に映った、そいつに言い放った。
そいつは、先輩の妹にちょっかいを出して、俺を殴ってしまった、
知らない奴だ。
臆病者と呼ばれ、顔を真っ赤にさせたが、すぐに、自分を落ち着か
せる動作をすると、
隣の奴に…ん？
よく見れば、奴以外に、時代遅れの不良と言うよりも、流行が３つ
ほど過ぎた服装をした奴らもいた。
「なに、カールに喧嘩をふっかけて、こいつ～」パンチパーマーの
既に絶滅危惧種が、カール…俺を殴った男であり、臆病者に話しか
けた。
「スティーブ、そうなんだぜ…俺が可愛い子って、目をつけた子に
ナンパしたらさ、
いきなり間に割り込まれて、オレを睨みつけるんだよ、フィアーも
何か言ってくれよ」
頭がこんがらがってくるな…日本人の癖になんだ？スティーブとか
カール、フィアー？
「許せないよな…こんな人の恋路を馬鹿にする奴は・・・」
フィアーと呼ばれたゴリラ体型の頭にポマードを気持ち悪いぐらい
に塗りつけたオールバックの奴も賛同する。

要するに、先輩の妹にちょっかいをかけた奴
カー…えっと…カ…まあいい、スナック菓子
パーマーが…スティー…これは、パンパーで、
３人目がゴリラか

俺は得意げに頷くと…
「スナック菓子、パンパー、ゴリラ」

それぞれに指をさしながら、名前を言う。
別にたいした理由は無い、ただ馬鹿にしたかった、それだけの事だ。
前の二人は、何の事か意味が解らず首を傾げたが、３人目は、やはりコンプレックスだったらしく…
「この野郎！！ぶっ殺してやる！！」ゴリラが吼えた…
今の心の闇を、ここで晴らすのも良いかもしれない…

6．出会いし日常

「痛ぇ…」
俺は、肩を押さえながら歩いていた。
無茶な闘い方をしたもんだ…店に被害を与えない為に、頑張ったんだが…
結局、しばらく出入り禁止にされた。
まあ、その腹いせに、ゴリラ、パンパー、スナック菓子をゴミステーションに叩き込んできた。
時計をみると…
「ちっ…これだから、デジタルは…」
紅茶臭くなって、濡れて…液晶が壊れた時計を見て、俺はため息をついた。
「まあ、あれだけ殴れば、壊れるし…紅茶も大量にぶっかけられたからな…」
仕方なく、その辺の人に、時間を聞くと…４時５０分…俺は、お礼を言うと、
家へ歩き出し…いや、走り出した。
早く紅茶をまみれの体を綺麗にしたかったからだ！！
家に着くと、ガチャ、ガチャ！！
「くそ…まだ鍵がかかっている！！それに鍵も合わねぇ！！」
俺は軽く舌打ちをすると素早く、懐から針金を取り出す…
ガチャ…開錠完了…その開錠時間１０秒！！
おかしい…いつもなら１秒なのに…焦っているせいか、いつもよりも時間がかかってしまった…
俺は、家に入ると、鍵をかけ、風呂場に走った
服を洗濯機に放り込むと、俺は、シャワーを浴びた
何か忘れている気がするが…今の俺にそんな事を考える余裕は無かった。

気分が落ち着き始めた時…俺は、思い出した…
着替えの服を準備するのを忘れていた…
まあ、体を拭いたら、部屋で着替えれば良いか…
俺は、下着を穿くと廊下を…
がちゃ…誰か帰ってきたか？別に親父だろうが、母さんだろうが関係ないと言うか、
俺に部屋に行く為には、玄関の前の階段を通らないと2階に行けないからな…
気にせず…歩いて…俺は…後悔した…
なぜなら、玄関にいたのは親父たちだけではなく…先輩の妹も居たからだったからだ！！
「！！！！！」俺の下着姿を見た女性が、声にならない悲鳴を上げ…
「！？！‘＆％！＆％＄＃」俺は、人の身で発音できない悲鳴を上げ、階段を駆け上がり、
部屋へ飛び込んだ
親父たちだけと思ったら、何で…何で、先輩の妹がいるんだよ！！！

「ごめんなさいね～うちの馬鹿息子が～まさか露出狂だったなんて…」
「僕も驚いているよ…雅春が…あんな姿で…家の中を歩き回るなんて…」
「いっ、いえ…私も…急に家に入って…びっくりして…」
「あんな変態に…そこまで言えるなんて…もう…可愛いわ！！」
「ひぃや！？やっ、止めて下さい！！」
「ほら、止めなよ、ごめんね、春夏は、可愛い子に眼が無いから…」
玄関から聞こえる声に焦り、俺はすぐに服を着替えた。

着替えを終え階段を下りるが、玄関には誰もいない
「雅春～居間に来なさい！！」
居間の方から母さんが、俺を呼んでいた。…何で先輩の妹がいるのか教えてくれると思ったから、俺は急いで居間に向かい、ドアを開けると…
俺は宙を舞った！？そして、地面に叩きつけられ、腕を極められた。普通こんな状態になればパニックになってもがくだろうが、投げた相手がわかるから、俺は慌てず、投げた奴に聞いた
「何のつもりだよ…親父…」俺をうつぶせにしながら、背中で腕の関節を押さえている
親父に聞く…
「ごめんね…雅春…春夏が雅春に話があるから、拘束しろって…」
「そうよ、雅継さんは、ただ私のお願いを聞いてくれただけ」
俺は顔を上げて、母さんを睨みつける…
「俺が何かしたのか」俺が思うところ、母さんに逆らっていないはずだが…
「私のメール読んだでしょ？」母さんが、ドキッとするような笑顔で…殺意の篭った笑顔で、俺を見る…
「家の鍵を新しく作り、ピッキングをするなって書いていたのに…なんで家に入れたのかな？」
俺は顔を青くさせる…しまった！！さっき風呂場で忘れていたのはこれか！？
母さんが、俺の頭に足を置く…軽く踏みつけると…
「脅かそうと思ったのに～あんたが帰ってきていて、脅かすの失敗したじゃない～」
いえ、お母様、充分驚きましたから！！そう考えていると、
母さんは俺の頭から足を退かした
「ごめんね、驚かせて、これが家族のコミュニケーションだから」
親父が俺の拘束を解き、誰かに…弁解を…俺は、親父の視線の先を見た。

「いっいえ、何か凄い家だと思って…びっくりしたかな…」
先輩の妹さんか…俺は立ち上がりながら、親父たちに話しかけた。
「母さんと、親父のせいで、完全に退いているぞ」
親父たちに言いつけたとき、妹さんが、俺に近づき、いきなり頭を下げ…
「ごめんなさい、見るつもりは無かったけど…その、ごめんなさい！！」
「いや、俺も悪かった、あんな見苦しいものを見て…」
とりあえず、あさっての方向を見ながら、俺も謝ったが、思わぬ返答が返ってきた
「いえ、とても引き締まって…いえ！？忘れてください！！」
俺はその返事に頭に血がいくのを感じ…
「あっ雅春が赤くなった～」
親父がチャカしてきた！？
「うるせー馬鹿親父！！」
「馬鹿って、あんた自分の父親になに言っているの！？」
母さんが、俺の頭を叩き、俺はあまりの痛さに、頭を押さえ、しゃがみこんだ…
「手加減して殴れ！！いつも手加減せず…力一杯殴りやがって！！」
「手加減したら、痛くないでしょう！これだから…」
その光景を見て、先輩の妹は笑うのを抑えるように口に手を当てていた

俺は、母さんたちに、居間の机で先輩の妹と面と向き合って話せる位置に座らせられ、
俺の隣には、親父が、先輩の妹の隣には母が座っている
「改めて、紹介するわね　雅春、彼女は鷲見（スミ）　冥乃（メイノ）　今日から家の子になりました！！」
「わ～い、どんどん、パフパフ！！」親父が傍で嬉しそうにハシャ

グ…
「はぁ？」
あまりの出来事に、今日何度目だろうか…思考が停止し…
「つまり！！鷲見改め！！月影（ツキカゲ）　冥乃（メイノ）になりました！！」
「よっ、よろしくお願いします」
先輩の妹さんが俺に頭を下げる…
「いや～父さん頑張ったんだよ～鷲見の叔父さんから、冥乃ちゃん（の親権）を奪い取るの～」
「ええ、しかも、ゲームセンターであの新作をクリアー出来たら、考えてやるって言っておきながら、約束を破ろうとしたのよね～」
母さんが、ゲームセンターの時の事を、うっとりしながら思い出している…って！！
ゲーム！？ゲームで人の人生を賭けたのかよ！！
なんて叔父だというか、それで本当にゲームをやって勝って、追求したのかよ！？
普通それを本気でやると思わないで、逃げるだろう！！
「あの…月影くん…あの…あまりおじさんたちを攻めないで…」
あんなはっちゃけた、両親を庇おうとする先輩の妹さん…なんて優しい子だと、思っていたら…あの親父！！
「ああ～おじさんじゃなく、お父さんでお願い」
と涙目でいつの間にか…妹さんの両手を掴みながら言うし！！
「それに、月影くんじゃなくって、もう君も月影家の一人なのよ～そんな他人行儀だと、お母さん泣いちゃうよ～」
更にその手を母さんが掴みながら涙目でそう言う…
俺はため息をついた。

7. 先輩の妹

「それでさ…親父…部屋は、どうなるんだ？」
やっと、落ち着いた親父たちに俺は尋ねた。
家に、人が一人増えても大丈夫なスペースは…一つしかないが…
「あの…私はどの部屋でも…御世話になる身ですし…」
冥乃ちゃんが、おどおどしながら、親父たちにそう言うが、その様子に、母さんは…身を震わせながら…
「健気よ！！この子…可愛すぎるぐらい健気な子よ！！」と冥乃ちゃんに抱きついた。
そして、親父は、慌てている冥乃ちゃんに、
「今日は、客間を使ってもらうよ」とそう言った。
俺は親父のその言葉に安心した。
もし客間じゃなかったら…俺は天井を見上げた…この上にある…屋根裏部屋を使わなくてはいけなくなると思ったからだ。
屋根裏部屋は、物置として使われており、片付けるのには、少々手間がかかる…し…
「今日は？」俺は、親父の言葉のそこに注目した
「あら、その意味解らないの？まったく鈍いわね～」
母さんが、冥乃ちゃんに頬ずりしながら、親父の代わりに返事をした
「アンタは、今すぐ屋根裏部屋を片付けて、荷物を全部移動させるのよ」
俺は、その母さんの言葉に反発しようとしたが…
「それじゃ…まっ…まさっ…雅春くんが！！可哀想です！！私が…屋根裏部屋を綺麗にして其処を…」
冥乃ちゃんが、俺を庇おうとしてくれた…
おい…こんな風に庇われたら…俺って凄く惨めじゃないか…
「別に良いぜ！冥乃ちゃん！俺が屋根裏部屋に移動するから…まあ、今日は客間で我慢してくれ」

俺は啖呵をきって、親父たちに言った、だけど…
「でも…それじゃ…」
冥乃ちゃんが、心配そうにしたから
「先輩にはもっと、恩があるから、これくらいどうって事ないから！」
と俺が言うと…なんだか親父たちが微妙な顔をしたが、冥乃ちゃんは、納得してくれた。
そして、母さんは、冥乃ちゃんを連れて、客間へ案内をしに行った
親父と俺は、
「じゃあ、雅春、僕たちは、屋根裏部屋を片付けようか～」
屋根裏部屋を俺が使えるようにする為に、二階へと向かった。

「ねぇ…」
親父が料理をする為に台所に向かうと、入れ替わるように、母さんが、屋根裏部屋に入ってきた。
「雅春…あんた…さっきのあれは、なに？」
母さんが、俺をにらみつけながら聞いてきたが…
「さっきのって…なんだ？」
俺には見当もつかなかった
「部屋の件よ！先輩に恩があるから良い？そんな答えを、私は望んで無かったわ！」
急に怒り出されても…
「まだ、わかっていないようだから、言うけど！さっきのアンタの答えじゃ“俺はお前を家族として受け入れる気は無い”と考えてしまうの！理解できる？」
俺は、母さんの言葉に、大げさすぎると思ったが…
「冥乃ちゃん…少し養子の件考えさせてくれって…さっき客間で言っていたのよ…」
俺は母さんの顔を見た…呆れた顔で…

「それってさ…普通に…即二文字返事が返ってくると思ったのか？」
俺がそう言うと、母さんは、イラつくようにして
「そうよ！！そう思っていたのに…アンタのそんな考えがいけないのよ！！普通は、もう仲良しで…あの時だって、先輩の為とかじゃなく、君の為とか言う場面でしょう？」
なんて事を言うんだこの女は…
「それでも、口説き落とす気はあるの！」
「はぁ？」
俺は、母さんの言葉にマヌケな声が出てしまった。
「なによ…あんな可愛い子を見て…口説かない方が…」
「あんたは！！妹になるかもしれない人を口説こうとする神経を疑うぞ！」
俺は、母さんの言葉を遮り罵倒したが…
「良いじゃない～萌えるシチュエーションだわ～」
と母さんは両頬を押さえてくねくね体を動かしていた…
そのころ一階では…
「ごめんね…春夏が…いろいろと…昼ドラに影響されたりして…」
「いえ、私のこと…ちょっと解ってくれていますし…」
「えっ？冥乃ちゃん…雅春と妹で恋人関係を！？」
「ちっ…違います！！」
一階では…俺と母さんの会話は…筒抜けだった…ｏｒｚ

8．先輩との思い出

「あの…本当に良いんですか…それ…重そうなんですけど…」
俺の部屋にある本を、ダンボールに入れながら、冥乃ちゃんは俺を見ていた。
「いや…冥乃ちゃんは、ダンボールに本を入れといて…あと…そんなベッドの下を見なくても…そんな本…無いから…」
俺の方を見ながら…ちらちらとベッドの下に、冥乃ちゃんの視線が向かっていた。
「えっ…いえ！！そんな…」
やはり図星だったか？…いくら…本を入れとくように頼んでも…
「私は…雅春くんのそのダンボールの持ち方が気になって…取っ手があるのに…下から腕で持ち上げるような事をして…」
俺は彼女の言葉に理解した…まあ、家族になるんだし…話していた方が良いな
「俺、此処に引っ越してくる前に、事故にあって握力が弱いんだよ」
「だっ…大丈夫なんですか！？私が持ちます！！」
「いや、日常生活では問題ないけど…持久力が落ちてね～」
俺は、軽く笑うと、部屋の扉を足で開けようとして…足を止めた
「冥乃ちゃん、両手塞がっているから…ドア開けてくれない？」
危ない所だった。もうこの部屋は、冥乃ちゃんの部屋になるのに、足で開けるなんて…
冥乃ちゃんに失礼だ。
「あっ…はい！！すぐに開けます！！」
冥乃ちゃんはそう言って、ドアを開けてくれた
「ありがとう、じゃあ、部屋に持っていくけど…片付けるから…ダンボールの入った本は、そこに置いていて良いよ、あとから持って行くけど…」
「あの…このノート…本の中に入っていたんですけど…どうした方

が良いですか？」
それは…先輩が俺にくれたノートだった…日記を兼用してあり、俺はそのノートを見れずに、本棚に置いていた…
「ああ、ちょっと、このダンボールの上に置いて～」
俺はそう頼んだ…
そして、屋根裏部屋の梯子を登り…俺はダンボールを床に置いた。
連子先輩…俺は…先輩の事を思い出した…
長い黒髪を後ろで束ねたポニーテールの髪型をし…ブレザーなのに学ランを着ていた。
出会いは…其れほど特別と言えるものじゃなかった。

それは、俺が引っ越し初めて学校に行った時の事だ。
「月影君、我が校は、全生徒必ず部活に参加しなくてはいけない…わかりますね？」
職員室に放課後呼び出され、俺は先生にそう言われた。

「とりあえず…運動部系は…その怪我じゃ…無理そうですね」
当時の俺は、怪我をしていて、左腕が満足に使えない上に両手の握力は、運動するほどの力は回復していなかった。
「じゃあ…文化系の部活に行きましょうか…」
終始無口の俺に、先生はおどおどしながら、部活に案内した。
この頃の俺は…自分がこの世でもっとも強いと思っていた愚か者だった…
そして、その愚かさ故に…俺はこんな大怪我をして…捻くれていた。

「じゃあ、次は文芸部で…でも、ここは…あまりお勧めできません…」
知らない間に、俺は部活を紹介されていたが…そんな事…どうでも良かった…
先生が文芸室のドアを開け…落胆するようなため息を吐く…

「まだ…そんな格好をしているんですか…鷲見くん…」
俺は…その落胆する先生が話している生徒を見た…
「ここは、ブレザーの学校なのに…なぜ…学ランを着ているんですか？それに…」
確かに…俺の目の前には、黒い学ランを着た…机の前で頭を抱えている男が長い髪を束ねもせずに居た。
「先生、それに髪の毛だって違反とでも言いたいだろ？」
目の前の先生の言葉を遮り…その学ランは先生に言った。
「わかっていながらその態度ですか！！」
「これは、俺の大切な髪だからな！！切る訳にはいかねえよ～」
その言葉に先生は、呆れたように首を横に振ると…
「別に髪は束ねたら文句は言いません。ですが…その制服は明らかに校則違反でしょう！！」
「別に良いじゃね～か～似合ってんだし～お前もそう思うだろう？」
いきなり俺に話かけてきた！？
「…」
だが俺は…話をする気分じゃなく…そっぽを向いた。
「なんだよ～一応、俺は先輩なんだぜ～敬意を払ってだな！！」
と俺に近づこうとした先輩を先生が止めた
「ずっとこの調子なんですよ…事故で怪我をしてから…暗い性格になったみたいで…」
男はその話を聞くと腕を組んで考えるような素振りを見せた後…
「でっ…こいつ…友人とか居ないだろう？」
と俺の前で堂々と聞きやがった
「ええ、今日転校してきたんですけど…あの怪我で…クラスの生徒も近づかないんですよ」
って！！先生アンタも！！
「よし！！此処は俺に任せてもらおうか！！」
そう言って…学ランは俺の腕を掴むと…
「こいつは文芸部が貰うぜ！」

と勝手に俺の部活は決まってしまった。
これが先輩と初めての出会いだった…

確か、この時が去年の5月だったな…俺が一年で先輩が二年…
懐かしい思い出だ。

9．先輩のノート

懐かしい思い出を思い出した所で、俺は先輩のノートを開いた。
それは…俺がこの町に引っ越してくる一年以上前の事が書かれていた…
俺が知らない先輩の事…そして…先輩が好きだと思う人の事だった。
そのノートの主な登場人物は、先輩と先輩の幼馴染、霧摩司とその後輩、尾田史一…
その二人は、俺の知らない名前だった…ある程度の先輩の知人に俺は紹介されているが…まったく聞き覚えのない名前だ。
俺は、ドキドキしながら、ノートを読んだ…
だが…二、三ページもしない内に…俺の手は震えていた…
先輩は幼馴染の霧摩と言う人物に好意を寄せていた…そして…先輩の日記についに告白する事を決めたと書かれていた…
だけど…其処で日記の日付に空白が出来ていた…それが…一週間続いて…ふられたのか？
そう思ったとき…日記が再開された。
それは紅い石の話だった…
此処から日記ではなく…前に先輩が話してくれた都市伝説だった…

見つからない…見つからない…愛しい人が、大切な人が見つからなかった
私の事を愛してくれて、私も愛したあの人、私はあの人に会いたい
私はあの人と共に居たい、あの人の為に、あの人と私の為に、
その為に私は探す、再び廻り会える筈だから…
そう願い続けながら、私はあの人を探す…自分の足で探していたが、いつしか足を失い、足が使えないのなら、私は手を使い這いながら、探す…
だけど、指を失い、手を失い、腕も失った…それでも諦めなかった…

だけど、私の体は失っていく…胴も失せ、頭だけになっても…私は探し続けた…
いや、もう動けない私は、この世に在り続ける事にした…
いつしか、あの人が、私を見つけてくれると信じて…その場で石になることを決めた…
あの人に廻り会う為に…私は今も待ち続ける…物も言わぬ石になり、あの人を探す為に
私は、今も求め動く、私と同じ悲しみを持つ者を助けながら…いつしかあの人に出会う為に…

前は先輩に話してもらったが…自分で読んでみると…妄執を感じる…どうして…そこまで…求めるのか…わからない…だが…この話の続きが、次のページに書かれていた…
正確に言うなら…さっき読んだのは、都市伝説の原文で…これがその原文が都市伝説に昇華した物だ…
内容は…離ればなれになった青年が紅い石を拾い、恋人に再会する話
恋人が不良にさらわれ…その石が恋人の所へ導いた話
友人との再会、ペットとの再会、家族との再会…再会に関わる話に…
その紅い石が出てくる都市伝説が、かき集められていた。
だが…俺がその中で…驚いた話は…死者と再会する事の出来た話…
死に別れた恋人に出会い…その恋人と幸せになった…そんな話がいろんなバリエーションで多々存在していた…結末も様々だった…再会した死者にあの世へ連れて行かれるパターンや死者と離ればなれになる…など様々なことが書かれていた

これが何の意味だったか…俺にはわからなかった…

先輩は…この石を探していた…
だが…なぜ…この石を探そうとしていたのか？
それは…再会したい人がいるから、集めていたのだろう…

でも…そこまでして再会したい人物…それは…まさか…

コンコンッ
俺は、ドアを叩く音で顔を上げた。
「雅春くん、お父さんが…ご飯が出来たって…」
俺は、ノートをダンボールの上に置くと
「わかった！すぐ行く！！」
そう返事をした…
先輩は…誰に会いたかったのか…その考えを…俺は放棄した…
馬鹿馬鹿しい…死者に出会おうとしていたなんて…そんな風に否定しようとしたが…
俺の脳裏に過ぎったのは…再会した死者に殺される…その話だった…。

10．歓迎

一階に降りると…台所では…その日の内に準備したとは思えないほどのご馳走が準備されていた。
「雅春、遅～い、腕によりをかけて作ったんだから！！冷めない内に席に着いて！！」
親父がそう言いながら、俺に早く席に付くように指示する…
「そうよ、雅春！！雅継さんが頑張って作ってくれたんだから！！冥乃ちゃんも、そんな端っこじゃなくって、お母さんの隣に座って！！」
俺の家では、お祝いの時は、和室の居間に料理を持って来て食事をする。
いつもは、ダイニングで食事をするから、椅子に座るが…今回は座布団で…本来6人で座るような大きな机で…食事をする。
「雅春くん…コップを…」
俺はそう言われ、その声の方向を見ると、冥乃ちゃんがオレンヂジュースの瓶を持ちながら、俺にコップを出すように見ていた
「あっ…ありがとう」
俺のコップにオレンヂジュースが注がれる
その瞬間、親父が立ち上がり…
「じゃあ～皆に飲み物が行き渡った所で…冥乃ちゃん！！我が家にようこそ！！これからよろしく！！」
その合図と共に、母さんがクラッカーを鳴らした！！

「さあ、冥乃ちゃん！！僕が作ったケーキだよ～」
ある程度料理を食べた所で、親父が台所からケーキを持ってきた。
ケーキにはチョコでようこそ！！新しい娘

と書かれていて、それを見た冥乃ちゃんは顔を紅くして…
「まだ…私…」
と冥乃ちゃんが何かを言いかけたが…母さんがそれを止め…
「例え、娘じゃなくても…もう貴方は、私たちの家族なんだから！！」
と笑いながら母さんが言うと…冥乃ちゃんは顔をうつむかせ…
「…ありがとう…ございい…ます…」
と涙を流しながら…可弱い声で…そう呟いた…。

「じゃあ、ケーキを切るよ」
俺は母さんからナイフを貰うとケーキを切り出した
「ごめんね…雅春…春夏が何かを切ろうとすると…変になるからね～」
俺はケーキを均等に４等分して…更に其れを半分にした。
「一人二つで、一個はいま食べてもいいけど…明日に回しても良い…特に母さん！！体重を気にするなら、明日にしなさい」
「えー、雅春なに、それ！！まるで私が…太っているって…言いたいの！！」
母さんが俺にフォークを向けながら怒る…
「母さん！！怖いからフォークを向けるな！！」
と母さんをなだめようとするが…
「いえ、これは、雅春さんの方が悪いです！！女性の体重の事をとやかく言うなんて！！」
と思わぬ冥乃ちゃんの追加攻撃！？
「それに…その言い方は…私に太っても良いと言う事ですか！！」
「そうよね～私ばかりに言うなんて！！愛が足りないわ！！」
俺はすごむ二人に…恐れをなして逃げようとしたが…いつの間にか背後に親父が居て…
「雅春…失敗に逃げちゃ駄目だよ、失敗はちゃんと償わないと身につかないから…ごめんね、逃がせないよ」

そう言いながら俺が逃げないように牽制してきた！
「そう言いながら…ここで怒りを発散させないと、母さんの機嫌が治まらないからだろう？」
俺は顔を引き攣らせながら親父にそう言うと…親父は…清清しいまでの笑顔で…
「当たり前じゃないか！怒りに染まった春夏は…恐ろしいんだから！！」
と言い切ったが…俺は…笑った…計画道理だ！！
「貴方もそんなに怒られたかったのね～良いわよ…懲らしめて…あ・げ・る！！」
「ええ！！なんで！！」
と慌てる親父に…俺はこう言った…
「失敗は、ちゃんと罰を受けて償おうぜ！！」
そして、俺達は…母さんと冥乃ちゃんから攻められた…
まあ、こんな歓迎の仕方も家では、アリだろう…
俺はそう思った

11．片付け

「ごめんなさい…私…調子に乗って…」
二階で俺の部屋を片付けているとき、彼女はそう言った。
「いや、別に謝らなくっても良いって、あれはあれで…楽しかったし…って！！俺はMじゃないからな！！別にこれくらいなら、いつもの事だから平気であって…毎回されたら…」
と取り乱す俺を、彼女はクスッと笑った。
「それこそ本当に失礼じゃないですか！！私がそこまで、怒りやすいと…」
「だって、先輩の妹だよ～」
彼女の表情が暗くなる…そして…母さんのあの言葉が…過ぎる…
（そんな言い方じゃ…受け入れないって言っているものよ！！）
だから、俺は言葉を付け加えた
「それに、これから、俺の家族になるんだし…俺も先輩に似て言ったよね？
だから、俺が無茶したら、ちゃんと怒ってくれなきゃ…俺、バカだから…浮かれきっていて…判断できてないから…心配させるなって…怒ってくれなきゃ…って…
俺、なに言ってんだろう？…あはは、俺の方が馴れ馴れしくって失礼な…」
俺が謝ろうとした時…彼女は身を乗り出して…
「そんな事ありません！！わっ…私…凄く不安で…受け入れてもらえるか…どうかも…
それに…知らない人が…兄になるって…言われて…怖くて…初めて会った時も…あんな姿を見たものだから…嫌われたんじゃないかと…」
初めてあった時にあんな姿？嫌われた？
「ごめんなさい！！あの事は言わない方が良いですよね…男性の裸

を見たのは初めてだったから…驚いて…」
初めてあった時に…俺が裸？おかしい…俺の記憶と話が合わない…俺らって…今日の葬式の時…会わなかったっけ？もしかして覚えてない？
「あの…冥乃さん？」
とりあえず…話を聞こうとしたが…
「冥乃ちゃん、もう遅くなるから、早くその野獣の部屋から出た方が良いわよ～」
タイミングが悪く…母さんの声が聞こえて…
「あっ…いま出ます！！では、雅春くん、また明日！！」
止める暇もなく…彼女は出て行った…
「まっ…いいか…いつか話せばいいんだし…」と俺は軽い気持ちで考えた。
俺は本をダンボールに入れ終えると、次に洋服を入れ…寝具のあたりで考えた…
俺の布団のマットだけど…どうしたら良いんだろうか？
シーツは変えるとして…屋根裏部屋にはベッドは無いし…
「なにをベッドで悶々しているの？」
そう考えていると、いつの間にか親父が部屋に入ってきていた！！
「気配を消して入って来るな！！それに悶々してない！！」
「だって…せっかく覚えたスキルだよ～鈍ったら困るよ～」
親父は胸を張りながら言うが…そんな泥棒スキル…いやストーカースキルは…
いる時がいつか来るかもしれないけど…普通の生活に入らないぞ！！
「そんな事より…雅春～新しい冥乃ちゃん用のベッドを通信販売で買ったから～このベッドは屋根裏部屋に持って行ってね～」
はい？この親父何を言いやがりました？
「ん？何か理解してない面だね～良いから、このベッドをてめぇの部屋に持って行きやがってください」
なっ…なんだ？急に親父の口調が…毒々しい棘が…

「親父…何をそんなに怒って…」
俺がそう言いかけたとき…俺の背筋が凍った…様な気が…した…
「どうしたんだい？僕に泥棒やストーカーと思った息子よ？」
…心も読めるのですか？お父様？
「う～ん…完璧じゃないけど…雅春の場合は、考えている事は顔に出るから完璧だよ？」
土下座とかしましょうか？
「しなくても良いよ～土下座なんて～それより…ほら、ベッド持って行くから、雅継はドアを開けて」
親父はそう言いながら、俺のベッドを担ぎ上げる
「え…良いのか？俺…持つつもりだったけど…」
俺がそう言うと…親父は申し訳なさそうな顔をして…俺は…
「別に俺の握力が弱くなったのは、親父のせいじゃねぇよ」
と言ってベッドの端を持った。
「親父はもう歳だからさ～俺も手伝うから、さっさと持っていこうぜ～」
親父は、少し苦笑いをすると…
「いい度胸だね～そんなに歳とか言うなら…今度キャッチボールでもする？」
と清々しいまでの笑顔で俺にそう言ってきたが…
「お断りだぜ！！握力が低下してんのに、親父の球なんて受けたら…俺の顔が潰れちまうよ～」
と丁重にお断りしたが…
「大丈夫だよ～一撃で意識を失うから～眼が覚めたら鼻の骨を戻している所だよ～」
と無邪気に言いやがる！！
「ふざけんな！！一撃で鼻をへし折る球を投げる気でいたのかよ！！鼻は麻酔が効かないから痛いんだぞ！！」
と俺が怒ると親父は笑い…俺も其れにつられて笑った…
親父がへこんでないか心配してくれてんだな…先輩が死んでしまっ

た事に…

「ありがとうな…親父…」俺は親父に聞こえるか聞こえないかの小さな声で礼を言った

１２．先輩との思い出２

親父はベッドを屋根裏に置くと…
これくらいで疲れるなんて…やっぱり…歳かな～なんて言いながら、部屋から出て行った。
俺に負担がかからない様に、親父が持っていたのを、わかっていたから、俺は何も言わなかった。
今日は疲れたな…俺も同意見だった…だから、置いたばかりのベッドの上に寝転がった…
そして…ダンボールに置いていたノートを見た。
「先輩…」
俺はそう呟くと…先輩の事を思い出した…

「おい…おい！！返事をしろよ！！ったく…もう一度言うぞ！！俺の名前は、鷲見連子だ！わかったら返事くらいしろよな！」
学ランを着た連子と言う奴は、これで何度目かもわからない事を俺の前で繰り返していた…
「…わかったよ…そんなに喋らなくても…一回言えばわかる」
あまりにも何度も繰り返すもんだから、俺は諦めて返事をした。
だが、それでも、鷲見連子と言う奴は、満足した様子は無く…
俺に話しかける…何をどうしたら良いんだ…と、俺は悩んでいると
「まったく…５０回続けていっても、わからないのか？」
やっと、自己紹介以外のことを先輩が話した。
「ちゃんと返事をしたのに…止めなかったのは、アンタだろう…」
俺は、そう話したが…
「そんな事、言ってたっけ？俺が期待した答えじゃなかったんだろう」
そんなわけのわからない事を言って…

「じゃあ…どんな返事が良かったんですか？」
とイライラしながら俺が言うと…奴は怒ったように、俺に指を向けると
「普通はだな！！名前を聞いたら、自分も答えるだろ？それくらいもわからないのか？」
その言葉に…俺は…頭に手を当てた…こんな簡単な事を…自分は忘れていたのか…
「そもそも…人が名のったら、自分も答える事を、最近の奴は…」
「月影雅継…俺の名前は、月影雅継だ…」
ぶつくさと文句を言う先輩に…俺は名前を告げると…先輩はニカっと笑い…
「改めまして…よろしくな、月影～俺の名前は自由に呼んでも良いぜ～」
と言い…俺の肩を叩いた…
いままで俺の傍に居ないタイプの人間だった…。
それまで…俺の傍にいた人間は…弱い者を倒し、強い者に媚びへつらう…そんな人間しかいなくて…俺はそんな世界で…一番強いと…そう信じて…こんな怪我をしてしまった…。
それに…自己紹介なんて…もう随分前にしたくらいにしか記憶は無かった…
「なあ～俺の事なんて言うんだ？なぁ～急に呼ばれても、わからないかもしれないからさ～呼んでみてくれよ～」
俺の首に腕を回し…締め付けるように力を込めて…くる！！
ああ、本当にこんな馴れ馴れしく凶暴なタイプは初めてだ…
「とりあえずさ～お前は一年だから…俺の事を敬意を込めて先輩って呼ぶ事が良いと思うんだよ～」
なんだよ！！それ！！好きに呼んで良いとか言って、自分で指示してるし！！
「それが良い！！そうしよう～月影は俺の事を先輩と呼べ！！それ以外は認めないからな！！」

しかも決定事項か…俺は…うな垂れた…
「おお～首を振ってＹＥＳの意味か～可愛い後輩だな～」
もうどうにでもしてくれと…そんな風に思った…
それから…先輩から…文芸部を紹介された…と言うことは無かった…
先輩は基本的に文芸部の部室には居ないらしい…って言うか…
今日この部室に居たのが珍しい事だったらしい…
「俺のような奴が居たら…迷惑がかかるだろう？基本的に文芸部が休みのときに俺は部室に行くんだけどな～」
と笑いながら…俺の手を引き…町へ行くと歩き出した…
俺は…この先輩はよく笑う人だと思った…。
なんで…迷惑をかけるとか…そんな事を考えるのだろう…
アンタは…充分に俺に迷惑をかけている！！そう言いたかったが…
なぜか俺はその事を言えなかった…

「先輩は…なんで…迷惑をかけるとか…そんな風に思ったんだろうか…」
俺は天井に手を伸ばす…
目頭が熱い…だが…涙は出ない…まだ泣くときじゃないのだろうか…
俺は体を起こすと…窓の外を見た…日はとうに沈み…
夜の闇に包まれた世界があった…だけど…空には月が…この暗い世界で…紅く光っていた…

だから…だろうか…俺は…外に出たくなった…

13．夜の月に誘われて

何のあてもなく…外を歩いた…
ただ…月が紅かったから…外に出たが…
肌寒い…やはり二月の夜は寒い…まだ、雪は降っていないが…雨が降れば、確実に雪だろう…
俺は、壁に身を寄せ…周囲を警戒する…
先輩を殺した犯人がまだいるかもしれない…殺人事件が起きたこんな夜に…
他に人がいる気配がした…

もし…こんな日に外にいるとしたら…それは…犯人か…
俺は身を潜め…気配を隠し…近づいてくる気配に集中する…
そして…そいつは…俺の視界に入った…
そいつらは、二人組みで…黒いに黒い帽子を着ていた…そう…警察だ…
警棒を片手に、周囲を警戒しながら歩いていた…
きっと、犯人を捜しているのだろう…
もし、見つかれば…犯人扱いされ補導される…だから、俺は息を殺して警察が通り過ぎるのを待っていたが…俺の耳に…信じられない話が聞こえた…
それは…警察の話…
「なあ…この事件って…やっぱり…2年か3年くらい前の…あの事件か？」
「2、3年前？その時まだ、本官は居なかったのでありますです！」
「そうだっけ？まあ…良いか…」
「どんな事件だったでありますか？本官は、非常に興味があります！」
俺もあった…このまま警官が去るのを見ていようと思ったが…

もし…先輩の事件に関係しているのなら…俺に何か出来る事があるかもしれない…
俺はそう思い…警官の後を尾行した…
「その事件だが…今回と同じ様に…あの公園で人が死んだんだよ…ナイフで胸を刺された状態でな…」
「今回の事件と同じでありますです！本官これは…もう事件の関連性がばりばりしますです！」
「そうだろう？模様犯と言う考えもあるんだがな…」
「それで、その事件の犯人はどうなったです？」
「その犯人か？実はな…」
急に警官が声を潜め、相方の警官もそれに耳をかたむけるように顔を近づける…
良い所で…声を小さくしやがって…俺はそう思い、ゆっくりと距離を詰める…
そして…
「まだ何もわかってないんだ！！犯人も捕まってないだな～！！」
急に警官が大声でそう怒鳴って…俺は驚いて飛びのいた時に、足音をたててしまった
「誰です！！」相方の警官が、俺の隠れている方向を振り返る！！
ヤバイと俺は思った…捕まったら…職務質問…いや…補導だ！！俺はすぐに逃げようと思ったが…
「誰だ！！急に大声を出しやがって！！時間を考えろ！！」
俺の隠れていた方から、怒鳴り声がした…近所の住人のようだ
「やべぇ！！時間を考えて無かった！！逃げるぞ！！」
近所の住人に怒鳴られ…警官の先輩が走って逃げ出す！！
「待って欲しいのでありますです！！」
そして、こちらを警戒していた相方の警官も走って逃げ出した…
俺はそっと息を吐いた…
「助かった…あの程度で驚くなんて…親父の言うとおりだったな…」
せっかく覚えた技術を腐らせたら、必要なときに役に立たないなん

て…
「だけど…先輩のような殺人事件は…前にも遭ったって…これに関連しているかを調べたら…犯人が…わかるかもしれない…」
知らない間に拳に力が篭る…
「先輩…俺…探しても良いですよね…先輩を殺した奴を探しても…」
だけど…俺は…先輩を殺した奴を見つけて…何をしようとしたか…わからない…
だけど…それでも…俺は…先輩を殺した奴を探して…何かをしたかった…
たぶん、俺は話を聞きたかったのかもしれない…なぜ先輩を殺したのかを…

１４．ある男の自伝

その体験は、今…思い返しても、恐ろしい体験だった。

それは、残業を終え…缶ビールを飲みながら帰っている時の出来事だった

…何かが走る音を聞いて、私は立ち止まった。

丁度電灯の下で…立ち止まり、明るさのせいで周囲がよく見られなかったが

暗い闇の中を…何かが走っていた…

其れは…誰か…いや…その存在は…何かは、わからない…

ただ…それは…其れの意思だけが…漏れる様に…溢れていた…

死んだ…死んだ…連子が…死んだ…

また、失ってしまった…守る者を失ってしまった…

認めたくない…認めたくない…守るのが私の役目なのに…守るのが僕の役目なのに…

守護するのが俺の役目なのに…我は失った…守れなかった…私たちは…また…主を守れなかった…

憎い…憎い…この身が…憎い…苦しい…苦しい…この身が苦しい…

誰が殺した…誰が殺した…

私たちから…主を奪った…我らから存在意義を奪った…

許さない…許せない…殺す…殺す…僕たちの主を殺した存在を…

その暗い感情は…誰に向けられたものか…わからない…

だけど…この暗い感情は…何かを探していた…何かを…知らない何かを見つけようとしていた…

その何かの姿は…わからない…見る事は出来なかった…
ただ…そのわからない存在の手には…暗い夜の中でも…が…不気味に光っていた…
その手の中の…それは…三日月の様な形をして…闇の中を動いていた…

そして…それは…動きを止め…何かを見つけた…その…何かとは…今まで…其れを見ていて…動けずに立ち止まっていた私だ…

何かが立ち止まって…その手に持つ物が…やっとわかった…それは…ナイフだった…
銀色に怪しく光るナイフ…こんな暗いのに…それは…光っていた…
まるで…自ら発光しているように…私は…其れに話しかけようと…手を伸ばした…
ゴトン……
何かが落ちたのか…私は周囲を見る…私は何も落としてはいない…
私が見える範囲には…何も落ちてはいない…
そう…見える範囲には…だ…つまり、見えない範囲…
私は、恐る恐る…伸ばした腕を見る…見えなかった…
闇は私の腕に纏わりついて…見えなかった…
本当にそうなのか？本当に暗いせいで見えないのか？
周囲では…こう考えている間に…
バチャチャチャ…と何か液体が流れ出ている音が…其れは…私の足元にまで来た…
黒い液体…鉄臭く…吐き気がする…口を押さえようと…反射的に、伸ばしていた腕で口を押さえようとしたが…出来なかった…
やっぱりか…私はそう思った…やっぱり…こんなシチュだと…こう言う目に遭うよな…
私はそう自分に言い聞かせた…そう自分に言い聞かせなかったら…取り乱して、死ぬ…

幸いな事に痛みは無い…それに…もう…足音も…あの銀色のナイフも見えなかった…
もう大丈夫だ…そう自分に言い聞かせたとき…
ふと…頭上が暗くなった…
勘弁してくれ…私はそう思った…私は知らない…私はこうやって死ぬなんて…おかしい…
私は恐る恐る…上を見上げた…
何かが…私の目の前に居た…いや…眼前だ…目のすぐ先に目が見える…もう嫌だ…
私の意識は…維持する事を止めてくれた…もう…これ以上怖い思いをしなくて済む…
私は幸福感と共に…眠りについた…

「君！！そこで寝ていると風邪を引くよ！！」
誰かが顔を叩く…もう怖い思いをしたくないのに…顔を叩くな…
「本官が起こすでありますです！」
「わかった…はやく起こしてくれ…」
威勢の良い声が…私の顔を叩いていた者に言ってくれたんだろう…
このまま寝かせて…
額に冷たい筒が圧し付けられる…なんだこの冷たいのは…私はその冷たさに眼をあけた…
いつの間にか太陽が昇っていたが…それよりも…気になるのは額に向けられた物だった。
それは…銃だった…化け物はついに銃まで待つ時代になったのかと思ったが…
その銃を持っているのは警官…これは至極当たり前に所持を認められた存在
「これを使えば一発でありますです！」
なんて言いましたよこの警官！？

「止せ！！そんな事をして…ただで済むと思うのか？」
相方の警官がそう言うが…大丈夫です！と言い切られ…なにやら考え込んでいる
止めろよ！！馬鹿！！と思いながら、私は両手を上げ…
「待ってくれ！！撃たないでくれ！！私は眼を覚ました！！」
と言ったが…この警官…
「起きたと言う人間ほど、二度寝をするです！空砲ですから、喰らうＤｅａｔｈ！」
私は眼をつぶった！！こいつ…いま…Ｄｅａｔｈ（死）って言わなかったか！！
「やっぱどう考えても危ねぇ！！」
そう声が聞こえ…私の耳を何かがかすった…
ビスッ！！
そして…おまけと言わんばかりに…地面に何かが当たった音がした…
恐る恐る眼を開けると…警官が持っていた銃は白い煙を上げていた…
「何をするです！本官が起こそうと…」
「馬鹿か！！どう考えても寝ている民間人に銃を押し付けるのは間違いだろう！！」
「空砲でありますから大丈夫です！」
馬鹿！！空砲じゃねぇよ！！と思いながら…私はまた意識を失った…
後日…私は、この警官を訴えようと思った…。
だが…私が見たあれは、なんだったのか？眼を覚ましたとき…私の腕は無事だった…
酔っ払って、ビールの缶を落としたのを腕と勘違いしたのか？
それに…あの液体は…ただのビールと考えると…納得がいく…ついでだから、酒は止めようと思った。

本官は本を閉じたでありますです
「おい、熱心に何を読んでいたんだ？」
「本官が本を読んでいると、先輩が声をかけてきたであります」

「いや、そんな事…口に出さなくても良いが…でっ、何を読んでいたんだ？」
「知人が書いた本があると、友人に教えられたでありますです」
「そうか？（こいつに友人が居たんだ）」
「失礼でありますです！本官にも手駒はあるでありますです！それより、本官はちょっと所用があって有休を取るでありますです！」
「まあ…別に構わないが…って！！何で銃を手入れしているんだ！！しかも、それ保管室の銃とダムダム弾じゃねーか！！止めろ！！どこに行くかわからないが！！止せ！！」
「放すでありますです！！本官はこの著者に…」
「だから！！銃は止めろ！！この前減棒されただろう！！」
「取り押さえられながら、本官は冷静に著者への警察に対する恩義を理解してもらう計画を考えてい…」
「だから、止めろ！！」
そして、二人の警官が去って…一冊の本が取り残された…
その題名は…私が警察を起訴した理由…
後にこの著者は、何者かに闇討ちに遭い、“です”と言う単語を聞くと狂ったように暴れだすようになったという…
そして、この事件の担当の警官は…
「もう駄目ですです！」と言って、迷宮入りとなった…

15．決意の朝…だったら…

朝だ…あの警官の話を聞いた後…俺は家に帰った。
これ以上動き回っても、危険だと判断したからだ…
さて、今日は学校だから、あまりのんびり、出来ないが…休み時間にでも…話を聞いたりしてみるか…
そんな事を考えながら、寝間着を脱いでいたら…ドアがノックされた
「開いているよ」
と答えたが…入ってきた人物が誰か気づき…俺は慌てて布団で体を隠した。
「おはようございます…まだ寝ているんですか？」
やはり冥乃ちゃんか…俺は顔だけ出して、起きていると言った。
だが…
「レンもそう言って、よく二度寝していたんですよ！！さあ、布団を脱いで！！」
とにこやかな笑顔で俺の布団に手を…
「待ってくれ！！今は朝だ…わかるだろ？」
俺は片手を突き出して待ったのポーズを取る…
「ええ、レンもよく言っていました…」
えっ？先輩も？朝だから？あれ？おかしいな…なんで先輩が朝に…
「朝だから二度寝は基本なんでしょ？あいにく、春夏さんに、朝食だから連れて来るように言われてるんです！」
そっちの意味か！！いや、マジ待ってくれ！！と思いながら俺は布団を掴むが…
俺の握力は事故で持久力が無い…だから…次第に力で負けていき…
本日、一回目の悲鳴が…家中に響いた…

「ごめんなさい…男の人って…朝はそうでしたね…漫画でそんな事

…書いていたのに…」
「いや、良いよ～冥乃ちゃんだって、早く家に馴染もうとしてやったことなんだし…」
俺が味噌汁を飲んでいるときに親父がそう言った…
「なんで…親父が答えるんだよ…見られたの俺なのに…」
「え？雅春こんな健気な冥乃ちゃんを許さないの？」
「別にそんな事を言いたいんじゃなくて…何で親父が答えるのかを知りたいんだよ」
俺がそう言うと、親父は少し考えるような動作をして
「さあ？僕は別に構わないから～気にしないでよ～」
そんな馬鹿なことを抜かしやがった！！
「まったく！！親父の頭の構造がどうなっているのか知りたくなったよ…」
もはや怒る気力すら沸かなかった…
「うん？どうしたの？今日は調子が悪い？」
俺は舌打ちしそうになった…この親父の感の鋭さに…
「俺もう学校に行く時間だから…行ってきます！！」
これ以上、何かを感ずかれる前に、俺は鞄を取り家から出ようとしたが…
冥乃ちゃんはのんびりしている…なぜだ？
「冥乃ちゃん…そう言えば…何年生だっけ？」
そう言えば…歳も聞いて無かったな…
「えっ…中学3年生です…だから、自宅学習で…す…」
自宅学習か…羨ましい長期休暇だ…
「受験は終わった？」奥から母さんがそう尋ねてきた。
「はい！！…あとは…公立の学校だけです」
「へぇ～って…もう時間無いし！！冥乃ちゃん！！また後でゆっくり聞かせてね！！」
俺はそう言うと…一気に玄関から飛び出し…走り出した！！

学校までの距離は時間にして１０分の所にあるが…それは、何もなかった時だ
それに、今の時間は８時１０分…のんびりしている時間は無い！！
俺は、重心を低くし…走り出した！！
塀の上に飛び乗り…柵を越え…番犬をかわし…走る…
途中警官が、銃を寝ている人の額に押し付けている姿を見たが気にせず走…
ズガァン…
銃声が聞こえた気がするが俺は走った！！

「到着！！」俺は校門の前で足を止めた。
周囲には…人だかりが出来ていて…俺は…ため息を吐いた…
マスコミが…道行く生徒に取材をしていたのだ…
「君！！鷲見連子って生徒を知っているかい？」
その中の一人が俺に話しかけてきた…ウザイ…無視して行こうと思ったが…
だが…
「これってさぁ～3年くらい前に遭った事件と似ているよね～
それについても、何か教えてくれないかな？」
それは…俺が知りたかった情報だった…だから…俺は無視するのを止めた
「教えてもいいけど…その代わり…3年前の事件を…俺に教えてくれたら…」
断られるものだと思っていた記者は、少し呆然とすると…
「それくらいで良いなら、御安いものさ！！その前にもうすぐ授業だろ？この名刺を渡すから学校が終わったら、連絡を頂戴ね！！」
そう言って、記者は去って行った…
俺の手に…名刺を残して…そして…俺は、校門へ向かおうとしたが…
俺のやり取りを見ていたほかの記者たちが…俺の前に現われ…
嫌な予感がした…

「私も！！教えるから！！」「俺が！」「取材！！」
と押しかけてきた！！

１６．手がかり

俺は教室に入って早々、机に倒れ伏せた…
「雅(みやび)だらしないな、そんな風に倒れるなんて」
机に倒れた俺に…話しかける人物がいた…っていうか、みやびって呼ぶな！！と思ったが…その声は、物静かな声で、それでいてよく透き通る声だ…

俺をみやびと呼ぶ人物は、この学校に一人か二人しかいない…だから…
「舞華か…」俺はすぐにその人物がわかった
学校で有名な朽木シスターズと呼ばれる双子の片割れだ

俺は見上げるように、舞華の顔を見る
身長１８０…（俺は１７５）俺よりも背の高い妹の朽木舞華(くちきまいか)
スタイルも良く頭も良い…が、人付き合いの苦手な奴だ…
普通にしていたら、もてるだろうが…当の本人は、色恋沙汰には、興味が無いらしい。
だが、そんな情報は、今は関係ない。

「別に良いだろう…俺は疲れてんだ…」
机に倒れ伏せたまま、話す相手じゃない…首が痛くなって、俺は机にうつ伏せになる。
「鷲見先輩の事か…」
そう舞華は呟く…舞華も、先輩の友人で…紹介された子で…やはり先輩と同じ様に…少し人から距離を取る様な態度だったが…今は、普通に接してくれる。
「別に…そんなんじゃない…疲れているんだ…休ませてくれよ…」
本当は舞華も寂しいんだろうが…悲しいだろうが…

それでも俺を心配してくれる彼女に、迷惑はかけられないと俺は思っていた…
だから…これ以上…負担をかけたくなかった…

だから、このまま、黙り込もうとしたが…
「そんなに、ウジウジしてたら、ボクが迷惑なんだよ！！」
五月蝿いのが来た…
「なんだ！？お前は隣のクラスだろう？なんで、俺がお前の迷惑になるんだ？」
その五月蝿いのは、舞華の双子の姉、俺は視線を下げて朽木姉を見た…
「見下すのは止めろ！！ボクは上から見下されるのが大嫌いなんだ！！」
俺は…この小さい奴が…苦手だ…
朽木姉…朽木刹那（くちきせつな）
身長は１４５センチ…スタイルは…樽…じゃなくて、土管…
小さくても口喧しく…舞華と違って…喧嘩腰で、成績も中の下…むしろ…上の上の舞華に教わらなければ、下の下だろう
「こぉらぁ！！今、失礼な事考えただろう！！また、ボクの事をチビとかバカとか！！」
ちっ、やけに勘が鋭い小動物だ…
「今…チッって…チッ、言った！！酷いよ！！この外道！！」
「言ってないし、俺はそんな事もしてない！」
心の中で言ったかもしれないが…現実ではしていない。
「嘘だ！！ボクを見下しているんだ！！いつも、おまえは、ボクをチビだって…土管だって…そう思っているんだ！！」
そう言いながら、朽木姉は、俺の脚を蹴ってくる…
まあ、小さい攻撃だから、痛くはないけど…
こいつは確実に急所を蹴りつけていたのは、俺は知っている…
これだから…道場の娘は…要らない事に技を使うんだ…

俺は、打点をづらしながら、ある程度蹴りを受けて…とりあえず…
舞華を見るが…
朽木姉がやって来た事により、周囲の視線が気になってそれどころ
ではない…らしい…

仕方ない…あまり使いたくないが…あの方法で行くか…
母さんが…ここ一番に使えと言われた…対朽木姉用の技を…

俺は、蹴りを受けながら、立ち上がると…
朽木姉は、ビクッと小動物のように身を縮ませる…
そして…俺は朽木姉の頭に手を伸ばそうとすると、朽木姉は殴られ
ると思って眼をつぶる…
俺は、腰を屈めると、その頭を撫でた。
朽木姉が眼を見開き、さらに俺が視線を合わせている事に驚いてい
た…
「そんな事は無い…俺は、お前の事を可愛いと思っている（黙って
いればな）」
そう言うと、朽木姉は顔を真っ赤にして…俺の腕を叩き、距離を取
った後…
「あっ…当たり前だ！！ボクは可愛いんだから！！今頃気づいても
遅いんだぞ！！ばーか、バ～カ！！」
そう指をさしながら言った後…舞華姉は走り去ってしまった…

恐るべき母さんの技…だけど…なんでそんな対象者を限定した技を
教えたんだ？
格闘術や尾行術とか、戦闘系の術は親父が教えてくれたけど…こん
な訳のわからない分野の口説き文句？は、母さんが教えるが…よく
わからないな…

まあ、これでゆっくり休める…そう思ったが…

「雅…お前…そうか…そうだったのか…」
傍に居た舞華が…青い顔でそんな事を言って…席に戻っていったが…
周囲の人間の反応が…ものすごく微妙な感じがした…
（もつれ…しまい…さんかく…ろり…ふたまた）
変なざわめきの中…俺は…眠る事を最優先させた…。

17．思い出

ボクは教室へ走った。
あいつに、あんな事を言われるなんて思っていなかったから…
全身が熱い…可愛いって…ボクに言ってくれた…
あいつと初めて会ったのは…僕のクラスに転校してきたとき…
あいつと初めて会話したのは…それから三日後…
珍しく道場に遊びに来たあの連子の連れだった…
「おう、朽木姉～ちょっと相談があるんだけどさ～こいつをおまえの所の道場で鍛えてくれないか？」
連子はそう言いながら、ボクの所に来た…
その頃のあいつは、腕に包帯を巻き…生きる為の根本的な本能が欠けた様な訃抜けた男だった。
そんな奴が…ボクに初めに言った事が…
「小さいな…」
そう…いきなりボクを小さい発言！！普通の人なら相手の気にする事を言わないって言うか、本能的に察するはずなのに！！あいつは…ボクに小さいって！！堂々と言いやがった！！
しかも…同じクラスだったのに…まったくボクに気づいてなく…
「一応、朽木姉は、おまえと同じクラスだからな…まあ、お前の事だ、話してないだろ？」
「話した事ないよ！！こんな礼儀知らず！！」
ボクがそう言うと…あいつは…
「あの五月蝿いのか…小さいから声だけしか解らなかった」
なんて言いやがった！！しかもそれを本人の目の前で言うか！！そりゃ…みんなの発育が良いのは認めるけど…ボクだって…いつかは…舞華みたいに…だからって…
ボクは、あいつに飛びかかろうとしたが、連子が庇うように間に出る。

「おいおい、そんなこと言ったら、朽木姉に失礼だろ～すまねぇな～本当の事だから気にするなよ」
もうボクは怒りに身を任せた
「一番礼儀を解ってないのは…おまえだ！！」
ボクは連子に殴りかかった！！
「なんで！？俺が！！」
「あんな事を言って理解してないのか！！」
ボクの拳が…連子の腰に当たる瞬間…
「ほぇ！？」
急にボクの視界が蒼空を写し…体も重力を…そう…僕はいま投げられている…
ボクの体は、反射的に体制を整え、何とか無事着地した。
一体…誰がボクを投げた？
ボクは愚かにも…その事を考えてしまった…
誰が投げたかなんて…もう理解しているのに…
「おい！！大丈夫か？月影！！投げる事は無いんじゃないのか？」
「先輩が…危ないと思った…あれは…急所を確実に…」
後ろからそんな話が聞こえる…やはり…あいつがボクを投げたのだ…
屈辱だった…怪我人に投げられ…そのことに反応し切れなかった自分が…
だから…ボクは…後ろを振り向き…
「これで勝ったと思うな！！ボクはこの道場で弱いんだ！！舞華にでもこてんぱんに負けてしまえ！！」
そう言って逃げ出してしまった…
これが、ボクの因縁の戦いの始まりだった…

それから…リハビリとか言って…あいつは連子と道場に遊びに来るようになった。
初めは警戒して近づこうともしなかった舞華も…いつの間にか…あ

いつと仲良くなっていた…
ボクだけが…馴染めずにいた…。
そんなある日…ボクは…町で…不良に囲まれた…
いつもなら…そんな事に…苦戦するボクじゃないが…この日は…稽古で足を挫いて…
戦う事も逃げる事も出来なかった…と言うよりも、事の原因はアイスを食べながら歩いていて、ちょっとミスって…相手の服を汚しただけなのに…
「このガキ！！小学生だからと言って許されると思うなよ！！」
中学生に言われるなんて…思わなかった…
「俺の制服をどうするんだ！！チビ！！」
「侘びに、おまえの姉ちゃん紹介しろよ～おまえと一緒に可愛がってやるからよ～」
アイスをぶつけた負い目があるからボクは耐えていたが…
チビとか…お姉ちゃんとか…可愛がる？とか言われて…もう我慢の限界が突破していた。
「ボクは、これでも高校生で！！お姉さんだ！！」
ボクは手近な不良に殴りかかるが…
ポス…ポス…と即ダメージが与えられない…ボクは力が無いから…急所を突いても…即ダメージは与えられない…
次の日激痛に苦しむだろうが…ボクは…いま怒っているんだ！！
だから…いま痛がることは無いはずなのに…
「いてぇ～な～骨折れちまった…」とボクが足を叩いた奴は肩を押さえる…
「うわっ…酷いな～これは、治療費がいるな～」
奴らは…わざと痛がってボクから…お金を奪おうとしているのか？
最低な奴だ…ボクは…こんな最低な奴に…負けている…
そして…そんな最低に勝てないボクは…どこまで惨めなんだろう…
ボクは腕を掴まれる…
「どうしたんだよ？さっきまでの威勢は？おい？…こいつ震えてる

ぜ！」
泣きそうだった…
「泣くぜ～こいつ泣くぜ～」
泣きたくない…でも…悔しい…悔しいよ…
「なーけ！！なーけ！！」
嫌だ…泣きたくない…泣きたくないよ…
「うっ…うっ…」
我慢しろ…我慢しろ…泣くな！！泣くな！！
「泣くぞ～泣くぞ～」
もう…我慢が…
「ぎゃ！！」
限界直前…誰かの呻き声で…奴らの動きは止まった…
「泣け泣け聞こえて…此処まで来たんだが…何やってんだ？」
アイツだった…アイツは…不良の一人を地面に叩きつけていた…
「そんな小さい子を虐めて…さっ！！」
そう言って、アイツは…ボクを助ける為に…奴らと戦った…
だが…お約束と言う展開で…ボクは人質にされ…
あいつは…ぼこぼこに殴られた…そして…無様に地面に倒れ…
もう駄目かと思ったとき…警察が…走り込んで来た！！
アイツは…警察を呼んでいた…それだったら…安全な所で待っていれば良いのに…
アイツは…ボクを助けようとした…
そのときから…だろうか…ボクがアイツを気になり始めたのは…
いや、アイツのことは、前から気になっていた…この事件は…ボクの気持ちを気づかせたのだ…

「刹那ちゃん？どうしたの？」
ボクは急に声をかけられ、びっくりした
「もう授業始まるけど…早く行かなくていいの？」

舞華の担任の先生だった…ボクは慌てて周囲を見ると…
ボクは教室を通り越え…端にある職員室まで来てしまっていた！！
「はっ…はい！すぐに戻ります！！」
ボクはそう言うと、教室を目指して走り出したが…
「刹那ちゃん！！廊下を走ってはいけないですよ！！」
注意されてしまった…これも全部！！アイツのせいだ！！
ボクは心の中で文句を言ったが…頭を撫でられた感触を思い出し…
顔がにやけてしまった…今日は良い日だ～ボクはそう考えてしまった…
友人が死んだのに…ボクはそう考えてしまったんだ…

１８．月影家

私は、急いで走っていく雅春を見送った…
「雅春は、もう学校へ向かったみたいだね」
いつの間にか背後に居たお父さんさんがそう言った。
「はい、さっき慌てるようにして…お父さんは仕事に行かなくて良いのですか？」
もう八時を過ぎているのに、この人はのんびりしていた。
「雅春さんは、自営業もとい、自宅警護に家事があるから良いのよ」
お母さんが、いつの間にか現われてそう言うと
「なんかそれ、僕が無職みたいじゃない？春夏だって自宅及び周辺地域警護じゃないか！」
「ああ、そうね～、う～ん…思い切って、大学でも通ってみる？華の青春時代をもう一度謳歌するのも…許されると思うけど…」
二人の会話を聞きながら…私は震えていた…
「お父さん！！お母さん！！二人とも仕事をしていないって…家の家計簿…どうなっているんです！！」
鷲見家では、いつも私が家計簿をつけていた…レンがつけることが出来ないから…
「ああ、お金の事なら心配しないで～僕たちが前に働いていた分のお金がたくさんあるから…世界一周なら…３０以上可能だね」
３０回以上…信じられなかった…だけど…世界一周って…ランクも…
「ちなみに豪遊クラスでよ、あの時は本当に仕事を頑張っていたからね～」
お母さんがそう補足したけど…
「御仕事って何をしていたの？」
そんなお金が入る仕事なんて私には想像できなかった
「国家公務員みたいなものだね～ＳＰに近い役割だったよ」
懐かしいそうな表情をしながら…お父さんは言った…

「あの時の貴方は…格好良かったわ…黒いスーツとサングラスが良く似合って…」
お母さんが惚気る様にお父さんにもたれかかる。
「春夏とは仕事中に出会ったね～」
私の前で二人はいちゃつきだす…
「だっ…だめよ…雅継さん…娘が…見ているわ…」
お母さんが力無くお父さんに抱きしめられながら離れようとするが…
二人は見つめ合っている…
「お父さん！！お母さん！！ちょっと出かけてき…」
二人の邪魔になりそうだったから、私は慌てて出て行こうとしたが…
「ちょっと！！冗談よ！！冗談！顔を赤らめる貴方が可愛かったから…もう少し話を聞いてよ…家族になるんだから…」
お母さんが顔を赤くしながら呼び止めた…
「もう…春夏…恥ずかしい屋がりさんだからね～それより、玄関で話すより…居間に行こうか～」
そう言いながら、お父さんは今に向かった。
「ありがとう、冥乃ちゃん…助けられたわ…」
お母さんは落ち着かせるように深呼吸をして…
「私…あの人には敵わないわ…惚れたら負けよね…よく解っているのに…」
そう言う…お母さんは…恋する乙女にしか見えなかった…
見た目も心も高校生にしか見えない…だけど…それなのに…この人には…
その事を…負けたことを喜んでいるように見えた…。
「恋させる経験は豊富だけど…恋する経験が足りないのよね…経験不足で私は嬉しいけどね～それって、あの人以外に恋をしないって意味にもなるから～さあ、行きましょうか
雅継さんが待っているわ」
ようやく顔色も落ち着き、私たちは、居間へと向かった。

「家族になるんだったら…雅春の事を話さないといけないと思ってね」
居間に御茶が用意され、お父さんが話し出した…。
「その前に…君は…雅春の事故の話は聞いたかい？」
「握力の持久力がなくなった…事故ですか？」
ダンボールを持ち上げるときの雅春君を思い出した…
取っ手ではなく、下から持ち上げていた。
「あれは、雅春が己を過信…慢心して起こった事故だったんだ」
とても辛そうだった…
「僕たちは、雅春に生き残る強さを持って欲しかった…
生き残る強さを…その為に、僕の持つ技術の一部を伝授したりもしたし…」
「私が持つ技術も教えたわ…人とのかかわり方とか…」
二人は御茶を一口飲むと…
「私たちの技術で…雅春は…力が正義で自分が一番強いと錯覚させてしまった…」
「そして、事件が起きて…雅春は大怪我をした…手を出してはいけない領域まで行ってしまった…その結果仲間に裏切られた…だから、この街に引っ越してきたんだよ」
つまり…月影一家は…その事件で仕事を止め…この街で新しい生活を始めたのだ。
「事件の詳細は、いつか知る事になると思うけど…これだけは…信じて欲しいんだ…
僕たちは…雅春を大切に思っている…今も昔も…そして…これからも…」
まだ出会ってから、一日しか経ってないが…本当に雅春くんを大切に思っていると理解できた。
「これ以上は言わないけど…事件の事は、雅春がいつか話してくれる時が来るかもしれない…だから…それまで、雅春を支えて欲しい…雅春は、連子ちゃんを失って、不安定になっているから…無茶を

しないように…止めて欲しい…」
お父さんはそう言って頭を下げた…
だけど…私に何が出来るかわからなかった…

19．俺が何をした！！

俺が眼を覚ますと…まだ微妙な空気が続いていた…
「どうしたのかな？皆さん…この微妙な空気は…私って何か不味い事しましたか？
どじっちゃいましたか？教えてください！！こんな空気で学級崩壊したら…」
いつの間にか入ってきた先生もこの雰囲気に困惑していたが…急に喋るのを止めると…
急に教室を歩き出して…俺の近くをうろうろし始めた。
「この辺に…学級崩壊の原因が…どうにかしないと…」
その目は血走っていた…そして…俺の前に立つ…俺は息を殺した…
先生が…俺を見ている…俺を見て…いた…
それは、一秒か十秒かわからないが…俺の中では…一時間にも感じた…。
そして…先生は…俺から視線を逸らすと…
俺の横を通り…肩を掴んで…
「自首しなさい…今なら…皆…あの変態行為を忘れてくれます！」
なんだよ！！いきなり変態行為決定！！しかも、俺のせいか！！
「いま…自分のせいか、なぜ解ったのか…考えましたね！！
それはこの微妙な空気の中心源が貴方だったので解りました！」
俺はため息を吐いた…
「待ってください…俺じゃないで…す…よ？」
そう否定しようとしたが…俺がそう口にする前にこの微妙な空気は…より深い味を出し始めて…俺は言葉を止めた…
俺なんですか？この状況を作ったのは俺なんですか？
「見なさい！！この空気の微妙さ…貴方は何をしたんです！！
この微妙な空気を察するに…恋臭が…いき遅れの私に対する…危険臭がします…」

なんだよ…その臭いって…
「ＨＲが終了したら、じっくり話を聞きます！！」
俺はそう言われ…解放された…
そして、ＨＲ終了後…俺は本当に連れて行かれ…俺が教室に入ってきたときの状況を吐かされた…
「なるほど…いや～よく解りましたよ～道理で刹那ちゃんが～」
ニヤニヤしながら先生は言っていたが…俺には、なぜここで朽木姉が出てくるのか解らなかった…
「じゃあ、先生は満足したから、教室に帰りなさい！授業中でしょう！」
と容赦なく教室へ行けといわれたが…授業もう始まっている…
俺は恥ずかしく…教室に入る嵌めになった…
俺が何をしたんだ…俺が一体何を…教室に入った瞬間…またあの空気が俺を襲った…
なぜこうなったのか…考える事にした…しかし、考えたが、何もわからなかった。
とりあえず…状況は流れるのを俺は待った…
そして、事は動いた…。
昼休み…俺はいつものように、中庭に居た。
この学校は、昼飯は購買部で買うか、学食か弁当だ。
そして、俺は…
「おい！これ美味いから食べてみろよ！ボクの自信作なんだ」
えらくテンションの高い朽木姉と…
「どうせ…料理を作れない…でかいだけの女は…これは…私が作った自信作だが…喰わぬか…？」
えらくテンションの低い舞華に、おかずを突きつけられた…
「じっ…自分で喰える…から…」
俺は、器を突き出す二人に言うと…
「なんだ～ボクに食べさせて欲しいのか～良いだろう～ありがたく喰え～」

朽木姉はそう言って綺麗に焼けた卵焼きを箸で掴むと…
「あ～ん、ほら、あ～～ん！！ねぇ…意地悪しないで…口をあけてよ…」
となぜか涙目で俺に言って…
「雅…私も…食べさせてやる…口をあけろ…」
なぜか其れに触発されるように、舞華も…炭になったソーセージらしきものを俺の口に押し付けてきた
「舞華！ボクが喰わせるのに！！邪魔をするな！」
「私も…雅に喰わせたいんだ…姉さんの言う事でも…聞けない！！」
そして、二人は争い始めたが…そんな俺の様子を見ている周囲は…
（ふたまた…しまい…にくい…ねたましい…ご愁傷様…）
そんな声が聞こえた…
これって俺が悪いんですか！！！先輩！！
俺はそう心の中で悲鳴を上げた…
（知るか！！まだ俺の葬式が終わって一日しかたっていないのに…なんで誰も鬱にならねぇ！！）
そう…先輩の声が聞こえた気がしたが…俺は…気にしなかった…

２０．お昼の弁当

とりあえず…あの苦しい時間を終え…俺は…口の苦々しさを耐え…御茶を飲んだ。
俺は、朽木シスターズの二人に弁当を作ってもらっている。
なぜ、作ってもらっているのかと言うと…俺がまだ朽木姉と出会って間もない頃だ。

俺は先輩と街を歩いていたら、先輩が急に居なくなってしまい、仕方なく周囲を探していると…路地裏で複数の不良が女の子を囲んでいた…
俺は素早く携帯を片手で操作すると警察に連絡したが…俺はその囲まれている女の子を見て…携帯を落としてしまった…
「なんで…朽木姉が…」
初めて会った時に、先輩に殴りかかっていた小さい奴…
先輩が、良いリハビリの場所があると言って連れて行った武術の道場の娘の双子の一人だった。
先輩に殴りかかった時のあの瞬発力が、あれば、こんな不良程度、楽に逃げるなり、倒す事が出来るのに…俺は冷静にそう考えたが…
「泣け～泣け～」
奴らは…容赦なく朽木姉を追い詰め…あの朽木姉は…とても辛そうで…俺は…
気がついたら…飛び出していた…
身近な不良を地面に叩きつけて…俺は…何を言ったか…覚えてないほど、頭にきていた。
その結果…俺は自分の身体能力の衰えを明白に理解する事になった…
それまでの俺なら…奴らが朽木姉を人質に取る前に…しとめる事が出来るはずなのに…
俺の攻撃は一撃で奴らをしとめる事が出来ず…時間をくい…朽木姉

を人質に取られてしまった…
もう容赦ないくらいに蹴られた…踏まれた…折れてた腕を踏まれ…
また治療期間が延びた…まあ、呼び出していた警察のおかげで、新しい骨折とかは無かったのは幸いだった。
というか、大抵の攻撃は受け流していたけど…流石に骨折していた腕だけはそうはいかなかったから、悪化しただけの話である。
まあ、そのお詫びに朽木姉が作ってくれているのだが…なぜか、舞華まで作ると言い出して…結構良い感じで幸せなんじゃないかなって思ったんだが…二人とも可愛いし…
でも…朽木姉が料理上手で…舞華の料理が炭とは驚かされた…少しづつは改善されてきてはいるが…まだ炭の領域である…
まあ…今日のような事は、前にもあったが…そのときは腕を骨折していたから、無理やり喰わされたけど…また…あんな恥ずかしい目に…
まだ半年も経ってねぇんだがなぁ！！（俺の死からは3日も経ってねぇぞ！！）
先輩の声が聞こえた気がしたが、気にしない方向で…
そう言えば…一度、先輩も混ざってきたな…弁当を持ってきて…あの時も恐ろしかった…
無理やり口や鼻に食べ物を押し込められ…しかも…穴と言う穴に詰め込もうとしたあの恐怖…狂気の沙汰だった…
何が人間をあそこまで追い詰めるのだろうか…むしろ…なぜ俺がその狂気の被害者に…
「おい！片付けているのに、何でお前は座りっぱなしなんだ？」
いつの間にか、いつもの調子に戻っていた朽木姉が俺に話しかけてきた。
「ああ、何で弁当を作ってもらっているのか思い出してた」
俺は朽木姉にそう言いながら、鼻の穴に詰まっていた炭と卵焼きを吹き出した。
「まあ…あの怪我はボクのせいだったから…気にするな！！もう作

る弁当が一つ増えたところで、手間は変わらないから…気にするな！ボクは気にしてないから良いんだ！！」
俺はそんな朽木姉の言葉が嬉しかった…
ふと朽木姉の目が合って…朽木姉は顔を背けた？
俺は、なぜか朽木姉に手を伸ばそうとしたが…服の裾を掴まれている事に気づき、
後ろを振り向くと…
「雅…私も作っているんだが…私には感謝は無いのか？」
なんでかな～いつもなら、此処まで自己主張しないのに…涙目で…
「ああ、感謝している…よ…少しづつ料理も上手になっているし…
（まだ炭だが）」
俺がそう言うと、いままで涙目だった舞華は、急に笑顔になって…
「む～！！」
何で次は、朽木姉が機嫌を損ねるんだ！！
そんなやり取りがしばらく続いた。

21．あの名前

霧摩（きりま）　司（つかさ）
尾田（おだ）　史一（ふみかず）

俺はこの名前を思い出した。
先輩のノートの書かれていたこの二人の名前…
舞華と朽木姉はその二人を知っているのだろうか？
俺は二人に聞く事にした。
「あのさ…霧摩司…もしくは、尾田史一って…しっ…知らないか？」
二人の顔色が…微妙に変化した…が…それを取り繕うように、
「う～ん…ボクは…霧摩って人は知らないな～舞華は、知ってる？」
「私も…史一なら知っているが…霧摩…は…知らない…」
さっきの反応を考えると信じていいのか、俺にはわからなかった…
だが…一人は知っているんだ…
「舞華、尾田って…どんな奴なんだ？」
俺は、舞華にそう聞いたが、舞華だけに聞いてしまって、またいま
までのパターンになると思ったが、なぜか、朽木姉は口をださなか
った。
「何から説明したら良いか…とりあえず…あまり私も知らないんだ
が…」
尾田史一…18歳、俺よりも一歳年上で…先輩と同じ3年になる予
定だった奴
過去形なのは、もうこの学校に居ないかららしい。
その理由は、喧嘩で退学…そして…なにより…一番驚いたのは…そ
の喧嘩の相手が…
「先輩と喧嘩をして…退学…」
「ああ、ただの喧嘩ならそんな重い処罰にはならなかった…だが、
その喧嘩は…実際に私は見ていたわけではないが…」
舞華が言い難そうに、朽木姉を見る

「わかった、僕から言うよ…そもそも、この喧嘩が、ボクと連子が親しくなった、きっかけなんだからな」
きっかけ？
「あの喧嘩は…尾田の奴が、いや…喧嘩と呼べるものじゃなかった…ボクがあの場所に居なかったら…連子はそのときに死んでいたのかもしれない」
俺は眼を見開いた
「尾田は、刃物で連子を刺そうとした…いや殺そうとしたんだ」
「はぁ！？刃物で！！そんな話し初めて聞い…」
そう言えば…初めて会った時…迷惑がかかるって…そう言う意味だったのか？
自分が関わった事件で…変な目で見られることを…
「ボクが刃物を奪ったけど…連子は…手足から血が流れていた…」
確かに、先輩は…傷だらけだったが…そんな理由が…あったなんて…
「その事件の後からかな…連子が学ランを着始めたのって…それまで、連子もボクたちと同じこの服を着ていたんだよ…でも、この服は、手足の怪我が目立ってしまう…だから…」
だから、先輩は…学ランを着ていたのか…
「尾田って奴は…警察に連れて行かれたのか？」
「いや…連子は、訴えなかった…事故だと言い張ったんだ…警察も被害者がそう言い張ったら…強く出られなかった…だけど、学校はそうはいかなかった…」
俺は…何も言えなかった
「連子がお前をボクの家に連れてきたのは、自分もリハビリをしていたから…
お前にも出来ると思ったんだろう…
尾田は事件の後、精神病院に入院して…そのあとは知らない」
朽木姉がそう言った直後…午後の授業の予鈴が鳴った…
俺は…二人に何も言えず…教室へ歩き出した…

22．俺の知らない先輩

知らない事件だった
知らなければよかった事件だった

俺は先輩の事を知っているつもりで、何も知らなかった
何も知ろうとはしなかった…きっと知ってしまえば…いままで道理の付き合いにはなれないと…そう思っていたのかもしれない…

そして、先輩は、俺の事を考えて、この話をしなかったのか？
気まずい関係になるのを…もし先輩が生きていたら…きっと俺は理由を知りたくなっていただろうな…
そして、先輩を傷つけた…だけど、もうそんな事も出来ない…先輩は死んでしまった…

先輩が死んで、俺は先輩の事をいろいろ知り始めている…
だけど…それは…もう…何の意味も…

……
……
……
……
……

いや…意味はある…例え先輩の過去に何があっても…先輩は先輩だ！！
俺の知る先輩は変わらない！！
俺はそう自分に言い聞かせた…そうする事しか今の俺には出来なか

った…

うわの空の授業も終わり…俺は…今朝、貰った名刺を見た…

「桜庭（さくらば）　祭（まつり）…フリーの記者…」

俺はあの記者の姿を思い出していた

軽い天然パーマに黒のサングラス…記者と言うよりも地上げ屋のような姿をした男

先輩の事件の手がかりが…あるかもしれない…

俺は…その手がかりを見つけたら…何をするのだろう…

俺は名刺の裏を見る…

１６：４０，近くのＰ…そう書かれていた…Ｐとは駐車場の事だろう…

学校の施設だと他の記者がいる…なら、近くの１００円Ｐか…

俺は、ＨＲが終了すると…誰かが呼び止める声がしたが…それを無視して…走り出した…

いや、誰か解っていたから止まらなかった…

俺は走りながら…ちらりと後ろを見た…舞華が…後ろの方で…俺に手を伸ばすようにして…立ち尽くしていた…

（ごめんな…舞華…今は何を話せばいいか…俺にはわからない…）

俺は心の中で謝り…駐車場へと向かった…

校門を走りぬけようとした所で…事件は起きた…

「貴方は、鷲見さんのご友人ですね！！ひと言！！」

マスコミどもが…俺の方へと殺到してきたのだ…

こんな肝心なときに…俺は、マスコミの隙間を狙い…何とか、抜けたが…奴らはしつこく俺を追いかけだした…

俺は、追われながら、駐車場の前まで走ると…

今朝の男が軽自動車の窓から俺の方へ手を振っていた…

「君～こっちだ！！早く乗れ！！」

俺はその男の言うがままに、軽に飛び込むと…

「おりゃ！！僕の獲物に手を出すんじゃね！！」
車が１８０℃回転し…一気にマスコミと距離を離した
「いや～自己紹介をしていなかったね～僕は桜庭祭！！御祭の様に騒がし生き方をするように親が名づけてくれたんだ！！」
暴れ馬のように、揺れる車の中で、桜庭はそう言った…
「俺の名は、月影雅春…先輩の事について…話をしてくれ…」
自己紹介をされたのだから俺も名乗った
「ＯＫ、僕も聞きたい事があるから～情報交換をしよう～とりあえず、喫茶店でも言ってゆっくり話そう～何処か良い喫茶店知らないかい？僕ってさ～いろいろ回っているから、この町の喫茶店わからなくって…」
「良い場所はこの前…出入り禁止をされて…」
桜庭は俺の話しに口をぽかんと開けて…
「いや～面白い！！それなら、隣町だけど、僕のお勧めの喫茶店を紹介するよ～」
そう言って、桜庭は、車を走らせ１５分…
レンガ造りの中世のような喫茶店へと俺を案内した…
ドアの入り口には、中学生禁止の張り紙が張られていた。
「ここはどこなんだ？」
俺は桜庭に尋ねた
「ここ？神楽坂町のエデンズ・ホロウ、天無（てんむ）って名前の喫茶店だよ」
俺は店の外装を見た…随分と本格的な造りで…白と黒のクラシックな感じだった…
「いらっしゃいませ、お二人様…ああ、桜庭さん、御久しぶりです」
店を見ていた俺に、黒髪のポニーテールのウェートレスが話しかけてきた…
だけど…その服装は…黒い服に白いエプロン…つまり、メイド服のような姿だった…
「やぁ～神鳥ちゃん、ちょっと取材があるから、いつもの席、空いてる？」

「ふむ…ではなく、はい、店長に聞いてくるので、暫しお待ちください」
神鳥と呼ばれたウェートレスはそう言うと、店の厨房への入り口と思われる扉の向こうへと歩いていった
「おい…ここって…メイド喫茶か？」
「何を言うんだい～ただの服装なだけだよ～それにしても、あの子可愛いよね～
幼馴染の事を好きじゃなかったら…もう告白したいですって感じだよ～」
知らない相手のことで、うだうだと…だけど…さっきの女…何か武術でもしているのか…
一瞬俺を見る眼が…品定めされているような気が…そう考えていると、店の奥のほうから、神鳥と呼ばれたウェートレスと…
「なんだ…あれは…」
紅の衣を着た白い長髪の女性が…不似合いな黒いサングラスをつけてやってきた
「なんだとは、失礼な餓鬼だな…桜庭、久しいな」
「はい、久しぶりです！羅刹さん、こちらは、今日、取材をする月影雅春くんで、月影君、こちらが、ここの店長代理の羅刹さんです」
なんで…この人は…平然としているんだ？羅刹と呼ばれたこの女性は…明らかに普通の人じゃなかった…人を…何人も殺したような…いや…何人とかじゃない…百、二百を軽く越えるくらいの…
「何だ…我を、そうジロジロ見て…恥ずかしいじゃないか」
照れているのか…もしかして、さっきのは…考えすぎか？見た目の雰囲気に…そう感じてしまったのか？
「とりあえず、羅刹さん、いつもの席を使っても良いですか？」
「ああ、使っても構わない…我は調理に戻る、神鳥も仕事に戻れ」
そう言って、羅刹さんは…厨房へと消えた…
空気が和らぐのを感じた…汗がぶわっと流れる…
「じゃあ、行こうか」

俺は平然としている桜庭の後を歩こうとしたら…腕を掴まれた…
神鳥さんだ…
「おぬし…店長に邪な感情を抱くと殺されるのじゃから、止しとくのじゃぞ」
え？なにか…へんな口調を利いた気が…
「では、御引止めして申し訳ございません」
俺が何かを言うよりも先に、彼女は去って行った…
「お～い、月影君、こっちだよ～」
呆然としている俺に、店の奥の席で桜庭が俺を呼んだ…
俺は、返事をするとゆっくりと歩き出したが…この喫茶店…普通じゃない…
そう理解した…

23．人外魔境…天の無い喫茶店

桜庭は店の奥の窓際の席に俺を座らせると、俺と向かい合う位置に桜庭も座った。
「メニューは其処にあるから、適当に注文してくれよ～無論、財布の事を考えて欲しいけどね～」
桜庭はそう言って、俺にメニューを渡す…って…なんだ！？この値段！！
俺は眼を見開いた
「やっぱり、皆、驚くんだよね～此処のケーキや飲み物の安さ～」
俺は頷いた…
「ケーキが百円から百五十円…ジュースも…」
味が悪いのかと俺は思ったが…
「それにさ～味も絶品なんだよ～」
信じられない話だった…俺は周囲の客の反応を見る…
そこで俺の目に留まったのは一つの席の客だった。
綺麗な金髪の二人の女性と黒髪の男女が楽しそうにケーキを食べていた…
「美味しいですね～夜叉～」
金髪の女性の一人が、黒髪の男性に話しかけた
「ああ…美味いが…そんなにバクバク食べていると太るぞ？」
男は金髪の女性にそう返事をすると…金髪のもう一人の女の子が…
「駄目だよ～ボクが思うに、それは禁句なんだよ、だよ～
最近体重が増えたって言っているのに、まだ食べているんだもんね～」
そういわれた金髪の女性は…女の子に…
「何でそんな事言うんです！！違うんですよ！！別に太ったわけじゃ…女らしくなったわけで…」

怒鳴ったあと、男性に弁解をしようとするが…男性が何かを言うよりも先に、黒髪の女性が…
「腹の脂肪以外ついたようには見えないのじゃがな～」
と火に油を注いだ…そして、取っ組み合いが始まりそうになった所を、店員に店先でやるように言われ、店先に出て行った…
俺は、それを呆然と見ていた
「あっはは、此処のケーキは、まさに魔性に一品だよ」
同じ様に一部始終を見ていた桜庭もそう言った…
「とりあえず、お勧めはチョコケーキだね」
俺はそのお勧めを頼んだ。
「ここは…変わった所だな…」
俺はまた周囲を見ながら、そう言うと…
「まあ、店長からして、いろいろとね～オカルトとかにも詳しかったり…君の所の町の都市伝説もよく知っているよ」
俺のところの都市伝説…それは…紅い石の事だろうか？
「亡くなった鷲見君も此処をよく利用していたよ」
俺は桜庭の顔を見た…
「そもそも、僕も鷲見君の友人と言うわけじゃないけど…君と同じ様に取材をした事があってね」
「取材って…尾田の事件か？」
二人に聞いたあの事件で取材したのかと思ったが…その答えは違った…
「そのときも取材したけど…その前の事件だよ。霧摩司の事件だよ」
きりま…つかさ…。
それは、先輩のノートに書かれた名前…
「まあ…もう二年以上前の話だから…世間の人は気にしてないみたいだけど…
今回と同じ様な殺人事件があったんだよ」
俺はその事件を詳しく聞こうと思ったが…
「ご注文の品をお持ちしました～」

持ってこられたケーキで、話は打ち切られた…
「さあ、食べてみたまえ！僕のお気に入りの一品を！！」
そして、更に話を言ってくれる雰囲気では無かった…
無論、俺はそのケーキの美味さに病みつきになった！！
「どうだい！！チョコケーキなのに上に苺がのっていて…それなのに、チョコの甘さに合うなんて！！これぞ至高の極み！」
そして、男二人夢中でケーキを食べていた…

２４．始まりの事件

「「ご馳走様！！」」
俺達は手を合わせてそう言うと、話を戻した。
「じゃあ、続きだけどね…二年位前に事件があった
その事件は、今回と関連性があるように、その事件の被害者も公園でナイフを胸に突き立てられ死んでいた…被害者の名前は霧摩司、女性」
先輩の死に方と同じだった…
「鷲見君は、霧摩君の幼馴染なんだ。そして、鷲見君が、霧摩君に最後に会った人物だったから、警察は鷲見君を疑い、世間も鷲見君を疑った。」
心無いマスコミが…先輩を犯人と掲載し…先輩は追い詰められていた…
「先輩は…そんな中を生きていたんですか…」
「そうなんだよ…まったく…愚かな記者がいたもんだよ…あんなに悲しんでいた子供を犯人だなんて…」
苦虫を噛んだ様な顔をしながら、桜庭はコーヒーを飲んだ。
「そして、鷲見君は追い詰められていき…事故で入院した…」
俺は、手に力が篭る…朽木姉…舞華…なんで支えてくれなかったんだ…
「話は戻すけど…霧摩君には、妹が一人居たんだけど…これは流石に守秘義務だから、言えないけど…その子は、霧摩君と二人暮らしで…霧摩君が死んだ後…誰かに引き取られたんだ…僕が知りたいのは、その事なんだ…君は…鷲見君から聞いていない？」
初耳だった…でも…それくらい…調べれば…
「不思議な事にね…鷲見君が入院してから…あの町に住む人は、誰もあの事件に関わろうとしなかった…いや、事件の事すら…まるで

別の町で起きた事件のように…記憶が薄いんだよ…」
そんな馬鹿な…と俺は思った…普通地元で起きた事件は…簡単に忘れられるものじゃない…
「そして…その後に、また事件が起きた…尾田君が鷲見君を襲った…なぜ、後輩であり、二人の幼馴染であった彼が…なぜあんな行為を…」
舞華たちが言ったあの事件か…後輩？俺の一つ上なら…それに…舞華たちと先輩は、まだ出会って無かったのか…
「鷲見君はその事件を、事故と主張した…眼をナイフで斬られ…片目の視力を失っても…何を守ろうとしたのか…」
片目の視力を失った？
「先輩は片目が見えなかった…？」
俺がそう呟くと…桜庭は、驚くと…
「君は知らなかったのか？じゃあ…その後…尾田君がどうなったのかも知らないの？」
俺は頷いた
「鷲見君が事故と訴えたが…結局は、精神に異常がありと診断され、精神科に行ったんだよ」
舞華も知らない情報…だけど…その次の言葉に…俺は…眼を見開いた…
「そして…鷲見君が死ぬ3日前…尾田君は精神病院を脱走した…更に…事件直前にその尾田の姿をこの町で目撃した情報も入っているんだよ…」
それは一番の容疑者と考えられる…どんな理由があるかは知らないが…一度先輩を殺そうとした男…
「君の知っていることは…その後の鷲見君みたいだね…じゃあ、僕はいろいろ情報を集めに行くけど…そうだね…一つ面白い話をしようか、鷲見君は此処で紅い石の噂を聞いたんだよ。じゃあ、お会計済ませとくから、のんびりね～何か情報あったら、名刺にある携帯に電話をよろしく！！」桜庭はそう言って、店を出た…が…あの古

い言葉を使ったウェートレスに何かを話して出て行った…

25．紅の衣

とりあえず、自腹でケーキを注文し、俺は自分を落ち着かせようとして…
あの存在が近づく気配に背後を見た…
「なんだ？そんな風に驚いて振り返るなんて…傷つくな…」
紅い衣の…店長がいた…その手にケーキと飲み物を二つ持って…
「ご注文のケーキだ」
そう言って…確か羅刹と呼ばれた女性は桜庭が座っていた所に座った。
「なっ…」
なんで座るんだと聞くよりも早く
「桜庭から、紅い石の話をしてくれと頼まれたからな」
さっき桜庭が話していたのはこれか…俺はそう考えた。
「我が紅い石の話をするのは二人目だ…少し長いが、のんびり聞け」
そして…店長は語りだした…
紅い石の話を…それは先輩のノートに書かれた話…一言一句違わぬ話だった…
そして、話が終わり、俺は店長に尋ねた…
「俺が二人目と言っていたが…俺の前に誰にこの話を…」
店長はにやりと…背筋の凍るような微笑を浮かべると…
「童の前の人物か？あれは、我によく似た女だった…大切な者との別れを強要され…再会を願った」
俺は…恐れていた…この店長から早く離れて…逃げ出したかった…
だが…此処で逃げる訳には…
「なんだ…怖がらせてしまったか童？」
店長は俺の恐れる感情に気づくと…まるで、怯える小動物に向けるような笑顔に変わった。
「すまないな…我は人とはあまり関わっていない為に、たまに怖が

らせてしまう」
店長はそう言いながら…俺の頬に手を伸ばし…俺の頬を撫でる…
それは…傍から見たら、優しい…触り方だろうが…俺には…刃物を頬に当てられている気分だった…それに…この人の手は…冷たい…
「そう怯えるな…我は童を傷つける気は無い…だが…」
店長の手が…昨日の怪我のカットバンに触れるとそれを一気に引き剥がされた…
そして…固まりかけた血が再び流れ出す…
「我の前にその美味そうな血の香りを漂わせるんじゃない…」
店長は…その血を指で触ると…それを舐めた…
危険だ…目の前の…この存在…俺は拳に力を込め…
「店長止めるのじゃ！！明らかに怯えておる！！」
誰かの大声で…俺の意識は、急に鮮明になった…いや…いつから俺の意識が鈍っていたのだろうか…
「まったく！！若い小僧を怖がらせて…それより、早く料理を作るのじゃ！！」
目の前に…あのウェートレスがいつの間にか居て…ああ、さっきの声は…こいつか？
「なんだ…盛り付けるくらいで…まさか…神鳥…」
ウェートレスに詰め寄られていた店長は…急に立ち上がると…厨房の方へ走り…
「！！！！！！！！！！」
声にもならない悲鳴が聞こえた…
「まったく…妾の料理の腕を解っているであろうに…すまぬな、小僧…店長は…悪戯が好きで…不快な思いをさせてしまった…御代は良い」
やはり…この人は古風な喋り方を…
「神鳥！！また口調が変わっている！！」
奥のほうから、店長の声が聞こえ、ウェートレスは慌て…
「こちらが迷惑をおかけしましたので、御代は結構です！またのご

来店をお待ちしています！」
言い直すようにそう言った。
どうやら、古風な喋り方が地で、接客業中はあの口調のようだ
とりあえず…今日はもう帰ろうと俺は考え…店を出ようとしたが…
奥のほうから…
「童…紅い石は実在する…だが…決して死者と再会しようと思うな
…」
そう聞こえた…
「所詮…噂話だろ…」
俺はそんな話なんて信じなかった…

26．そう信じていた

そう信じていたのに…俺は…手の平の紅い石を見た…
どうやって、見つけたのかと言うと…俺は見つけた状況を思い返した…

知らない町の喫茶店に置いていかれた俺は…周囲を見た…
右も左もわからない…
「確か…神楽坂町って…言っていたよな？」
土地の名前は、桜庭から聞いていたが…場所の名前がわかっても…
目的地（自宅）への帰り方がわからなかった…
「待て…この歳で迷子って…恥ずかしくないか？…いや、こんな訳のわからない所に置いて行く…あの桜庭がわからない…」
俺は、途方にくれながら…さ迷った…
そして…夕暮れ…歩き始めて、まだ、１０分も経っていないが…さすが…冬…
５時４０分で、もう日が…沈みかけ…
いつの間に川沿いに着き…俺は、川に沿って歩いていた。
「あの鉄橋は…」
俺は見覚えのある鉄橋を見つけ安堵した。
確か…街外れの雑貨屋の近くの鉄橋だった…少し遅くなるが…無事に家に帰れる…
そう思って、俺は鉄橋に向かって走り出した。
そして、鉄橋を渡っている途中…ガツン…
俺の頭に何かが当たって、俺は周囲を見た…
俺の頭上で鴉が二羽鳴いていた…どうやら…鴉が何かを俺に落としてきたようだ…
「馬鹿鴉！！」頭上の鴉に俺は、怒鳴り散らすと鴉は、俺をバカにする様に鳴くと、飛び立った…

「逃がすか！！」俺は、俺の頭の上に落ちてきたものを探し投げ返そうと思ったが…
どこにもそんな物は無かった…川にでも落ちたのか…
俺は、そう考え…イライラしながら家に帰った
「雅春君、お帰りなさい！もうすぐ料理が出来るって、お父さんが言ってましたよ」
「ああ、ありがとう～じゃあ、先に着替えてくる」
家に帰ると、冥乃ちゃんが迎えてくれた。

俺は、部屋でブレザーを脱ぐと…ことん…
何かが落ちる音がして、俺はその音のした方に眼を向けると…
紅い石が…床に転がっていた…

まさか…あんな話を聞いた後に、この石を見つけるなんて…
「俺の頭に落ちてきたのはこれか？」
俺はその紅い石を手に取った…石と言う表現はこの石には似合わないと思った…
「石と言うよりも宝石だな…」
光物を鴉は好むという話を聞いたことがあった…どこかの落し物を鴉が拾ったのか？
だが…拳の半分くらいの大きさなのに…この石には重さが無かった…
だから…ブレザーに付いていても気づかなかったのか？
いや…この軽さを…石と考えるのが間違いではないのか？
「そうか…これはイミテーションかプラスチックだな…」
俺がそう言った瞬間…
「だぁ！！！！妾を模造品扱いするな！！」
石がそう叫び、俺は慌てて石を落とした。

27．喋る石

「痛っ…妾を乱暴に扱うな！！」
空耳じゃない…石が確かに喋っている…
俺はその非常識な出来事に、無様にも飛びのいてしまった。
「石が喋る事が驚くにしろ、このような乱暴な扱い…妾が人であった頃には、極刑ものぞ！！」
この謎の物体が…人であった頃…つまり、これは人じゃない！！
って…当たり前じゃないか…これは石の様な塊だぞ…人である筈が無いし…どこにも人の面影も無い…
「おまえ！！妾のことを人の面影が無いと思っただろう！！」
この石…どこぞのチビと同じ様な事を…さては…言われ慣れているな！！
「失礼な餓鬼じゃ…それにしても此処はどこじゃ？」
似た性格の人がいると解れば、俺の混乱は少し収まっていた。
「俺の家だけど…お前は何だ？」
まずは、この石の事を知らないと何事も始まらない
「小僧の家と言われても解るわけないじゃろ？」
前言撤回…解る事はしないほうが良い…これは石だ…
これは物で…言葉を交わす相手ではない
「なんじゃ！？妾を掴みあげて…止せ！！小僧！！窓を開けるな！！待て…まっ…」
俺は石を投げ捨てた…
「疲れているんだな…石が喋るなんて…」
窓を閉めながら、後ろを振り向くと…ことん…
足元で何かが落ちる音がして、俺は足元を見た…
「妾を投げ捨てるとは！！この小僧！！」
さっき投げ捨てたはずの石が俺の足元に転がっていた…
「予想していたが…マジウゼ…石…」

俺はその石を掴んだ…そして、次は砕こうと考えていたが…
「気安く触るな！！妾が再会を司る石と知っての無礼か！！」
その言葉に俺の手は止まった…
そう言えば、この石の伝説だと会いたい人物に出会えるという話が多々あった…
「それじゃあ…」
俺は先輩の名を呟こうとしたが…不意に脳裏に…紅い衣と…
（決して死者と再会しようと思うな…）
あの言葉が過ぎって…俺は口を閉ざした。

「なんじゃ？早く言わぬか！！」
急に俺が黙った事に痺れを切らせた石が、俺に催促してきた。
（石の癖に痺れを切らせるって…これは何だ？）
「待て…今…考えている」
生きている奴で会いたい人物…前の町の奴らは裏切り者だし…この町の友人にもすぐに会える…
そうだ…尾田…あいつに会うことが出来れば…先輩の事を何か知っているかもしれない…
そう考えたが…
「駄目じゃ！！」
いきなり断られた！？
「まだ何も言っていないのに…いきなり断るな！！」
「言っていくが、妾は初見の相手などに再会は出来んぞ！」
「初見って…あっ…」
俺は解ってしまった…
「妾は、再会を司る石ぞ！！初めての出会いなど、司ってはいない！！」
つまり、この石は、一度会った奴にしか、再会できないのだ…
「初めて会ったって…どの程度なんだ？」
だが、初見の範囲がわからないと…これは、真に理解した事にならら

ない。
「そうじゃな…自己紹介を軽くしたような間柄なら…可能じゃ…と思う…」
「思うって…やけに自信がないな…」
そう言うと石は、なぜか屈辱を受けたような雰囲気を発し…
「それは妾を再会の石だと再び名乗らせたのは、小僧が初めてじゃからじゃ！！
しかも、小僧の場合…再会したい人物など居らぬ…」
俺の心を読めるのか？本当に…
「うむ、触れれば確実じゃが…ある程度は読めるぞ！！裏切り者に再会したくないとかのう！！
妾の凄さがわかったのなら…敬うのじゃ！！崇めるのじゃ！！恐れよ、小僧！！妾のこの偉大…ひぎゃい！？」
俺は容赦なく石を地面に叩きつけた…
「なんじゃ！！小僧！！妾を叩きつけるとは！！」
そして、予想道理に、石は吼えたが…俺には、そんな事は関係無かった…
「黙れ！！石が！！無機物の癖に、俺の心を読むな！！」
石如きに…俺の心を詠まれたのが許せなかった…

28. 虚

俺は地面に叩きつけた石を再び掴むと…破壊するつもりで…俺は力を籠めた…

「止めるのじゃ！！痛い痛い！！止せ！！砕ける……めろ…止……」

力を籠めるにつれ…石の声は静かになってきたが…あともう少しで、砕けると思ったが…俺の握力の限界が来て…力が弱まった…俺は忌々しい、この怪我に舌打ちをした瞬間…

意識が飛んだ…何が起こったのか解らなかった…だが…手足が…悲鳴を上げた…

苦痛が俺の体を駆け巡る…そして…手足の感覚が失い…次第に俺の体の中心へとその苦痛と消失感が広がっていき…意識以外の全ての感覚を失った…

どれだけ…この無の中を…漂っていたのだろうか…一分か？1時間か？それ以上か？

もう…そんな事はわからない…もう…考えなくても良い…そう思ったとき…

不意に…誰かが…俺を呼ぶ声が聞こえた…そして…急に全身？に痛みが走り

「っ！？」

そして、急に俺の意識は戻った…

目の前には…冥乃ちゃんが居た。

「大丈夫ですか！？」

冥乃ちゃんは、俺の肩を掴み体を揺すりながら、俺に話しかけていた…

「あれ？俺は…」

何がなんだかよく解らなかった…なんで…俺は…冥乃ちゃんに…

「ご飯だと呼んでも降りて来なかったので…呼びに着たら…雅春く

んが倒れていて…それで…顔が白くて…怖くて…うっうう…」
そこまで話すと冥乃ちゃんは泣き出してしまった…
「大丈夫…大丈夫だよ…ちょっと、転んで…あれ？」
俺は周囲を見回した。
「どっ…どうしたんです…」
俺が周囲を見る様子に、冥乃ちゃんは、ぐずつかせながら、俺に話しかけてきた…
「いや…此処に紅い石がなかった？」
俺が意識を失う原因を作ったと思われる石が、どこにも無かった…
「さあ…私…雅春くんが…倒れていて…驚いて…お父さんたちは…勝手にご飯食べていても良いって言うし…私…私…」
ああ、また泣き出しそうに…俺は冥乃ちゃんの頭を撫でると
「いや、別になんでもないんだ～俺ってさ～疲れていたら急に倒れて死んだように眠る癖があってさ～だから、親父たちも気にしねぇんだ」
俺はそう言って、冥乃ちゃんの頭から手を離すと、軽く飛び跳ねる
「雅春！！家で飛ぶなんて！！ご飯に埃が入るでしょ！！」
下から御叱りの言葉が来て…俺は、うな垂れてしまった…
「家ってさ、こんな家族なんだから、そう悲しそうな顔をしなくても良いんだ…」
俺はそう言って、出来だけ安心できるように微笑んだ
「はい…まだ二日目だから…私…まだ…皆さんのことを知らないので…」
「そんなもんだよ～さあ、ご飯を食べに行こう！！俺は着替えている途中だから、先に行っていてくれ～」
俺はそう言って、冥乃ちゃんを部屋から追い出した。

（あれは…夢だったのか？）
服を着ながら俺はそう思ったが…やけにリアルで…そもそも、どの辺りから俺は夢を見ていたんだ？

「痛っ…」
ふと手のひらに痛みが走り、俺は手のひらを見ると…何かを力いっぱいに握り締めて、血が出ていた…
あの紅い石を握り潰そうとしていた手だ…つまり、あれは現実？
それとも夢を見ながら自分の手を握っていた？
「落ち着け俺…あんな事…現実に起こるはずが無い！！きっと疲れて意識が飛んだんだ！！」
俺は声に出して自分にそう言い聞かせると、ご飯を食べに部屋を出ようとして…
「雅春くん！！逃げて！！」
冥乃ちゃんの悲痛な声を聞いた…次の瞬間！！
黒い大きな影が…俺の眼前を覆った…
そして…その黒い影は…俺の視界を何かで覆うと…
それが掌と気づいたときには…激痛が体を支配していた！！
あの体を失っていくときに感じたのが、心の痛みとしたら…これは肉体の痛み！！
神経を根こそぎ剥がされる…そう！！歯医者で歯に穴をあけられる痛みを三倍にして、全身に味わう…そんな痛みだ！！
体を動かそうにも、がっちりと押さえられ…関節が悲鳴を上げる！！
「待ってください！！別に私は！！」
冥乃ちゃんが、誰かに話しかけているが…相手は何も喋らない…
クソ！！親父たちが養女に迎えようと考えるくらいなんだ…何か訳ありの事情を考えるべきだったのではないのか？

いや、そんな事より…もっと、普通な事を考えろ…

普通…俺が倒れていると冥乃ちゃんから聞いて…あの二人が、大人しく食事をするなんておかしい…それに…あの埃が落ちると言った母さんの声…そして、先に下に行った冥乃ちゃん…それらが導く答えは…そして、俺は理解し…

俺は最悪の状況を想定した。

もう二人は……俺の敵かもしれない事を…

29．俺は無実だ！！

そう…涙を流しながら、一階にいる親父たちの場所に行けば…
二人はこう判断する…
俺が…冥乃ちゃんを襲ったと…そして、母さんは…あのジャンプした時の振動と冥乃ちゃんの涙で…早とちりを…
親父とは組み手で何度か戦った事があるが…この極悪さは…親父ではない…
親父の戦い方が刀のような斬れる戦い方とするならば…今、俺が味わっている苦しみは…バスタードソードで叩き潰す戦い方だ…

力技で関節じゃない所を関節にしようとしている…
親父はこんな真似をしない…なら…こんな事をする相手は…
「春夏…そろそろ止めないと雅春に後遺症が残るよ」
「雅継さん！！女の子を襲ったクソ蟲は、此処で滅ぼさないといけないのよ？そうしないと、冥乃ちゃんの気が済まないのよ！！」
俺の体が更に悲鳴を上げる…この技をかけているのは…母さんか！？
しかも俺を犯罪者にしか思ってない！！
「だから、違うんです！！私はそんな事をされていません！！信じてください！！」
冥乃ちゃんが俺を助ける為に、一生懸命説得しようとしているが…
「大丈夫よ！！脅されてそう言っているんでしょう？よくある手よ！！そうやって庇っても、自分が辛くなるだけよ！！こういった屑には、復讐も考えたくないように壊すのが一番なんだから！！」
母さんはそう言うと…更に力を籠める…
むしろ！！まだ籠められるのか！！！俺は諦めそうになったが…
「雅春、右肩の骨と左腕の骨を外して」
親父がそう呟き、俺は反射的にその言葉に従った…
いつもなら理由を聴くだろうが…今回は、命がかかっていた為に、

反射的に体が動いたようだ…
そして、俺は骨を外した瞬間…
「きゃふぁ！？」
と母さんの悲鳴が聞こえ、体が自由になった…
眼を覆っていた手が外れ、一瞬光で目が眩んだが、俺はすぐに、骨をくっつけ、状況を確認した…俺の目の前には冥乃ちゃんが、驚いた顔で俺を見ていて…俺はゆっくりと後ろを見た…
親父が母さんをお姫様抱っこで抱き上げてキスをしていた！？
「なっ…なっ…なっ…」
親父が母さんから顔を離すと、母さんは顔を真っ赤にして、動揺していた…
「春夏…落ち着いて…これ以上暴れたら、悲しむのは冥乃ちゃんと春夏だよ」
親父は、動揺している母さんにそう言うと、ゆっくりと地面に立たせた。
母さんは、おどおどしながら、地面に足をつけると…顔をうつむかせ…一気に顔を上げると！！
「何をするの！！！息子や娘の前で！！」
親父の胸を駄々っ子のように叩きだした！！
「それは、久しぶりのキスは嬉しかったよ！！でも！！こんな時にするなんて！！」
親父は、暴れる母さんを抱きしめると…
「ごめんね…例え息子と言えども、これ以上春夏に触れていて欲しくなかったんだ…」
と甘ったるい声で母さんの耳に囁く…
「だぁ！！！！！！！！！いきなり、いちゃつくな！！！！！！！」
そんな甘ったるい空気に、俺は我慢できなくて吼えた！！
「なによ…いま私は幸せに浸っているのよ…暖かい…」
母さんは、俺の意見を無視し、さっきまで暴れていたのに、いまは、親父の腕の中で幸せそうに眼をつぶっている…

「別に二人っきりなら文句は言わないけどよ！！俺達もいるんだし！！それに！！俺は冥乃ちゃんを襲っていない！！無罪を証明させろ！！」
と言ったが…
「別に、アンタの無罪は理解しているわ～、いくらなんでも早すぎって気づいたから、むしろ、もしあの短時間でヤッていたら…アンタ、男として危ないわ」
無罪と解っていた上で俺に…あんな激痛技を！？それに、セクハラ発言！？
「僕は、雅春を見て解ったよ…正確には臭いだけどね～」
俺は…この二人の言葉に…打ちのめされ…
「まあ、童貞のアンタは、早かったとしても仕方ないけどね～」
そして、止めを刺された…
「大丈夫ですか？雅春くん」
俺が屈辱の余りに膝を地面についた瞬間、冥乃ちゃんが駆け寄ってきた…顔が若干赤い
「大丈夫だけど…顔…赤いよ」
「あっ…あはははは…ちょっと、凄い光景を見たので…恥ずかしくって…」
確かにそうだ…あんな発言を連発な上に、親父と母さんのキスシーンまで見せ付けられたんだからな…
「ごめん…こんな家族で…」
「雅春くん！！謝らないで！私…楽しいんだから…」
そう微笑む冥乃ちゃんが、あまりにも純粋そうに微笑むから、俺は…
「俺が虐められる様子が？」
ついこんな事を言ってしまった…だが…冥乃ちゃんはそれに動揺することなく
「はい、もちろん、悪い意味ではなく…前の家だと…私は…寂しかった…」
冥乃ちゃんはそう言うと口を閉ざした…寂しかった？あの先輩の家

で…あの先輩が家族を寂しがらせる？
俺は…その事を聞こうと思い話しかけようとしたら、急に冥乃ちゃんは立ち上がり
「そんな事より、ご飯を食べましょう！」
そう言った…それは…俺のその質問を拒絶しているように思えた。

30．夕食

俺は二階でいちゃつく親父たちを残して、一階で冥乃ちゃんと食事を始めた。
「それにしても私、驚きました～お母さんが、あんなに強いなんて…」
ある程度ご飯を食べ終えた時、冥乃ちゃんは俺にそう言った。
「ああ、俺も初めて知ったぜ…親父とは組み手をした事はあったけど…母さんがあんなに強いなんて…あっ、参考までに聞くけど…あの時俺って何をされていたんだ？眼を覆われていて良く解らなかったんだけど…」
倒れる事も出来ず、立ちっぱなしで苦しんでいたからな…倒れたら殺される…そんな感じがしていた
「私も後ろから見ていただけだったんですけど、雅春くんの頭上を飛び越えた後…後ろから目隠し…いえ、飛び越えながら、掌を顔に当てて…」
そう言いながら冥乃ちゃんは両腕を横に広げると…
「あとは、こんな体勢の雅春くんの両腕に体を巻きつけるようにして…無理やり骨を折ろうと…」
俺は、その説明を聞き…恐ろしくなった…何でそれで、あんな激痛が出来るんだ？
考えられることは、ただ一つしかない…
力で関節じゃない所を関節にしようとしていた…そう考えるしか無かった…
だから親父は俺に、本来の関節を外して、バランスを崩させるように言ったのか
「それよりも、雅春くん」
「なんだ？」俺は、さっきの技の対策を考えながら返事をしたが…

次の言葉で、そんな考えを放棄した！！
「レンの事件…関わらないで」
俺は冥乃ちゃんのほうを見る…それは、この二日間見ていた、彼女ではなく…
初めて会った時の…煙を見ながら泣いていた…あの彼女の表情だった…
「雅春くんは、レンの事を大切に思っていたから…雅春くんは…レンの仇を討とうとするかもしれない…だから…」
俺は、怒りを抑えた…まさか、先輩の妹に、止めろと言われるとは思わなかった…
だから、俺は知らないふりをしようと思った…
「待て…俺は…そんな事…」
「嘘だよ…昨日…雅春くん…夜中に抜け出して…出て行くのを見たんだよ…」
俺は黙り込んだ…見られていた？
俺は誰にも見られていない…親父たちも気づかないように出て行ったのに…
「レンの事は、警察が何とかしてくれるから、雅春くんは、何もしないで…」
彼女はそう言うと、席を立ち…部屋から出て行こうとしたが…一度振り返ると…
「レンの事を、本当に大切と思うなら…思い出を大切にしたかったら…お願い…もうこれ以上…関わらないで…」
彼女はそう言って…部屋を出て行った…
そして、一人食堂に残された俺は…
「なんだよ…いきなり…」
俺は先輩の仇を探したいと思っていた…先輩の仇をとって……したかった…
それなのに…先輩の妹に止められるなんて…だがな…俺は諦める事なんて出来ない…

俺は…ふと、俺はさっきの先輩の妹が言っていた言葉を口にした…
「雅春くんは…何もしないで…？なんで、俺は何もするなと？」
解らない…普通は関わるなと言うはずなのに…俺だけ？
「浮かない顔をしているようじゃな？」
俺は急に誰かに声をかけられ、周囲を見る…さっきまで俺一人だったのに…誰が…
「まったく、妾を握り潰そうとするとは…愚かな人間め…契約がなければ、このまま見捨ててやろうと思ったんじゃがな…」
この古い言葉使い…俺は、足元を見た…紅い石が転がっていた…
「夢じゃなかったか…」
俺は紅い石に触れようとしたが…
「くわぁ！！」
急に石が吼え、俺は怯んで手を引く…もともと、俺はこの石に触れるのを躊躇っていた…
また…あの…体を失う恐怖を味わうのではないのかと…だが、この石は…
「また握り潰す気じゃな！！止めるのじゃ！！嫌じゃ！！壊されたくないのじゃ！！」
石が泣き叫び？ながら後ろの方へ転がる…なんだ？この石…まさか…あんな光景を見せたと思われる石は、俺よりも怖がっていた…
「なんだよ…普通…あんな光景を見せた、お前の方が怖がるんだ？」
「小僧は、妾が体験したあの感覚から自力で目覚めたのじゃ…前に妾を握り潰そうとした奴は、未だに病院で寝込んでいるのに…目覚めたのじゃ…妾をまた苦しめるのじゃろう…」
自力で？いや違う…俺は…冥乃ちゃんに起こされなければ…
「虐めないから…ほら…」
俺は、怖がらないように手のひらを紅い石に差し出した
紅い石はおどおどしながら…
「本当じゃな？本当にもう妾を虐めないのじゃな？」
と疑り深くそう言う…

「ああ、虐めないから、いい加減、俺の手に乗れ…こんな床を転がったら、汚れるぞ」
そう言うと紅い石は、慌てて俺の手のひらに飛び乗った
一体どんな仕組みだ？と思ったが喋れる事を考えると…あまり考える意味が無かった。
「ふん！！妾の偉大さを解ったのじゃな！！」
手のひらに乗ってしばらくおどおどしていた石は、やっと危険がないと解ったのか…そんな事を言ってきやがった…
握り潰してやろうかと考えたが、俺はその考えを破棄した。
また、あんなに怯えられたらウザイからだ。

「おい…お前が再会を司る石とか言っていたよな」
俺は、石にそう話しかけた。
落ち着いて、俺の手のひらでころころと転がっていた石は、俺の声に反応して…
「そうじゃ！！妾は再会を司る石じゃ！！」
「代償はなんだ？」
「ふむ？」俺の言葉に石は、解らないように首を傾げたような声を出した
「普通、お前のような奴に願いを叶えてもらうとしたら代償を払う事になるだろう？
魂か？運か？金か？」
悪魔だと魂だが…この石は何を望むんだ？俺は、奴が喋るのを待った…そして…
「別に、何もないのじゃ」
意気込んでいた俺は、その答えに…ただ口をぽかんと開けた
「なんじゃ？よく理解できておらんな？もう一度言う、普通に再会させるだけなら、別にいらんのじゃ！」
信じられなかった…普通どんなものにも代償がいるのに…なんて気前が良い石だ…

31．石の願い

「別に、勘違いするな！！妾も好きで人間の願いを聞いているわけじゃない！！」
「え？」
「妾の意思で叶えているのではない！これも、妾の願いを叶える為なのじゃ！！」
自分の為に、願いを叶える？
「もう、小僧が最後じゃから、妾の話を聞かせてやろう！！」
俺は…石をじっと見る
「妾は、妾の愛しき者と再会する為に、小僧のような人間の願いを叶えている」
「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」
「小僧…何か言わぬか！！妾が願いをかなえる秘密を言ったのじゃぞ！！驚き腰を抜かさぬか！！むしろ、腰を抜かして失禁までするの…ひぎゃ！！」
俺は石を地面に叩きつけた…
「なっ…なにをするの…じゃ！？」
そして、足で踏みつけると…そのまま、足でぐりぐりと地面に擦りつける
「てめぇは、再会を司る石だろうが！！そのてめぇが！！再会する為に願い事を叶えるって…どんだけ、お前が無能か…証明してんのか！！」
俺は石を蹴り飛ばす！！石は少し転がると壁にぶつかり、やや半泣きで
「五月蝿いのじゃ！！！！！妾の力は偉大ぞ！！よくあるじゃろう！！自分の為に力は使えぬと…妾も自分の為に力はつかえぬのじゃ！

！」
そう怒鳴った…
「確かにそんな話は良く聞くな…恋愛成就の神が自分の恋愛だけは叶えられないような…」
「妾もそれなのじゃ！！」
俺はその言葉に唖然とするしかなかった。

見つからない…見つからない…愛しい人が、大切な人が見つからなかった
私の事を愛してくれて、私も愛したあの人、私はあの人に会いたい
私はあの人と共に居たい、あの人の為に、あの人と私の為に、
その為に私は探す、再び廻り会える筈だから…
そう願い続けながら、私はあの人を探す…自分の足で探していたが、
いつしか足を失い、足が使えないのなら、私は手を使い這いながら、
探す…
だけど、指を失い、手を失い、腕も失った…それでも諦めなかった…
だけど、私の体は失っていく…胴も失せ、頭だけになっても…私は
探し続けた…
いや、もう動けない私は、この世に在り続ける事にした…
いつしか、あの人が、私を見つけてくれると信じて…その場で石に
なることを決めた…
あの人に廻り会う為に…私は今も待ち続ける…物も言わぬ石になり、
あの人を探す為に
私は、今も求め動く、私と同じ悲しみを持つ者を助けながら…いつ
しかあの人に出会う為に…

この都市伝説の話は、ほぼ真実だったのか…
「妾も自分の噂話は耳にするが…なぜ…知られているのか…うむ…
わからん」
石が話したわけでもない事実が…流行っている…

これはどんな意味があるんだ？
だが、それよりも、俺には聞かなければいけない事があった
「その話は、後から考えるとして…聞くけど…お前は何だ？」
石は、その質問をしばらく考えるような気配を見せ…
「物分りの悪い小僧じゃな…妾は、再会を司る…」
「そう言った存在そのものが、俺には理解出来ない、見た目は無機物の石であるお前が…なぜ、意思疎通が出来る？」
いままで関係ないように、思っていたが…そうだ…なぜ、俺はこいつと話せる？
それに、再会を他にもさせた相手がいるなら…ああ、頭が混乱してきた…
「そうじゃな…妖怪…神…悪魔…化け物…いろんな呼び名があるのじゃが…その真名は妾も覚えておらん」
俺は石を見つめた
「じゃが、別に良いじゃろう！！おまえの願いを叶えれば…妾は、妾の再会したいものに出会えるのじゃ…再会できるのじゃから…そのときに、妾の事を聞けばいいのじゃ！」
石はそう言って、笑った…だけど…その笑いは…この後自分はどうなるのかと言う恐れを感じているように思えた…

32．バカップル＋親＋子＝万年新婚夫婦とあまり

石を俺は懐に入れ、とりあえず、二階に上がった
もちろん、食器は片付けた。
二階に上がると俺は、げんなりした…なぜなら…
「可愛いよ…春夏…なぜ…顔を隠すんだい？」
「べっ…別に隠しているわけじゃないんだからね！！雅継さんの顔が近いから…顔を逸らしているだけなんだから！！」
親父が母さんを後ろから抱きしめて…いちゃついていた…
「春夏の可愛い顔をもっと見たいんだ…近くにいる幸せを…」
「雅継さん…」
目の前で二人が見つめ合い…
「親父…母さん…いい加減にしろよ…」
俺は、耐え切れずに、このいちゃつくカップルに話しかけた
「何よ！！雅春！！今良いとこなのよ！！部屋に帰って、遊んでなさい！！」
「雅春…ちょっと…こんな所で邪魔をされると…僕も…」
「いちゃつくなら、自分たちの部屋でいちゃつけ！！それに、部屋に帰りたくてもあんたらが…邪魔なんじゃ！！」
俺は、ちゃぶ台をひっくり返すような動作をすると、母さんと親父は、俺のこの動作に乗ってきて、ひっくり返る！！
「ちょっと！！そんなに怒らないでよ…私たちだって…ねぇ…場の雰囲気とかあるのよ…」
母さんは、もじもじ指を動かしながら、上目で親父を見る
「春夏はシャイだから…ねぇ…雅春は…ぶっちゃけると…勢いで××したときの」
「待て！！それ以上喋るな！！俺の心にトラウマを増やさないでくれ！！」
上目遣いで見られながら親父は、俺の出生の原因を語ろうとしたか

ら、俺は悲鳴をあげ地面に蹲った。だが、親父は止まらず…俺の幼い頃の事を語り続けた…
それから…3時間後…
「雅継さん、その辺で止めといた方が…」
散々俺の忘れたい過去の思い出を喋った後…親父は、母さんに止められ、黙った。
助けてくれるのか？
俺は、期待の眼差しで母さんを見る…まるで仏だ…後光が見える…
だが、母さんが俺の視線に気づくと…あれ？なんでだろう？
後光が…赤く染まり始めたような…
「この続きの、雅春どきどき初恋は、冥乃ちゃんといるときに話さないといけないでしょう～」
いままで仏だと思ってみていたのは…鬼神菩薩…だった…
確かに仏だが…鬼から伸し上がった…鬼の心を持つ仏だ…しかも…
俺の初恋って…
俺の頭から血が引くのを感じる…
「雅春の初恋か～まったく～春夏は罪作りな女性だね～」
「もう～息子にマジと狂気の告白されるなんて～わたし～困ったわよ～」
最早…意識を涅槃の彼方まで…逃避させながら…俺は過去の俺に…
唾を吐きかけたい気分だった…
「でも、私は言ったわ！！雅継さん一筋って！！」
現実逃避をしている俺に他所に…二人は過去の俺の失態の話しに盛り上がっていた…

33．絶望の朝

俺は一晩中…床に倒れ…現実から逃避した…
逃げた…逃げた…逃げ続けた…
息子はマザコンと言う世間の見方から俺は逃げ続けた…

ああ、誰だよ…母さんを二人目のお母さんじゃないのかと言った奴…思い出したら殺しに行ってやる！！
「それにしても、あれじゃな～小僧のような奴でも、母を好きなんじゃな～」
怒りに燃える俺の懐から石がそう呟き…
「ぎゃ！！！！！！！！」
俺は現実を否定する雄叫びを上げ…
「きゃっ！？」
俺の後ろで誰かが倒れた音がした
「きゃぁ？」
俺は後ろを振り向く…むしろ…この時…俺は、この時のパターンを理解するべきだった。
先人たちは、自分の失敗を繰り返さない為に、幾度も無く努力を続けてきた…
だが…俺は…この…目の前でひっくり返っている…冥乃ちゃんを見た昨日の事で…気まずいのに…出会うなんて…
「あっ…の…きっ…昨日は…その…なんだ！！別に…」
昨日の事を聞きたかったが…俺は…その事を聞けない雰囲気を感じたむしろ…何事も無かったかのように振舞うのが、こういう時に、人間関係を潤滑に動かす方法なのに…
「いえ…私も…変なことを言って…ごめんなさい…ただ…レンの事件を調べているときに…雅春くんが…怪我をしたら…私…」

冥乃ちゃんの目に涙が…
ああ、俺って馬鹿だ…なんでこんな時に…ごめんとか…そんな事を考えられずに…
すぐに泣けるんだな…って、思うんだろう…
冥乃ちゃんは、俺が怪我をして…気に病むタイプなのに…
「ごめん…俺が軽率だった…ただの学生が…無闇に手を出して良い事じゃなかったな…」
俺は深く頭を下げた
「まっ…雅春くん！！ちょっと…頭を上げてください！！
雅春くんがそこまでする事はないんです…レンの事をそこまで思っていたから…」
冥乃ちゃんは、涙を指で拭くとニッコリと微笑んだ…

「あの…ちょっとお願いなんですけど…」
昨日の事が解決して、安心して、頭を上げようとした俺に、冥乃ちゃんが話しかけてきた。
「ん？なんだ？」
「あの…さっきので…腰を抜かして…立てないんです…立たせてもらえ…ませんか？」
そう言って、冥乃ちゃんは両手を俺の方に伸ばした…
「道理で、すぐに立たないのかと思った」
俺はその両手を掴もうと手を伸ばした瞬間…誰かが階段を上ってくる音に…俺の動きが止まった…本能的に…そして…
俺の本能が悲鳴を上げた…
「うー…眠い…さっきの悲鳴は…」一階から…さっきまで、俺のトラウマを連発していた…母さんが…眠い眼を擦りながら…俺達を見て…
フリーズした…
「え～と…う～ん…これが…こうだから…」
そして、少しの間、俺と冥乃ちゃんを見ながら、あーだ、こうだと

指を動かし…
ぽんと手を鳴らした…腕を組み…急に大げさに俺に指を向けると
「ハンティング・ホールド！！」そう叫んだ！！
その次の瞬間…俺の脚に…なにかの布キレが…巻きついた…まあ、ぶっちゃけ、腕を組んでいる時に、準備したんだろう…そして、指をさし、注意を指に集中させ…
今のこの状況…俺は、倒れないようにバランスを取るのに集中した…
「これは…何のつもりだ！！」
俺は、母さんにそう吼えた…すると…
「雅春…アンタが…そこまで計算が出来る人間だとは思わなかったわ…
むしろ、馬鹿な子ほど可愛いと思って、あんたを馬鹿に育てたけど…やっぱり、馬鹿は馬鹿だわ！！」
母さんが、殺気を纏いながら…俺の元へ歩いてくる…
「なっ…何言っているんだ！！しかも…馬鹿に育てたって…まだ、あったのか！！トラウマメモリアル！？」
とりあえず、落ち着いてもらえるように、こんな事を話したが…それでも…母さんは無表情で近づいてくる…
「待て…待ってください！！お願いします！！理由だけでも言ってくれないと…俺も死ぬに死ねなくって…この世に未練を残してしまうかもしれなくって…」
母さんの頬が動いた…
「解ったわ…彷徨う霊になると嫌だから…あんなの犯行を暴いてから壊すわ」
壊すって…それに…犯行？
「まさか…いままでの、未遂及び事故は…こんな状況を作るための布石にする為だったなんて…」
「こんな状況？」
俺は周囲を見て…腰を抜かして倒れている冥乃ちゃん
両手を俺の方へ伸ばして…俺はその手を掴もうとした…これがなん

なんだ？
「何度も悲鳴を上げて、事故だったら…人は今回も事故と思う…そんな人の心理を上手く操った心理テク…見破れば簡単なんだから！！」
なんか…俺…また理不尽な勘違いで…壊されるのかな？
（今回は無実と理解していない）
迫り狂う母さんの拳を目の前に…俺は…眼をつぶった

３４．なぜ、俺は責められる？

俺は…痛い体を行使し…やっと、学校に着いた…
俺の悲鳴で一階にからやって来た親父が、母さんを止め…それでも、親父を投げ飛ばしてまで、俺に突撃してきた…親父が、逃げろと叫ばなければ…俺は確実に…
おそらく、帰ったら誤解が解けていると思うが…
「雅…大丈夫か？昨日よりも…疲れているようだが…」
教室の机に倒れ伏せた瞬間、昨日と同じ様に、舞華に話しかけられた
「ああ…あ？…どうしたんだ…その頭？」
俺が顔を上げ、舞華を見ると…なぜか頭に包帯を巻かれていた。
「昨日、道場で稽古していたら…刹那の一撃と私の一撃がぶつかって…同時に失神したんだ」
「あの朽木姉に、気を失わされたのか…」
攻撃力は、ほぼ無いはずだが…朽木姉め…新しい技を習得したのか？
「まあ…水月に上手く入って…体をくの字に曲がった瞬間に頭がぶつかって…」
「そうか…大丈夫か？」
俺は、頭を撫でようとして、手を伸ばしたが、なぜか、舞華が眼を閉じたので手を止めた
「頭の怪我だから、触らない方が良いな」
俺は、手を戻そうとしたが…
「構わん！！別に異常も無かった…から…撫でてくれないか？」
「そっ…そうか？」
俺はそう言い、舞華の頭に再び手を伸ばした。
綺麗な触り心地だった…
「思ったより…良い手触りだな」
俺は思ったことを口にすると…

「べっ…別に普通だ…なんの変わった事は…していない…」
舞華は眼を閉じ、体を屈め、俺の机に頭を乗せ撫でやすい姿勢になる。
（ひそひそ、今日は舞華さんを！！ひそひそ）
（ひそひそ…ああ、可愛い～舞華ちゃん…まるで大型の犬みたいだ…ひそひそ）
（ひそ、ああ…今日パス…チビ派だから、ひそ）
（ひぞ、此処にロリコンが居ます！ひそ）
なんか…周囲が騒がしかったが…
「なにやってんだ！！！！！！」
更に五月蝿い奴が、頭に包帯をつけてこの教室に現われた
「朽木姉…もうすぐ、予鈴なるのに、何しに来たんだ？」
「うるさい！！ボクの事よりも…なんで頭を撫でているんだよ！！」
「はぁ？それがどうしたんだ？」
俺が舞華の頭を撫でて何か問題があるのか？
「別に、私が許可したんだ…雅…手が止まっている」
「ああ」
俺は舞華に言われ、手を動かした。
「はぁ～♪」舞華が気持ち良さそうな声を出した
「くぁ！！！！！」
それとは対象に、朽木姉はまた吼えたが…なぜ吼えるんだ？
（修羅場だ！！）（くそ～可愛すぎる！！）（刹那ちゃ～ん）
（頭を撫でてやりてぇ！！）（抜け駆けするな！！）
なんだか周囲も、騒がしく、男子どもが、取っ組み合いを始めだした。
「なんで、そんな風に朽木姉は吼えるんだ？」
「それは…うっ…」
何か言い難そうに、朽木姉が戸惑う…まあ良く解らないが…
「おい、ちょっと、こっちに来い」
俺は朽木姉を手招きした。

「なっ…なんで、ボクが動かないと…」
「いや、俺はいま、舞華の頭を撫でているから動けない」
朽木姉が顔を真っ赤にさせ、地面を蹴ると、しぶしぶ、俺の近くに来た。
「まあ、良く解らんが、お前も頭を打ったんだろ？大丈夫か？」
俺は朽木姉の頭を撫でると、なぜかさっきよりも顔が赤くなった…
（あの野郎！！両手に花か！！）（おっ…アイツ！！）（刹那ちゃん！！）
（上手くやったわね…まさか、天然で頭を撫でるなんて…）
（くっ！！奴は素で女たらしか！！）

「みなさん！！おはよう…ご…ざいま…す？」
いつの間にかやって来た教師が、俺を見て固まる
「なにをやっているんです？」
「頭を撫でてます」
俺は頭を机に乗せながらそう答えた…
「はにゃ～～♪」
「ふしゃ～～♪」
席に着けよ、教室に帰れよ…俺はそう思いながら…
「手が止まっている！！」
「手！！」
二人に怒鳴られ、俺は再び手を動かした…

35．俺は

二人の頭を撫でながら、俺は今後の事を考えた。
今朝、冥乃ちゃんにはあんな事を言ったが…前にも言った事があるような気がするが…
俺は、自分が出来る事がないのかを探している…
先輩が探していた石…それは、実在した…そしてこの石の力…
再会を司る石…
（おい…石…俺の心が読めるか？）
（うむ、聞こえておる…別に再会の願いを譲渡する事なら出来るが…その者が、会いたいと願わぬ限り、効果は無い）
願いの譲渡が可能か…だが…誰に頼めば…あの男と…先輩を殺したといわれる男と再会できるんだろうか？

「雅！！」
俺は舞華の声で意識を取り戻した
「もう昼だというのに…何を寝ている！！」
いつの間にかお昼になっていた…無心で手だけを動かしていたから、まったく気づかなかった。
「はにゃ～」そして、俺の片手にまだ気づいていない野生小動物が…
「おい、小さいの…飯だぞ！！」俺は撫でる手を拳に変えるとその頭にでこピンをした。
「ふぁ！？」
急に現実に戻ってきた朽木姉は、額を抑えながら左右を見て、俺と目が合うと
「何でお前が、ボクの教室にいるんだ？
さては…お腹が減ってボクの所へ急いできたんだな～まったく～食いしん坊だな～」
なんて馬鹿なことを言い出した…

「寝ぼけるなチビ！！此処は俺の教室だ！！」
「ちっ…チビ！！また身体的特徴を…侮辱するなんて！！…って…俺の教室？」
チビに反応して朽木姉は怒鳴ったが…俺の次の言葉を理解し、周囲を見る
「あれ？此処ボクの教室じゃない…」
「だから言っているだろう？それより…朽木姉、授業は良いのか？」
ずっと無心に手を動かしていた俺が今更だが…そう聞くと…朽木姉の顔は青ざめた。
「うわぁ！！ボク…今日授業に出てないよう！！」
まあ…泣き出しそうな、朽木姉を宥め、俺は食事を食べる事が出来た。

「なぁ…」
ある程度食事が終わり、俺は、二人に話しかけた。
ちなみに今回は、食べ物を押し付けられる事は無かった。
「昨日の話しだけどさ…どっちか、尾田と自己紹介してないか？」
「はぁ？」
俺の質問に二人は呆れ顔で返事をした。
「昨日も言ったけどさ…あの事件があって、ボクは連子と仲が良くなったんだよ
その前は殆ど接点が無いし…それ以降は、危険人物なんだよ！！挨拶すらしてないよ！」
「私も…聞いただけだから…会話すらしたことも無い」
初っ端、石の第一条件に二人とも該当しなかった。
「そうか…変なこと聞いて悪かったな」
俺は二人に謝ったが
「別にいいけど…なんでそんな事を聞くの？」
朽木姉がそんな事を聞いてきたが、どうせ説明しても解ってもらえないだろうから、

「いや、なんでもない…ただ知りたかっただけだ」
俺はそう言って言葉を濁した。
まあ、不服そうだったが、朽木姉はそれ以上聞かなかった。
なぜなら…
キンコンカンコン！！
「二年F組の朽木刹那さん、教育指導の笹本先生が教育指導室で待っています。
すぐに来てください」
「えぇ！！何でボクだけ呼ばれるの！！」
こう言う理由だった…
ちなみに、俺達が呼ばれなかったのは、とりあえず、教室に居て…先生が自分の問題をもみ消したからだ…査定がどうとか言ってな…世の中腐ってやがる…そう思った昼休みだった。

36．放課後

あの二人が駄目だと…他に可能性のある人物は…
俺は授業中その事をずっと考えていた。
尾田に面識のある人物…教師…駄目だ…
そんな事を聞いたら…変に思われる。
部外者…知らない奴に聞いても無駄…奴が入院していた病院…
駄目だ、守秘義務がある。
関係者で…こんな事を聞いても、不審に思わない奴…もしくは、思っても何しない奴…
（そんな都合の良い存在なんているはず無かろう？）
石が俺の心に話しかけてきた。
（世の中絶対は無い…だが…そんな都合の良い人物を思い出せるかに…）
「おい！！お前！！なんでボクだけ呼ばれて、お前は呼ばれないんだよ！！」
いつの間にか授業も終わり、ＨＲも終わっていた。
「別に、ここの担任のしたことで、俺のせいじゃねぇ…」
「なんだよそれ！！ボクが聞きたいのはそんな答えじゃない！！ボクに言う事があるだろう！！」
はぁ？なにを言っているんだこのチビ？お前に言いたいこと…そうか、同情して欲しかったのか～
「運が悪かったな、犬に噛まれたと思って、永遠に覚えていろ」
「犬に噛まれたら、普通忘れないし…うん…その言い方で、あっていると思うけど…普通忘れろとが！！ごめんなさいって言うだろ！！」
「はぁ？何で謝らないといけないんだ？」
俺がそう言うと、朽木姉は、深くため息を吐き…
「ボクだけが怒られたんだよ！！あの脂ぎった教育指導の奴に…ね

ちねちと身長の事を馬鹿にされ…ボクは悔しくて…悔しくて…舞華を見習えって…」
俺は舞華を見る…疲れたかのように肩を落としている…
「ボクは…舞華と双子なのに…」
俺は、朽木姉の肩に手を置いた。
「双子って関係ないだろ？朽木姉は朽木姉で、舞華は舞華なんだ」
そう言うと、舞華は顔を俯けた。ただでさえ小さいのに、こうなったら表情が読めない
「でも…ボクは…ボクは…」
朽木姉の肩が震える
「別に、お前が、舞華の真似をしたところで、お前は、舞華になれない
お前は朽木姉でしかないんだ」
「でも…でも…」
ああ、うぜぇ！！
「いい加減ぐだぐだ言うのは止めろ！！
お前は確かに、舞華と違って、頭も悪ければ、力も無い！！
だけど…お前は、料理が出来る、努力が出来る、それに…元気が良いところが、可愛いじゃないか」
朽木姉が顔を上げる…その目には、うっすらと涙が溜まっていた。
「本当？ボクって…可愛い？
黙っている方がとかじゃなくって…今のボクのままで…可愛い？」
あれ？何でか顔が紅くなって…俺って…何か恥ずかしいようなセリフ…しまった！！
元気が良いところ…って…言っちまった！！
いつもなら、この部分は黙っているのに！！
「ねぇ…ボクって…このままで良いのかな？」
えっ…あっ…なんか…ヤバイ予感がする…話を逸らさないと…
「私は…いつまで、この状況を見ていれば良いんだ？」
それは、まさに天の助けの言葉だった！！

「うわぁ！？」
舞華の言葉に、朽木姉は急に現実帰還し、舞華と目が合う…
「目の前で、いちゃいちゃされるのは…はっきり言って困るんだ…」
「べっ、別に、いちゃいちゃしていたわけじゃ…ボクは…その…」
なんだか良く解らないが、いままでの空気が一気に消えたのを感じ
俺は安堵の息を吐いたが！！
「それに…雅！！私の料理が下手だと言ったな！！」
急に俺へ矛先が変わった！？
そんな事言ってないのに、下手って言った事になっているだと！？
「それに、ボクは可愛いんだぞ！！コイツが言ったんだからな！！」
「雅…私は可愛くないのか？
私は…刹那と違って…可愛くないか？」
女の涙は反則だ…このとき…本気でそう思った…

37．つぎの

あれから、何度も可愛いと言いつづけ…俺は意気消沈だった…
まあ、最終的に、どっちが可愛いかを聞かれ…逃げたが…
（まったく、タラシな奴じゃ…いつか背中を刺されるのは、覚悟するのじゃな）
（おい！！石！！そんなありえない、怖い事言うなよな！！）
あの二人が俺を殺そうとするなんて…信じられない
（まあ、そんな話は置いておくかのう…小僧…次の当てはあるのか？）
尾田の件か…
（いや…尾田を知っていそうな…いや…居るな）
居ないと言いかけた俺の目の前に…一人の男が居た…
「やぁ～昨日は、ごめんね～知らない場所に置いていくなんて…」
桜庭祭だった…この男は確か…尾田が脱走したことも知っている
もしかしたら、尾田を取材して…俺はその事を聞こうと思ったとき…
「この前の事を謝るついでに、君に聞きたいことがあるんだ」
桜庭はそう言った…顔の表情は、夕日のせいで暗くなって良く見えなかった。
「別に良いけど…なんだ？」
「君は…紅い石の噂を信じるかい？」
桜庭はそう呟いた…

「昨日、帰る時に、紅い石の話をしたね？鷲見君が探していた物…君は信じるかい？」
俺は…その質問に答えられなかった…
「いや、ごめん！！変な事を聞いたね～別に気にしなくても良いよ～」

少しの沈黙のあと、桜庭はそう言うと、笑った。
「実は、有力な情報で、尾田君が、この町にいる事がわかったんだよ」
俺は、桜庭をにらみつけた
「いやはや、怖いね～僕も、この情報を手にしたとき、怖くなったよ…
まさか、彼がここまでして、鷲見君を殺しに来たんじゃないのかと思ってね～
取材したときには、そんな事は無いと思っていたんだけどね」
こいつは…尾田と会話をして、取材もしている…自己紹介をした仲か…
石の条件に合っているが…俺はその事をなぜか言えなかった…
本能が、この事を話してはいけないと訴えていた。
それに…石もなぜか怯えていた。
（小僧！！妾の存在は絶対に言うな！！嫌な予感がするのじゃ！！）
こいつも、俺と同じ予感を感じていた。
「もし、再会する石が存在するなら…きっと、彼に出会えると思うのに…」
「そんなの存在する筈が無いだろう？そんな石があったら、生物学上明らかにありえないじゃねぇか」
俺は、これ以上この男と話したくなくって、さっさと切り上げようとした。
「まあ、そうだね～あまりにも非現実的な発言だったね～
生物学上ありえない話をして悪かったね～知り合いが、この事件に関わっていると思うと…ちょっとね～石が喋るなんておかしいよね？」
急に、桜庭の雰囲気が変わった…初めてあった時の雰囲気だ…
「ああ、そうだ…石が喋るなんておかしいからな」
「うん、そうだね～石が喋るはずないよね
じゃあ～僕は調べ物があるから…あっ、その前に面白い話があった

から、君に聞かせてあげよう」
早く、この男から離れたいのに…桜庭は話し始めた…
三日月のように輝くナイフを持った殺人鬼の話を…

38．銀色の刃

「これは…あの後に取材した男から聞いた話だけど…
その人物は、警察に発砲されそうになって、訴えようと考えているんだ」
警察にね…そう言えば、昨日、そんな音を聞いた覚えがあるな…
「まあ、その人は、日頃から警察に恨みがあってね…
この事で、本を書く事を決めたんだけど…なぜ、彼が今回発砲されそうになったのかを聞いたら、気を失って、倒れていたらしいんだよ」
「暴漢にでも襲われたのか？それとも、何かの病気でか？」
この近所だったら…俺も警戒して、被害を食い止めないと…
「実は、違うんだよ…彼はね…声を聞いたらしいんだ」
「声？」
「ああ、とても苦しい声を…」
俺は息を呑んだ…まさか…大掛かりな犯罪を目撃した？
「まあ、今から話す事は…他言しちゃいけないんだけどさ～
君にだから話すんだよ…その声は…“連子が死んだ”“殺す、殺す”“憎い、憎い”“護れなかった、殺してしまった”そう聞こえらしいんだよ」
俺は、桜庭をにらみつけた
「冗談だろ？なんで…ここで…先輩の名前が出るんだよ！！」
俺に睨まれながら、桜庭は肩を軽く上げると
「さあ～彼は酒を飲んでいたらしいからね～信憑性は無いけど…僕も、鷲見君の名前が出たからびっくりだよ」
「それからどうなったんだ？」
「まあ、男は其処で立ち止まって、周囲を見回したら、不気味に輝くナイフを持った何かがいたらしんだよ…その後からは腕を斬られ

たと思い、そのまま気を失ったらしい」
後半は、どこにでもある都市伝説だった…
「まあ、何かしらの事件があった可能性もあるから、君を深夜は気をつけて！」
そう言うと、桜庭は今度こそ、去って行った…
（おい…石…さっきの感覚は何だ？）
（わからぬ…じゃが…あやつ…小僧の発言で、なにかしらの計画をたてているようじゃ）
（俺の発言から？）
（うむ、妾の存在を知っていると判断したようじゃ）
（なんでだ？俺は変な事を言ってないが…）
（…小僧は馬鹿じゃな…）
石が呆れた様にため息を吐く？
（小僧、おぬしの発言を、今一度思い出してみよ）
俺の発言？
（言ったであろう？生物学上ありえない、そして、喋るなんてありえない）
！？
（小僧…なぜ、再会できる石を信じるかで、喋るとかを質問するんじゃ？）
しまった…俺は、上手く誘導尋問され…喋った様なものだった…
（じゃが…それを知っていて…あの男は、小僧を問い詰めなかった…これはどう言う事じゃ？）
確かにそうだ…なぜ…聞いたのに…
（まあ、別に良いだろう？深く考えすぎだったと考えても良いんだし…
生物学上って言っても…お前の伝説は、生きた人間が、待ち続けて、変化していく伝説だし…喋らなきゃ、意思疎通は出来ない…深く考えすぎたんだろう？）
（そうじゃと良いんじゃがな…）

（むしろ、お前のような存在がわかれば、特ダネの大スクープだろ？）
俺はそう言って、自分を納得させた。
（それより…さっきの男の話だけど…お前はどう思う？）
（あの愚かな話か？と言いたいのじゃが…この町…妾に似た何かを感じる）
（お前に似た何か？）
（うむ、妾は再会を司るじゃが、これ以外にも様々な力を持った者がいた）
俺は、少し黙って…考えた
こいつ以外の力…まあ…こう言う存在が一つではないのは…考えられるが…
（種類は、いろいろあるの…空を飛ぶ事を司るとか、守護を司る、幸運を司る、試練を司る…数えたらきりがない…）
（どっかの漫画みたいな設定だな）
（まあ、現実と思っている世界が、狭かっただけじゃ…まあ…妾たちは、共に干渉せぬように、存在し続けておるが…たまに、出会うときがある…妾も、二、三度近くで不思議な出来事が起こった…その時の感覚に似ておる…）
（つまり…もしかしたら…そいつが先輩の死について何か知っているかもしれないのか？）
（おそらくじゃがな…じゃが…妾のような石の様な姿をしているかもしれんし、そうではなく…人の形をしているのかもしれない）
（人の形！？そんなんで…ばれたりしないのか？）
（わからぬ…何かの力が関わっているのかもしれん…今回がそうとも限らない…妾たちは、多種多様で様々な生き方をしているのじゃ！）
実は、この世の中は、大量の化け物が人間として振舞っているんじゃないのかと不安になった。
（じゃあ…先輩の不審な死に方も…）

（うむ…妾のような力の持ち主が関わっている可能性がある）

俺は…その答えに…歓喜した…

39．狂気の獣

そうか…そうなのか…
先輩の死に関わる者は…人では無い可能性があるのか
人で無ければ、それは国の法にふれる事無く…〇れる！
確実に〇る…人権の存在が無い化け物を殺しても、罪にはならない…
もともと、相手が人間でも…俺はきっと…この感情を…
この殺意を湧かしただろう…だが、それでも、俺の理性が、復讐とは愚かだと笑ってしまう。
なぜなら、俺は復讐を一度放棄した人間だからだ。

この町に来る前の俺は、狂っていた…
今の俺から見ても狂っていると思えた。
そして、前の俺からも、今の俺を狂っていると思うだろう。

前の俺は…力に溺れていた
親父たちに鍛えられ、どんなピンチにも余裕で対処し…
その力を使えば、金がいくらでも手に入った。
その力を使えば、どんな人も俺の足元に転がった。
まさに…世界は俺の物だと考えていた…

従う者には、おこぼれを、従わぬ者は制裁を…
いろんな犯罪を犯した…器物破損、傷害事件、強盗…性犯罪以外の軽犯罪はある手度、俺の品性を貶めない範囲で行っていた。
とりあえず、例え手下でも性犯罪者は制裁した。
まあ…それは母さんの教えで染み付いた事だったが…俺はそんな世界で暴れていた。
ある日、俺の手下が、オヤジ狩りをして、そのオヤジの持ち物でやけに重いトランクを持って帰ってきた…

これが、俺の破滅の始まりだった…
俺は、そのトランクを開錠すると、中には大量の札束がぎっしり詰まっていた。
手下どもはそれを喜んだが、俺は…この金を…どうするか悩んだ。
この金は、どう考えても、汚れた金
こんな物を持っていれば…災いを招く物と考えたが…俺は…馬鹿だった…
どんな災いでも、俺のこの力で…叩き伏せれば良いと考えていた…

結果…俺は…両手から力を失った…
その金を取り戻しに来た…金を持っていたオヤジの部下らしい男に…俺は負けた。
そして、俺は、端の方で追い詰められ、怯えていた手下の方へ俺は投げ飛ばされ…
俺の手下は、地面に倒れた俺を…起こさず…蹴りつけられた
俺のせいだと言って…そいつらは俺に危害を与えてきた…反撃をしたくても、俺の体には力が入らず…無様に蹴り飛ばされた…踏みつけられた…
そして…参謀と言って俺に付き纏っていた奴が…俺を売り出すようなことを言い…
自分たちは関係ないと言い出した…そして…その参謀は…俺の元へ走ってくると、俺の頭を全力で蹴った…
その一撃で…俺は…殺す…殺してやる…その憎しみを抱きながら…意識を失った…

次に目が覚めたとき…俺は病院の病室で寝かされていた。
親父と母さんが…俺の両手を握って眠っていた…二人とも目が赤かった…
二人は…俺の為に泣いてくれたのか？
意識を失う直前まで思っていた憎しみが…なぜか…俺の心から消え

始めた…
俺は…この二人から貰った力を…誤った事に使ってしまったとそう考えていた…
だから…やり直せるのではないのかと…幸い…体の傷は自己診断した限り…異常は無かった…
まあ…復讐だけは…いつかしよ…う…そう考えていたが…
「うっ…うん？…！！」
俺が起きている事に気づいた母さんが、俺の手を力いっぱい握った！？
「雅春！！」バキャベキャ！！
俺の手が砕ける音が！！
「んっ…雅春！！」バキャベキャボキャ！！
さらに、母さんの声で眼を覚ました親父が…俺の手を力いっぱい握る！！
「ぎゃ！！！！！！！！！！」
そうして…俺は…両手から握力を失った…
そして…親父と母さんが、急に仕事を止めたと言い出して…引っ越す事が決まった…
その間しばらく捻くれていた…人を信じたくなくなっていた
まあ、先輩と会って…そんな事を忘れてしまったけどな…そもそも…その頃は、友達なんていなかったから、今は幸せだと俺は思う。

40．石ころ！！

（そうじゃったな、昔は小僧、力に溺れ破滅した経験があったな
両親に両の手を握り潰されるとは…軟弱な小僧だ）
（うるせ！！あの時骨折で、上手く治療できそうだと判断してのに、
その直後に複雑骨折だぞ！！握力が持続しなくなっただけでも奇跡
だ！！）
（ふむ…そう言うものなのかのう？
じゃが…小僧の手下どもは、どうなったんだ？）
（それは、俺も解らん…もう二度と会いたくないな
そもそも、誰が…俺を病院に運んでくれたんだ？
あの頃は、腕を握り潰された怒りで、会話をしなかったからな…）
それに…あの時、俺を倒したあの男は…今頃どうしているんだろう
か…
（再会したいのなら…）
（使わない！！良いか？俺は、先輩の敵討ちがした…い…
いや…なんで…敵討ちとか…冥乃ちゃんに…しないって…誓ったの
に…あれ？
確か…尾田って俺が来る前の先輩の親友みたいな感じだったよな？）
（小僧の記憶にはそうあるが…違うのか？）
（そう言う意味じゃない…もしかして…先輩の妹である冥乃ちゃん
なら…知っているんじゃないのかな？）
（ふむ、そうじゃのう…確かに…その関係なら自己紹介をしている
可能性も…）
（じゃあ…さくっと帰る…）
俺がそう思いかけたとき…俺は気配を消し、身を潜めそうな場所に、
身を潜めた。
（どうしたんじゃ？さっそくあの男が、誰かを仕向けてきたのか？）

石が俺にそう意思を伝えてきたが、俺は息を殺して、背後から来る人物を見た…
中年太りの、髪の毛の薄い男が、校門から出てこようとしていた
（なんじゃ？あれは…）
（学級指導の笹本だ…まったく、いつ見ても胸糞が悪くなる）
（ああ、あのちっこい娘を侮辱した奴じゃな、内心小僧は、あの男の発言に怒りに燃えておったからのぅ）
石は余計な事を俺に言った…
（うるせ！！黙れ！！お前のほうがチビだろ！）
俺は石にそう言うと、考えた。
確かに朽木姉の事で、怒りを感じたのは、認めよう…だが、断じて、変な感情ではなく…
朽木姉を慰める無駄なアクションを作った事に怒っているんだからな！！
と、俺は誰かに言い訳をするように考えた。

「まったく…あの餓鬼…」
俺が隠れている事にも気づかず、笹本が通り過ぎた…
通り過ぎる際に、あの餓鬼…と聞こえたが…朽木姉の事か？
俺は、気配を消しながら、声が聞こえる範囲で尾行したが…それ以降、何も言わず、
俺は１０ｍ尾行して、やめた。
（ちくしょう…何を言いたかったのか、わからねぇ…）
（ふむ？妾には聞くことが出来るが…小僧に教えてやろうか？）
悩んだ俺に石がそう話しかけてきた。
無論ＯＫだ。
（素直なのは小僧の取り柄じゃな）
一言余計なことを石は言ったが、俺は気にせず…
（ふあぁ！？）
（なんだ！？変な声を出して…）

急に石が変な声をあげ、俺は慌てて石に語りかけた。
（なんじゃ…この男…気持ち悪い…）
（気持ち悪い？どう言う事だ？）
（これを妾の口から話すのは、気持ち悪すぎるのじゃ！！）
石そう言うと…急に俺の頭に情報が…映像が流れ込む…
それは…夕暮れの暗い教育指導室…其処に…暗くて顔は見えないが女子の制服を着て、明らかに怯えていた…
（何だこれは…）
この現象を起こしたと思われる石にそう俺は話しかけた
（あの男の頭で考えている事を、映像化したのじゃ…）
これがあの男の今の頭の中にある映像？そう考えている間にも、映像は流れていく…
女子生徒は、壁際に追い詰められていく…必死に拒絶の言葉を言い…助けを求めるが…それはまったく無意味で…逆に…凄い近い所から…興奮し荒くなった呼吸が聞こえる…
そして…俺の目の前で…その女子は…床に押し倒された
（だぁぁ！！）
俺は、慌てて自分の顔面を殴った…これ以上こんな映像を見ていたく無かった…
だけど…その映像は続く…
（石！！早く止めろ！！気持ち悪い…これ以上…俺にこんなのを…）
女子生徒の制服が破かれる…
（止めろ…止めてくれ！！！！！！）
俺の心は悲鳴を上げるが…意思は映像を止めない…それどころか…より鮮明に…石は…映像を俺の頭に送る…
（小僧！！いい加減にしろ！！なぜ顔を見ようとはしない！！女子生徒の顔を見るのじゃ！！）
気持ち悪かった…吐きたかったが…今まで暗くて見えなかった…女子の顔が見えた…
それは…知っていた…

「あっ…」
俺は…その女子生徒の顔を知っていた…
そして…俺が…それを理解した瞬間…映像が止んだ…
（やっと…受信したか…）
石が疲れたように…俺に話しかけてきた…
（小僧の頭が、今の映像を認めようとし無かった…その為に、小僧にあの娘の顔が初めは見えなかった…じゃから、妾は力ずくで小僧にその映像を見せつけた…小僧は、見なくてはいけないことじゃったからな…）
俺は地面に膝をついた…その映像で見た女子生徒は…
「何で…朽木姉が…」
そして…俺は…また自分の顔を殴っていた…
身近で…友人が…辛い目に遭ったのに…それに気づかず…
あの怯えた朽木姉の顔が…見え…俺は再び拳を顔面に…
（小僧！！落ち着け…あれは、記憶ではない！！願望だ！！）
俺の拳が止まる…
（え…それって…）
（あれは、あの男が発情でもしておったのじゃ…）
あれは…ただの妄想か…俺は安堵の息を吐こうとしたが…次の石の言葉に…その息を止めた…
（じゃがな…あんな目に娘を遭わせた記憶はあった）
俺は、笹本が歩き去った方向を睨みつけた…
（つまり、このままじゃ…危ないって事か…）
俺のその言葉に石は頷いた。

41．新たな契約

（石…あの男の記憶だと…このあとの予定は何だ？）
（ふむ…飲み屋に行くと考えておったの…三丁目の焼き鳥屋じゃ）
（やけに詳しいな）
（な～に、小僧…妾はこの町で都市伝説まで祭り上げられた存在じゃぞ！！この町の歴史はお前よりも詳しいのじゃ！！）
確かに、そうだな…この町の歴史に詳しそうだ。
んっ？なんだ…変な違和感がした…だが、今はその違和感に気づく余裕は俺には無かった。
（飲みに行くとしたら…遅くなると考えても良いな…ふふふ…二度と欲情出来ぬように懲らしめに行くのじゃな）
石が俺の考えを口にした。
そう…今の俺には…奴を潰すことが…最優先事項だ…
（ちなみにじゃな…あの男…あの娘の家族まで狙っておったのぅ）
俺の想像上で笹本の両足が砕く映像が過ぎった…そして…
（不能と四肢の粉砕…小僧は、やはり、あの娘たちの事を好きなのじゃな～
もし、妾がいなかったら、その娘たちはどうなっておったか…見物じゃのう）
石が、ころころと笑う…
（ああ…大切だと思っている…その前に…一言いわせてくれ）
（なんじゃ？不謹慎な事を言った妾を…）
（すまなかった）
（むっ？…なぜ謝るのじゃ…）
（お前…あの男の記憶とか…嫌な感情を全部…見てくれたんだよな…）
俺がそう言うと石は、何かが凍りつくような気配を見せる

（そっ…そんなんじゃない！！妾は…別に…そんな事など…表層しか…）
俺は石が慌てて取り繕う声を聞き、少し笑いそうになったが…
（あの映像…まるで自分が、相手を襲っているような感覚…お前もそれを感じたんだろ？）
（じゃから…別に…あの程度の事…妾は…）
石は平気だと…自分は大丈夫だと、誇示しようとしているが…次第にその声に力が無くなる
（俺はあの映像を見て…とても苦しかった…自分自身がやってないのに…
自分自身を罰しようとしてしまった…お前は…あっ…お前って言うのは止めよう）
石だのお前だの、いつまでも、変な言い方でいるのは、おかしいな
（石でもお前でもかまわん！！じゃから…妾に…これ以上優しく…）
“優しさを拒む奴程、優しさに飢えている”先輩が俺に教えてくれた言葉の一つだ
（紅の石（くれない）…俺は今度から、お前の事を紅玉（こうぎょく）って呼ぶ）
（！！！）
（紅玉…いままで、お前を石呼ばわりして悪かった）
俺がそう言うと…紅玉は…しばらく黙った…そして…
（紅玉…良い名じゃな…小僧…いや…雅春…御主から貰ったこの名…大切にするのじゃ…）
紅玉は、初めて俺の名を呼んだ…俺は、ポケットから紅玉を取り出すと俺の顔に近づけた。
（ああ、紅玉…改めて言わせてくれ…すまなかった…
あんな苦しい思いをさせて…悪かった
そして、ありがとう。紅玉が再会したい人物に会えるように、俺も頑張る！！
だから、もう少しの間、力を貸してくれ！！）
（妾も…一時の間じゃが…よろしく頼むのじゃ！！それに妾は、永

く生きてきたのじゃ、あれくらいの妄想など、軽いものじゃ！）

こうして、俺は紅玉と改めて契約を交わした。

42．紅玉

小僧に、妾は名を貰った
小僧は、妾の事を想ってくれた
妾が、見せたあの苦痛を…察し妾を怒らず…妾を人のように扱った。
妾は…平気だといったが、辛かった
今は、存在しないこの腕が…誰かを傷つける映像を見るのが…苦しかった。
心が穢れていくのが辛かった…
まだ見ぬ…まだ思い出せぬ…愛しい主に汚れてしまった妾を見せたくなかった…

妾は、妾たちの存在を創りし者に…ある契約をした…
それは、再会の約束
妾が司る力…だが、その力は、妾自身には効果が無かった…
だから、妾は願った…再び出会う事を…なぜなら…妾を創ってくれた主は…妾たちを…泣きそうな眼で…見送ったのだから…いや…泣きそうな眼で…妾たちに見送られた…
妾たちに見送られた主は、体だけが残り…動かなくなった。

それから、妾たちは主の体の一部を貰い…別れた…
それぞれの司る事をまっとうする為に…
何度か、再会を果たした事がある者もいたが、妾は主に出会う為に、力を使った…
再会させ続ければいつかで会えると…信じて…
だけど…再会させながら、妾は何かを失っていく感覚を感じた…
それは…今はわかる…妾は記憶を失っている
再会した妾の仲間にも、同じ症状が見られ…妾たちはある結論に達

してしまった…
妾たちは、心を失おうとしている事に…そして、初めの犠牲者が出た…
己の司る力を暴走させ…妾の仲間が人を殺した…
彼の者は、己の力は人を助けるのに必要な力だと言って、力を行使し続けた。
治療を司る存在…だけど…そんな存在であった彼は…人を殺した…人を殺して…殺して…そして壊れた…
ある者は、戦いを司っていた…
理由ある戦い…戦いの掟を忠実に護り…それを犯すものを滅ぼしてきた…
だけど、そんな彼も狂った…理由なき戦いを世界に広げ…全てを滅ぼそうとした…
そして…彼は壊れた…

それから、妾たちは…それぞれの力を恐れ…自身が壊れそうになった時のみ…他の存在に壊してもらうように…頼む事を決めた…
じゃが…妾は嫌じゃった…妾は主に会いたいのに…そんな目的を果たせず死ぬのは嫌じゃ…
だから…我は人の身を捨てた…人の身を…人の身が無ければ…狂っても…何も出来ぬと…
それまでの妾の姿は思い出せない…
じゃが…この記憶は…小僧に紅玉と呼ばれた事で…思い出した…
この名は、主が最初にくれた名前だと…
妾の眼は紅かった…まるで宝石の様に…綺麗だと…主に言われた事を…妾は思い出した…
妾は…この名前を忘れ…人々の噂で言われる…紅の石の名を…妾の名とした…
だから、この名を思い出させてくれた雅春に…妾は感謝した…
じゃから…妾は、雅春に尋ねてしまった…

（雅春…なぜ…妾を紅玉と名づけたのじゃ？
べっ…別に、気に食わんと言う意味ではないのじゃ！！
…ただ…その由来を知りたいのじゃ…）
妾らしくない…そう妾でも思える力の無い言葉だった…
もしかしたら…雅春は…適当に名前をつけたのではないのかと言う不安があったからじゃ…
（んっ…別に、たいした理由は無い）
やはりそうじゃな…
（初めて見たときに…紅い宝石のようだと思ったからさ）
雅春の言葉に…妾は己が熱くなるのを感じた！！
（なっ…何を言うか！！雅春！！
おぬしは、妾を初めはイミテーションと馬鹿にしおってからに！！）
妾は自分が熱くなった理由を、認めたくなくって雅春に怒鳴りつける！
（なんだ！！急に怒鳴りやがって…確かにそう言ったかもしれないが…初めは…）
（うるさい！！うるさいのじゃ！！もう妾は休むのじゃ！！）
少しでも…雅春が主でも良いと思えた自分が恥ずかしくて、妾は雅春の意識から接続を切った…

そして…妾は暗い世界に独りになった…
だが…なぜか…いつもと違って…この暗い世界が少し暖かく思えた…

43．裁く

家に帰り、食事を終えた俺はコンビニに行くといって、家を出た。
こっそりと出て行っても良かったが…今朝あんな話をした後で、隠れて出て行ったらまた心配させてしまうと思った。
紅玉は、帰宅途中に、名前の由来を聞いてきて、なんか急に怒って黙り込んでしまった。
何か悪い事でも…イミテェーションと思っていた事が余程腹がたったんだろうが…
まあ、いまは…

俺は視覚に笹本を捕らえた。
ほろ酔いを通り越して、完全に酔っ払っている…手には、帰宅途中にコンビニで買ったビールを持っていた。
（酔ってやがる…これで俺の顔を見られたとしても…所詮は酔っ払いの戯言扱い！！）
俺はそう考え、丁度人気の無い道を笹本が歩き出し、電灯の下で足を止めた。
（やるなら今だ）
俺は一気に距離を詰めようとして…不意に…桜庭の…あの話が脳裏に横切った…銀色のナイフを持つ…怪異…の話を…
なぜ、こんな時に…俺はこの話を思い出すんだ？
そんな考えのせいで、一瞬俺の意識が現実から逸れた…その瞬間…
「うわぁ！！！」
笹本が悲鳴を上げた。
見つかったか？俺はそう思ったが…違う…
笹本は、俺がいる方向とは真逆の方向を見ながら、悲鳴を上げていた…
そして…俺も…その方向を見て…我が眼を疑った…

鈍い銀色の光を放つ…三日月のような…ナイフが…暗闇に浮かんでいた…
「つ…辻斬り！！」
笹本がそう言い、逃げ出す動作をしようとしたが…笹本は急にその場にへたり込んでしまった…どうやら、腰が抜けたようだ…
鈍い三日月は、そんな笹本に…ゆっくりと…近づいていく…
「くっ！！来るな！！」笹本が怯えながら、缶ビールを三日月に投げつけるが…
…スパン…
缶ビールはその音がした瞬間…消えた…
斬ったとか、防いだ、避けた、どれでもない…缶ビールは消えたのだ…
「なっ…何の恨みが！！しっ…知らない！！鷲見がどうなったかなんて！！止めてくれ」
急に笹本が…先輩の名を口にした？
なぜ此処で先輩の名が…そうだった！！
この話には…銀色のナイフを持つ者は…先輩の名を呟き…つまり、先輩の事を知っている可能性があるという事だ…
（このまま、笹本が怯え苦しむ所を見ておきたかったが…待て…その前に、なんで、俺には聞こえなかったんだ？）
そうだ…俺は…あの話を聞いていたから、理解できる…だが…なぜ…笹本が…先輩の名を…
（おい！！紅玉！！）
俺は、紅玉と同じ存在の仕業かと思って、声をかけたが…紅玉に反応は無かった…
（肝心な時に…本気で休んでいるのか？）
まあいい…俺は、一気に笹本の頭上まで飛ぶと…笹本の顔面を踏みつけ…（笹本の意識は、この一撃で霧散させた）
三日月の前着地した…
俺の存在を、三日月は認識すると、一瞬動揺を見せた

「なんだ？俺の存在に気づかなかったか？」
俺はまだ姿の見えぬ三日月に話しかけた。
だが、三日月は何も言わない
「なんだ？黙まってたら、肯定と捕らえるぜ？」
俺は無防備な自然体で三日月を挑発した。
電灯の下にいるせいで、より闇が濃く姿が見えない
（くそ…怒っているのかどうかも解らん…）
「黙っているなら、それでも構わねぇが…一つ話を聞かせてくれ…
あんたは…先輩…
鷲見連子について…何を知っている？それに…そのナイフ…アンタが先輩を殺したのか？」
俺がそう言った瞬間…三日月に明らかに動揺の気配が感じられ…
「その動揺は肯定にとって良いんだよな！！」俺は闇の中へ飛び込んだ！！
銀色のナイフ目掛けて低い姿勢で走り出す、そして、俺は眼をつぶった…
ナイフが俺に振られる瞬間を聞き逃すことが無いように…意識を集中させるが…聞こえたのは…背後に飛ぶ…音だった…
（どういう事だ？普通…斬りつけてくる筈だが…）
俺の予想なら、斬りつけてきた瞬間に、動きを止め、避わし、そのあと、相手の体の位置を音で測り打つ筈だった…
（これじゃ…相手の位置しかわからないな…だが…こいつは…俺に足音を聞かれず移動できる）
俺は、自然体から、構えを取る…そして、眼を開けた…
距離を取られて、相手に溜めの時間を与えれば、紙一重で斬られる可能性がある…
夜目に慣れてきたが…相手は見えない。
俺は地面を蹴って石を飛ばす！！
石が弾かれる方向から…俺は奴の動きを捕捉しようとした…だが…
俺の目の前で三日月が消えた！！

（そうだよな！！いつまでも自分の位置が把握できるものを見せるはずないよな！！）
普通は逃げたかと考えるだろうが…俺は周囲を警戒する…
周囲で風を切る音が聞こえる…奴は俺の周囲を走り回っているのが理解できた。
だが…それだけだ…
この暗闇で…俺に…奴を仕留める所か…あの凶刃から避けることが出来るのか？
無理だ…まさか…俺はこんな所で…こんな所で死ぬのか？
（死んだ…死んだ…連子が…死んだ…）
なんだ？急に紅玉に映像を見せ付けられたときと同じ感覚がした
（また、失ってしまった…守る者を失ってしまった…）
何を言っている？
（認めたくない…認めたくない…守るのが私の役目なのに…守るのが僕の役目なのに…）
俺を惑わす？いや…目的？…それに…守る？先輩を殺したのはこいつじゃ…
（守護するのが俺の役目なのに…我は失った…守れなかった…私たちは…また…主を守れなかった…）
一人称がおかしい…それに…意思が…ダブる…重なって聞こえる
（憎い…憎い…この身が…憎い…苦しい…苦しい…この身が苦しい…
誰が殺した…誰が殺した…私たちから…主を奪った…我らから存在意義を奪った…
許さない…許せない…殺す…殺す…僕たちの主を殺した存在を…）
俺は理解した…こいつは…紅玉と同じ力を持っている…人じゃない！！
俺の意識に…映像を送りつけている…そして、俺はその情報に惑わされている
完全に打つ手なし…どう頑張っても…意識を惑わされた状態で…敵う筈が…

「なにかあったのかい？」
急に…声が聞こえた
その瞬間…俺の意識が…急にクリアーになる
目の前に銀色の三日月が…奴との意識の接続が途切れたのか…
だが…さっきの声は…俺は片目だけを背後をみる…
「やぁ～まさか、こんな所で、君とスクープに出会えるなんてね」
桜庭祭が…こんな状況で…自然に…自然すぎて不気味に…笑っていた…

４４．暗い夜道で…

俺は…さっきとは違うこの不気味な空気に…体が硬直していた…
さっきまで…俺が…どうすることも出来なかったあの状況を…こいつ…どうやって…
解除した？
あれは、人には防げない…異質な力…認識や知覚を狂わせる…暗示や幻覚に似ているが、より恐ろしく、防ぎようが無い力の筈だった…
そんな力が支配していた状況で…この男は…俺の意識を目覚めさせた。
「くっ！！」
俺は体に力を籠め、左へ電灯の光が届かない闇に飛んだ…
電灯の下にいる桜庭と闇の中で光るナイフを見る
「なんで、逃げるんだい？」
俺が闇の中へ逃げたのを…不思議そうに桜庭は言うが、俺は何も言えなかった。
「ふむ…まあ良いか～それより…スクープを撮らなきゃ！！」
桜庭が…デジタルカメラを構えた…だが…この闇に…
「これは特別製！！闇に隠れた真実を…激写！激写！！激写！！！」
電灯の下で晒される…この桜庭の行動は…奇怪にしか思えなかった。
サイドステップ激写！バックステップ激写！！反復横飛びしながら激写！！！
これは…基地外としか思えない…だが…この奇怪な行動も…次の瞬間…終わった。
なぜなら…一瞬、揺らいだかと思った鈍く輝くナイフが投げられ…カメラに突き刺さっていたからだ。
「カッ…カメラが…」
ご自慢の特別製カメラを破壊され、唖然と闇の中を見るが…唯一見えていたナイフを投げつけたそれの気配はもう感じなかった…

それに…ナイフを投げる際…後ろへ飛ぶ音が聞こえたから…おそらく逃げたのだろう。
「特ダネスクープの代償がこれか～ああ、そう言えば、月影君そろそろ隠れてないで…出てこないか？」
特ダネが逃避した事から、俺に意識を戻した桜庭がそう言う…
逃げようと思ったが、相手に認識されているうえに…俺は気になることがあった。
「別に隠れていたわけじゃねぇ…危険だったから、体制を整えていただけだ」
だから、俺は闇の中から出てきた。
「それを一般的感覚で隠れたって言うと思うんだけどな～
まあ、危険な殺人鬼がいたんだし…普通の人なら同じ事をするさ～」
へぇ…普通の人ならね…じゃあ…隠れずに、激写しまくったアンタは何だ？
「ちっ…まあ、普通はそうだよな…だが、あんたも災難だったよなカメラを壊されて…特注品だったんだろ？写真も御釈迦で儲けも…」
とりあえず、俺はこれを知りたかった…カメラが壊れてもデーターはあるのかを…
「確かに…特注品のカメラがこれだよ…マジでへこむよ」
桜庭はそう言って、ナイフが突き刺さったカメラを見せる…
レンズが砕かれいる…だが、何より驚いた事は…
「なんか…このナイフ…普通の百円ショップで売っていそうなナイフじゃねぇか！！」
鈍く光っていた筈なのに…安っぽい感じがするただのナイフだった
こんなものが暗闇の中で光る？
「本当だね…ちょっと、暗闇に持って行って見ようか！！」
俺達は、電灯の下から移動したが…ナイフは鈍く光らなかった…
「これってどう言う事なんだ？」
「さあ…何か仕掛けでもあるのかな？」
カメラが壊れていたのは残念だったが…とりあえず…奴の武器は、

素早く代えの利くナイフだと解った…
「まあ、カメラが壊れても、命がある分だけ、儲けもんだな～
それにしても残念だったな…暗闇の中の人物も綺麗に撮れたんだろ？」
「うん、綺麗に撮れるんだけどさ…現像どうしよう…カメラ壊れちゃったし…」
おい…カメラ壊れたのに現像って…
「なに言ってんだ？カメラは壊れたんだろ？」
「うん、だけどさ…これって、映した写真のデーターは別箇で保存されるんだけどさ…
念のためのプロテクトでこのカメラじゃないと現像できないんだよ…
いや、現像できるんだけどさ…3日以上かかってね～」
俺は…唖然と…桜庭を見た…
「つまり…そのカメラには…さっきの奴の姿があるって事かよ…」
そして…俺は動揺を隠せない声でそう言った。

45．疑惑

「そうさ！！まさにスクープ！！」
俺の言葉に桜庭は嬉しそうに頷いた。
「しかも、この事件は、まだ世間に知られていないし…酔っ払いの戯言扱いされているから…怪奇事件が…僕の手で…大スクープに！！」
そう言う桜庭の姿に、先ほどのような、不気味さは無かった…
これは…どう言う事だろうか…演技か？
俺はそう考えたが…それなら何で…俺に正体をばらすような真似を…ばれないと思っているのか？
「その写真…出来たら俺にも見せてくれないか？」
それが演技だとしても、今の俺には何も出来ない…それなら、俺はこの手に乗ろうと思った。
相手が俺を騙して何をさせようとしているのか…ぎりぎりまで探ってやろう…
俺にはそれしか出来ない
「う～ん…まあ…気になるよね…よし解った！！君の頼みを聞いてあげよう！！
むしろ、君がここに居なかったら、この特ダネにも会えなかったかもしれないから…そんな怖い顔をしないでくれ～
一応、君とは協力関係にあるんだからさ～」
一応か…確かに協力関係だな…先輩に関する事件だが…この事件も先輩に関係があるように思える。
だから…信じても良いのだろうか？
いや、今は信じるしかない…さっきも考えたように…俺はいまは進むしかないんだ
「そうだな、すまないな…さっきの出来事で少し興奮していた」

「まったく…確かにそうだよね～僕も初めて事件を目の当たりにしたとき…足がこうガクガクして…怯えていたからね～」
桜庭はそう言って笑っているが…普通…こう言ったものに、何度も出会う記者は居るのか？
むしろ俺がそんな記者だったら…転職するな…こんな怪事件に何度も遭うなら…某探偵に災いを招く人間と思われるからな
「まあ、こう言う事件に何度も遭遇していたら、変なあだ名とか貰ったりするんだけどね～」
むっ…俺が考えていたことと同じ事を…
「でっ？そのあだ名は？」
「厄祭（ヤクサイ）…厄の祭のようだからさ…
はっはは…はぁ…親の名前を馬鹿にされるのは辛かったさ…一応…これでも人事異動で怪談関係の記者から、傷害事件なんかを追いかける記者になったんだけどね…」
「大変なんだな…まあ…現像できたら連絡をくれ…」
俺はそう言いながら、一応コンビニに寄って帰ろうと考えていて、へんな物を踏んだ…
「ぐっふ…」
それに変な音も聞こえ…俺は足元を見た…笹本だった
「月影君…帰るのは構わないけど…人を踏んでいるよ」
確か、笹本に恐怖を与えようと思って、この場所に居たんだったな…まあ…今日はこれ以上何かをする気にはなれなかった
「別にただの酔っ払いでしょう？変に絡まれる前に帰るぜ」
俺はそう言うと、コンビニへ走り出した。
（予定よりも時間がかかってしまった…
それにしても、あれはなんだ？紅玉と同じ力を持つということは…紅玉と同じ様な存在？）
そう考えても、その事を知っていそうな紅玉は、眠っている…
（紅玉に眠りが必要なのはびっくりだが…どうやったら起こせるんだ？）

俺は懐から紅玉を取り出し…試しに振ってみた。
縦縦右右左左下下…
まったく反応なし…なんだよ…どうして目覚めないんだ？
むしろ、どうやったら起きるんだ？
そんな事を考えているうちにコンビに到着した。
まあ、良いか…明日になれば、起きているかもしれない
俺は懐に紅玉を戻した。
とりあえず、俺はポテチをかごに入れる
（飲み物は何が良いか…一番無難なコーラを…）
手を伸ばそうとして…俺の眼に変なものが見えた
「ポイズンソーダ…どろりとしている上に…なんだこの変な物体は…」
俺は成分表を見た…梅と大きく記載されていた
「梅！？この奇妙な物体が…か？」
俺はその謎の飲み物？を戻そうと考えたが…かごの中に放り込んでしまった…
毒と言うな飲み物を…
その結果…俺はコンビニの前で吐いてしまった…

46．男とは！！

男とは…毒と解っていても…怖いものみたさに…毒に手を伸ばす…
それは、至高の毒…美味くて死ぬような毒なのか？
良薬口に苦し…と言うように…体に悪い美味いものなのか？
俺はそう考えてしまった…
そう考えながらも…俺が毒ごときに負けるはずが無いと…そう思い込んでいた…

だが…この毒は…俺の考える次元を超えていた…
俺は手に持っている飲みかけのポイズンソーダーを見た…
色は灰色…そう…蓋を開けるまでは灰色だった…

それは…蓋を開け…容器の外の空気が…中の物体に触れると…それは急激な変化を起こした！！

灰色から…紫に…色が変わったのだ…その後…あの物体（梅）が…
みるみる溶け出し…
ゴボッ…ゴボッ…まるで毒の沼の如く…液体？の底から気泡が…あふれ出てきたのだ…
「コイツは…ハードだぜ…」
俺は脂汗を流し…その液体？を口にした…
口触りは、どろりと、粘つく…だが、味は悪くは無い…むしろ…なぜか美味しいと感じられた…
見た目が毒で…意外とイケル！！俺は…一気に飲もうと容器の角度を高めた…
そして…俺は…ここから地獄を体験した…
どろり…と液体は…俺の口を通り…喉で引っかかる！！

あまりの粘度の為に…まだ口にある液体？とのどに引っかかっている液体？が俺の呼吸を止めたのだ！！

「！！！！！！！！！！！！！！」

死ぬ！！本気でそう思った…こりゃ死ぬ…毒だ…意識が諦めようとする…

だが…薄れ消えてしまうかもしれない…意識の中で…先輩の顔が見えた…

（馬鹿か！！関係ないところで死ぬな！！後輩！！てめぇ！！こんなつまらん死に方をしたら…あの世で後悔させるぞ！！そうだ！！死んできたことを後悔させてやる！！）

そう…力いっぱい…俺がそっちへ逝くのを…先輩が拒んでくれたせいかは知らないが…

俺の生存本能が…何とか、液体？を吐き出すのに成功した…

本気で死ぬかと思って…今にいたる…

「ゼェーハッ…ゼェーハッ…マジでポイズン…だ…ぜ…」

何でこんな地獄を…俺は容器をよく見ると注意書きがあった…

３５度以上傾けて飲まないでね！

俺は容器をゴミ箱へ投げ捨てた！！

「こんな注意書きを載せるくらいなら！！もっと粘度下げやがれ！！」

俺はそう怒鳴り、さっさと家に帰ろうと思ったが…

誰かに肩を掴まれた…なんだよ？と思いながら、後ろを見ると…

コンビニの店員だった…

「お客様…これは、どのようにいたしますか？」

店員はそう言いながら、店先を指差す…

「あ…」

そこは…汚れていた…とてつもなく汚れていた…

「これをどうぞ」
店員の手には、いつの間にかバケツとモップが握られており…
「私も手伝いますので、さっさと終わらせましょう♪」
俺は…この掃除のお誘いを…拒否する術は無かった…
だって…近所で近いコンビニは…此処しかないのだから…
俺は一時間かけて、店先を綺麗にした…
店員がいま掃除道具を片付けている…なんか、少し待ってくれと言われたんだけど…それよりも…俺の頭にある事は…
“二度と飲むものか！！ポイズンソーダー！！”だった…
そんな事を考えている内に…店員が…あの容器を二つ持ってやってきた…
「これで綺麗になりましたね～はい、ご褒美です！」
掃除が終わり店員から、ご褒美のジュースを…俺は…力無く受け取った…
ポイズンソーダ…を…
「うちの新製品～これまたイケル味でね～もう私これに嵌っちゃって…中毒性があるんじゃないかって～そう思うんだよ～いや～最高だね～」
更に嫌な情報をこの店員は言いやがった…俺は今度こそ力無く…コンビニから出て行った…
後日談だが、ポイズンソーダーは製造禁止になった…
なにやら、謎の物質が検出されたらしい…人体に影響はないが…軽く中毒を起こすらしい…そして、それが発表された時…その店員の姿はどこにも無かった…

47．つくづく…俺は不運だ

俺は…ポイズンソーダーの入った袋を冷蔵庫に無造作に放り込んだ
「あら？雅春遅かったわね？」
丁度そのとき…風呂上りの母さんに会ったが…俺は…ため息混じりに母さんに話しかけた。
「まぁ…ちょっと、野暮用があったんだけどさ…その前に…母さん…なんでバスローブを着ながら歩き回っているんだ？」
「えっ？似合わないかな？」
ピンクのバスローブを母さんはキョロキョロ見て…
「別に、似合っているから良いじゃない～ほら、くるりっと！！」
目の前で、母さんはくるっと回った！！裾がふんわりと浮く！！
「母さん！！ちょっと！！バスローブが！！変なの見えるから！！止めてくれ！！」
変に着崩れを起こして、俺は眼をそむけた…が…母さんは…なぜか顔を俯けながら…肩を震わせていた…
「変なのって…何よ…昔の服が見つかったらか着てみただけなのに…変なのって…」
やばい！！なんか…本気で怒らせたような…
「いや！！別に…変とかじゃなくって…ただ…恥ずかしいんだ！！ほら！！俺って年頃だろ？だからさ…つい、異性に…過剰反応しちゃって…」
俺はとことん母さんに言い訳をした！！なぜって…昨日の事で…母さんは直接打撃の方が怖いって理解したからさ！！臆病者？ふざけるな！！獅子の前でシマウマの肉を背負って寝ている気分なんだぞ！！そんな風に、俺自身にも言い訳をしていると、さっきまで、肩を震わせていた母さんが、笑い出した。
「雅春、なにを言っているの～マジで可笑しいわ」
なんだか解らないが、母さんの機嫌が直った…俺は安堵の息を…

「アンタ、小学生まで、私とお風呂に入っていたでしょう？」
俺は…その母の発言に…呆然と口をあけた…
あれ？何を言っているんですか～おっ…俺が小学生まで…母さんと風呂に入っていた記憶なんて…記憶なんて…
「そのときのアンタは、なぜか私の事を母さんと呼ばずにお姉ちゃんって呼んで甘えてきてたのよ？」
頭が痛くなってきた…思い出しちゃいけない…忘れろって…本能が言っている気が…
「あの時のアンタは…本当に私を母さんと思わなかったわね～お姉ちゃんといつか結婚するとか～もう、母さん育て方間違えたかなって…あら？雅春？顔色が悪いわよ？」
思い出してしまった…俺は…小学校の3年まで…母さんを姉さんって…勘違いしていた…
たしか…そう…近所のおばさんが…母親のいない俺を可哀想だと、面倒を見てくれている姉ちゃんとか…話されたことがあって…そのあと…親父に…
“姉ちゃんと結婚する～”とか言ったら…
“姉ちゃん？姉ちゃんって誰だい？”
“姉ちゃんは、姉ちゃんだよ！！春夏お姉ちゃん！！”
そのあと…俺は…なぜか宙を舞った記憶がある…いや…俺が宙を待っているのを見た記憶が…あれ？…なんで俺にそんな記憶が？
「まったく～年頃って～母さんの体なんだから～もうおばさんでしょ～」
いえ、見た目が…明らかに変化してません…むしろ…これ以上いくと…俺が兄に見られるかもしれない勢いです！！って言うか…高校生って言われてもおかしくない…
妖怪か？と思わせるぐらいです！サー！！
「うふっ…いま私の事褒めてくれたでしょ～生意気だな～コイツ～えい！！」
母さんが、俺の鼻を突く…そのとき…母さんの胸元が見え…目の前

が真っ暗になった…
それどころか…体に力が…入らない…何が…
「春夏！！大丈夫！！雅春に何もされなかった？」
あっ…もういいです…わかりました…親父ですね…このパターンですか…
そう言えば…姉ちゃんじゃないと証明された時も…変な書類をさんざん見せられたな…
「もちろん大丈夫よ～雅春が色気づく日が近いと考えていたところよ～
それに…私は雅春さん一筋なんだから…私は、貴方の腕の中だけでしか…もう安心出来ないのよ…ちゃんと責任取ってよね？」なんか…置き去りにされるような気がしてきた…
「もちろんだよ…春夏」ああ…二人の足音が遠ざかる…放置プレイですか…はい…別にいいです…痛くもないので…ただ…冬の台所の床は…冷たいで…んっ？
急に体に力がみなぎる…それに視界も…クリアに…俺は頭を触ると…針が刺さっていた…
確かこの位置は…体の機能と落とし体力を回復させるとか言うつぼの位置だっけ？
まったく…親父の奴…なんで…こんな気配りまでするんだろう…
「まあ…あとで、礼は言うとして…」
俺は…自分の服に付いている…生還の代償の臭いを…落とす為に風呂場に向かった…
ああ、体が軽い…早く風呂に入ってすっきりと…
俺は…風呂場のドアを開けた…中に誰が居るのかを確認せずに…
そして、俺は最終的に…最近御約束になりつつある…床で眠らされた…武力で…

48．目覚め

（むっ～よく寝たのじゃ～？なんじゃ？なんで雅春…風呂場で眠っているのじゃ？）
俺は…紅玉の声で…意識が覚醒し…
（ふむ…まあ…雅春…妾の声が…いかに可愛かろうと…裸を見せつけるとは…）
俺は…無言の悲鳴を上げて、身を隠した…
（なんじゃ…生娘のような悲鳴を上げるのじゃ？それにしても…人の雄のモノなど初めて見たが…グロテクスじゃな）
俺は朝から…精神的に…ダメージを瀕死状態まで受ける事になった…

（ふむ…妾が眠っている間に…その様な出来事があったじゃな）
（ああ、あれは絶対に、お前と同じ力を持つ者だ…）
俺は何とか、精神力を回復させ、昨日の事を紅玉に話した。
（それに…あれは…先輩を殺した奴と考えるよりは…先輩を護ろうとしてくれた存在と考えるべきかも悩んでいる）
あの時…確かに先輩を助けられなかったと悔やんでいた…
（むむむ…妾らの存在で…守るといえば…一人おったが…あのものを見つけるのは…妾にも不可能じゃ）
再会を司る紅玉にしては…随分と弱気な発言だった
（それは、自分の願望になるからでの意味か？）
まえに紅玉が言った事を思い出して聞いてみたが…
（それも、含まれるのじゃが、それだけじゃないのじゃ、雅春が再会を望んだとしても、その存在を知覚できぬ）
それは、俺が考えていた答えと違った…
（それって…どう言う事なんだ？再会できない存在って…再会を司る力で会えないって事なのか？）
（うむ、ちょっと待つのじゃ…上手く説明する…妾も最近思い出し

た事じゃから…）
最近思い出した？そう言えば、記憶がないとか話していたっけ？
こんな状況じゃなかったら、一緒に喜んでやりたかったが…俺は、
心の別の所で紅玉に謝ったが…
（別に良いのじゃ…その気持ちだけで妾は満足じゃぞ、雅春）
しっかり、聞こえていた…
（妾の仲間は、必ずしも妾と同じ姿ではないのじゃ…むしろ、妾の
ように石の姿をしているものの方が珍しいといっても良いのじゃ）
この姿の方が珍しい？
（それに、言っておくが、妾のこの姿も…本当の姿というわけじゃ
ないのじゃから、そこの所は勘違いしないで欲しいのじゃ！！）
本当の姿？
（妾も雅春のような人の姿があるのじゃ、じゃから、あまり変な物
をみせるでないぞ！！
今朝のあれは、現実逃避で妾は、恥ずかしく無かったわけではない
のじゃ！！）
くはっ！？今朝の傷が一気に広がった…
（あれは、見せたくて、見せたわけじゃない！！）
（当たり前じゃ！！もし見せたくて、見せたのであったなら…お主
はなんという変態さんなのじゃ！！）
変態ときたか…確かにそうだよな…って…！！話がずれている！！
（そうじゃな、話を戻すのじゃが…雅春が会ったと思う妾の仲間は
…守護を司るものじゃ）
守りを司るもの…待てよ…じゃあ…先輩は…守りを司るものでも、
護れ無かったって事か？それは絶対的な死なのか？必ず死ぬ定めな
のか？
いろんな感情が…俺の心に渦巻くが…俺はまだ全てを聞いていない…
（そして、それは…人の姿をして…人の心に潜んでおるのじゃ）
それは…どういう意味だ？
（このものは人の世に紛れ、人として生きておる…じゃが、人の世

に異質な力は目立ってしまう…じゃから、このものは…もう一人の自分を創り…普段はただの人間であるそのものに活動を任せておる…じゃから、再会しようにも…そのものを判断できぬ。
呼び寄せたとしても、それをそのものだと判断できないのじゃ…それに、勘違いじゃったら良いのじゃが…もしかしたら…狂っておるかもしれん）
狂っている？
（妾たちの力は、無から生み出されるものではなく、何かを代償にしているのじゃ…
妾もその事を昨日まで…忘れていた…もしかしたら、妾の代償は記憶なのかもしれん、
再会する為の代償が、妾の場合記憶だとすると、ほかの狂って壊れた妾の仲間の代償は、治療を司る者はその分の死を…理由なき戦いを阻止してきた存在も、狂って死をもたらし続けた…そう考えると…守護を司るものの場合は…守護者の命かもしれない…）
…待て…つまり…あれか！？自分で殺して…自分で仇を探す…そんな事をしているのか！？
（予想の一つじゃ…そうでなければ…守護の力よりも、強い存在が介入してるとしか考えきれんのじゃ…）
つまり…あの存在も…容疑者にまた戻ってしまった…しかも…あの存在は…普通の人に紛れている…探すのは困難だ…俺は力無く笑うしかなかった

49．急な知らせ

昨夜の事があって、俺は冥乃ちゃんと顔が合わせる事が出来ずに、学校に行った。
学校では、教師たちが慌てて走り回っていたが、俺には何の関係も無い、俺は教室に着くと、そのまま席についた。
「雅、今日は早いな？」
いつものように、舞華が俺に話しかけてきた。
「いや、ちょっとな…それにしても、なんか先生たち…忙しそうだな」
とりあえず、俺には無関係だが、情報は得ようと思って、俺は舞華に尋ねた。
「ああ、笹本が闇討ちされたと騒いでいるんだ」
俺は頬を引き攣らせた。
「どんな経緯なんだ？」
あんな、体験をして騒ぎ立てるなんて…酒飲んでいた奴が…
「詳しくは知らないが…生徒が街中をうろついていないか見回りをしていた帰りに、ナイフで殺されそうになったと…」
見回り…ね…居酒屋の帰りのくせに、よくホラが言えるな
「よく、助かったな、俺はあの先生嫌いだから、刺されて入院してくれて良かったんだがな」
俺は本気で思った事を口にしたが…
「雅！！仮にも私たちの先生だぞ！！刹那にも言ったが、不謹慎だ！」
舞華は生真面目で本気で怒ったが、朽木姉…やはり、お前も同じ事を言ったのかと考えると…なぜか嬉しく思えた…なぜだ？
「わりぃ、わりぃ、昨日朽木姉を馬鹿にしていた先生だからさ…ちょっとムカついてな」

俺はさっきまでの感情を無視し、舞華との会話に集中しようとしたが…
「そうか…刹那を馬鹿にした先生だからか…」
なぜか、舞華の声に暗さを感じた…はぁ…俺はため息を吐くと…周囲を警戒する…
クラスメイトが…こぞって、聞き耳をたてていた…
俺はそんなクラスメイトを睨みつけると…クラスメイトは顔を背けた…
（まったく、なんで、こいつらは、いつも聞き耳立ててやがるんだ？）
まるでＴＶを見ている感覚で見てくるクラスメイトに俺はいらだったが…いまは、そんな事より…
「笹本はどうやって助かったって？」
この事を聞きたかった…のだが…なぜか、周囲からため息が聞こえた
「むっ…そうだな…笹本先生は、持ち前の格闘術とかで迎撃したという話だ」
持ち前の格闘術ね…俺に踏まれ気絶していただけのくせによ…
「でっ…犯人に見当はつくのか？」
「いや、まったく…ただ…何名かの生徒が呼び出しをくらうらしい」
自分を恨んでいる人物を集めるという事か…
「しかし、よくそんな事を知っているな～やはり優等生だからか？」
学校の成績で上位にいるおかげで、そんな情報が手に入るなら…俺も頑張ってみようかと思ったが…
「いや、刹那もその容疑者に入っているから、本人から直接聞いた」
俺の表情が凍りついた…
「つまり…なんだ…そんな怖い顔をするな…私も刹那が犯人だとは思ってはいない
むしろ、無実だと私は証明できる…昨日も刹那の一緒に訓練していたのだからな」
舞華が俺を宥めるようにそう言ってくれているが…俺の動揺は収ま

らなかった…
（落ち着け…落ち着くんだ…昨日のような事があって…急に動き出すような愚か者はいないはず…無実が証明されれば…大丈夫だ）
そう自分に言い聞かせたが…不意に昨日の紅玉の…あの言葉を思い出した…
（あやつ…あの娘の家族も狙っておった…）
それは…舞華も狙われていると言う事だった…つまり…もし、舞華が無実を証明しようとしても…舞華が共犯と訴えれば…舞華はどうなる？真実なんていくらでも改ざん出来る…
悪い方へ悪い方へと、俺の考えは流れていく…何かしなくて…
「雅！！いい加減に、返事をしろ！！」
その声と共に、誰かが俺の頭の両側を掴むと…俺の前頭部に強烈な一撃が…炸裂した！！
「ぎゃぁ！！！」
あまりの痛さに、俺の体が反射的に動く…急な攻撃に体が反応したのだが…
「うお！！！！！！！！！！！！！！」
なぜか、周囲から熱狂が！？
俺は…衝撃で眩んだ視界がはっきりした瞬間…さっきとは違う意味で…表情が固まった…
俺の目の前に…顔を赤らめた…舞華が見えたからだ…
「あっ…雅…ちょっと…恥ずかしいのだが…皆が見ている前で…」
舞華が…眼をそむける様に、俺にそう言ってくる…
どうやら、俺は…いま…舞華を押し倒しているようだった…
反射的に攻撃に対応した結果…１０センチ先に舞華の顔が…見えるように…
俺は、すぐに退けようと思ったが…やはり、この世界は御約束の世界だろうか…
「なにしてんだぁよ！！！！！！二人して！！」
朽木姉が…この教室に入ってきていた…

そして…朽木姉は…吼えながら、走りこんできて…俺を蹴り飛ばした…背後から…
その次の瞬間…俺の唇に…柔らかい感触が…
俺は眼を見開いた…
俺の唇が舞華の唇に当たってしまっていた…
「！！！！！！！！！！」
舞華はさっきよりも顔を真っ赤にして、急に力無く倒れこんでしまい…
「なっ…なっ…なにキスしてんだ！！！！！！！！馬鹿！！！！」
俺を蹴り飛ばした張本人は…また怒鳴り声を上げると…
俺が何か言うよりも先に…走り去ってしまった…
そして…周囲から…三角関係、修羅場…の二つの単語が…行き交った…

50．悲しい心

「なんだよ！！あいつ！！…ボクが疑われているから、慰めてもらおうと思っていたのに…」
ボクは今朝、学校に着くなり、あの嫌味な笹本に昨晩自分を襲った人物の容疑者として、放課後に呼び出しをくらった…舞華が、ボクの事を庇って昨日一緒に訓練していた事を言ってくれたが、あの野郎は話を聞かずに、放課後にまた指導室に行くはめになった…
そう、また…ボクだけ…
そんなボクの八つ当たりを受けてもらおうとあいつのいる教室にボクは、怒りを溜めながら歩いていくと…
「雅！！いい加減に、返事をしろ！！」
そんな声が廊下まで聞こえたから、ボクは急いで教室まで走ると…二人が床で抱き合っていた…ボクがこんなにも苦しんでいるのに…二人は仲が良さそうにしているのが…むかついた…
あいつもボクより…舞華の方が良いのか？昨日…ボクはボク、舞華は舞華と言っていた
だから、ボクはボクで良いと考えたけど…
それは、仮に…あいつが舞華のことを好きだとすると…ボクは変わりにならないと言っているんじゃ…
そう考えると、ボクは…なんだか苦しくなって…アイツを蹴り飛ばすことにした！！
「なにしてんだぁよ！！！！！！二人して！！」
ボクは体中に気合を籠め…あいつを蹴った…だけど、その次の瞬間…ボクは自分の眼を疑った…
ボクの目の前で…二人がキスをしていた…
「なっ…なっ…なにキスしてんだ！！！！！！！！馬鹿！！！」
二人の仲が…ここまで…進んでいたなんて…やっぱり…ボクよりも

…舞華が好きだったんだ…ボクは…二人を怒鳴りつけると…あいつの教室から逃げ出した…

「ボクを慰めてもらおうと思ったのに…また…頭を撫でてもらえれば、元気になれると思ったのに…」

その日の授業は上の空だった…なにを聞いても…心に響かない…

授業が終われば…舞華に見つからないように…逃げた…

舞華の事だ、あいつとはなんでもない…事故だというだろう…だけど…

あいつも…ボクをなぜか探していたが…きっと、言い訳をするつもりなんだろう…

そんな慰めなんて…いらない…

放課後までボクは逃げ続けた…学校から逃げ出す選択肢もあったが、笹本に呼び出されていたから…ボクは…学校中を逃げ隠れした…弁当は、教室の前に置いて行ったから、大丈夫だろうけど…重箱だから、ボクはお昼を食べられなかった…

明日から…ボクの分は別にしよう…

今日のような二人を見た後に…ボクも一緒に居られるわけがない…

そんな事を考えていたせいか…ボクは誰かに腕を掴まれ…悲鳴を上げそうになった！！

「！！！」だけど…声を出せば…あいつが走ってくる…そんな気がして…ボクは声を押し殺した…

なんとか、自分を落ち着かせて、ボクの腕を掴んだ相手を見ると…

それは笹本だった…

「おい、放課後に来いって言っただろうが！！もう、お前とこいつら以外の容疑は晴れたからな」

最悪だ…舞華やあいつが、追いかけてくるから、指導室行けば捕ま

ると思って、笹本の呼び出しを無視していた…
「ごめんなさい…ちょっとお腹の調子が悪くて…」
とりあえず、言い訳をしていて、笹本の後ろに3人くらいの女子生徒がいる事に気づいた。
そう言えばさっき、ボクとこいつら以外の容疑が晴れたって言っていたから…
なんだか怯えている様子を見ると、確かに疑われるとボクは思った。
（まあ、ボクは犯人じゃないから、怯えなくても良いけど…サボったから疑われているかも…というか、疑われている…ああ…このまま、こいつらと指導室に行って…その前で待ち伏せしている二人に捕まるんだろうな…）ボクはそう考えていた
「まあいい…おい、そこの準備室で事情を聞くから入れ」
「えっ？指導室じゃないの？」
「あっ…ああ、指導室で話を聞いていたら、馬鹿が暴れやがって…準備室に話を聞く場所を代えたんだよ、何か問題でもあるのか？」
「いや、なんでかな～と思っただけで…」
まあ、ボクは犯人じゃないからすぐに終わるし、これなら、待ち伏せしている二人から逃げられるから、良いと思っていた
「じゃあ、ちゃっちゃと終わらせようか～」
ボクは笹本の管理する準備室へと足を踏み入れた…

51．みつからない

「あのチビ！！」俺は廊下で叫んだ
貴重な休み時間にわざわざ何度も出向いているのに…あのチビは俺から逃げやがった…
周囲の奴らが言いやがるに、今朝のあの一件が原因らしい…
あのチビ！！自分で蹴りを入れて起こった事件を…それにしても、なんで…避けられるんだ？
確かに、舞華との事故とはいえキスを目の当たりにして、照れくさいのだろうか？
まあ、その事を今朝の一件が原因だと教えてくれた奴に言ったら、なぜか深いため息を吐かれた。
「むぅ…雅…すまぬ…逃げられてしまった…」
舞華がいつの間にか、戻ってきていた。
「ちっ…まさか、舞華が振り切られるなんて…あのチビ…本気で逃げてやがるな」
前の休み時間で窓から逃げられた事を学習し二手に分かれたんだが…それでも無駄だったか…
「雅…別に学校で探さなくても、家に帰ったら、私が弁解をしておくんだが…」
舞華がそう言うが…いつもと違って、舞華は俺の顔を見ようとはしていない
まあ…事故とはいえ、キスをしてしまったんだ…気恥ずかしいんだろうな
「いや、別にそれだけじゃなくってな…これは…」
俺は言葉を止めた…笹本が朽木姉を狙っている事を話せば、きっと舞華は、いまから笹本を壊しに行くだろう…
良識的に見られるが、実のところ…すこし前までの舞華は一匹狼だ

った。
他の人と関わる事を意図的に避けていた。俺がリハビリで道場に通っていた時に朽木の親父さんに勧められて、舞華と組み手をしなかったら、きっと今のような関係にはならなかっただろう…
「これは…なんだ？」
ちょっと不自然なところで話を止めていたな
「これは、意地だな」
「意地？」
「ああ、あのチビ…俺から逃げたんだぜ！！このまま逃げ切られたら…次から何かあったら、あのチビ…絶対また逃げやがる！！」
「次って…雅！！また何かを起こす気でいるのか！？」
ちょっと失言だったな…一応優等生に対して、騒ぎを起こす前提で話すのは駄目だったな
「いや、それだけじゃなくって…俺達から逃げられたという自信から、逃げ癖がついたら困るだろ？」
俺がそう言うと、舞華は顎に手をあて考えてます動作を取ると…
「一理あるな…幸い、次は昼休みだ…流石に刹那でも顔を出すだろう」
そう言って、俺もその意見に賛同した。

だが、次の時間…廊下に置かれていた重箱に…俺達は…歯を喰いしばった…
「そこまでして、俺達を避けるのかよ」
「二人だけで食事を取ると思っているのか…刹那の馬鹿が…」
俺達は弁当をロッカーに入れると…俺達は各個で朽木姉を探しに行った…

「チビめ！！どこに行った！！」
早く…あのチビを見つけて…注意しろって言わなきゃいけないのに

…手遅れになる前に手をうたなきゃいけないのに！！あのチビ！！
（雅春…妾の力を使うか？）
午前中、何も言わなかった紅玉が、俺に話しかけてきた
（再会の力か？別に今は良いぜ…この学校にいる事はわかっている、大丈夫だ。
だけど、本気で危なくなったら手を貸してくれ）
（うむ…そう言えば、雅春…妾は午前中…懐かしい気配を感じたのじゃ）
（懐かしい気配？）
（妾の同属の気配じゃ…意識を伝達させながら、その場所を見てきたのじゃが…既に場所を変えたあとじゃった…）
意識の伝達…つまり、自分の意識を生き物を経由して情報を得たのか…
（まあ、なんだ…紅玉が気配を感じたとしたら…その存在は確証されたわけだ…）
（そうじゃな…あと、あの娘は屋上に隠れておるの）
！？
（なに、力を使ったわけではないのじゃ、意識を察知しただけじゃから、自力で再会するのじゃな）
（ああ、ありがとうな）
（うむ、妾たちは契約しておるのじゃからな～お主が本当に会いたい者と再会できるまでじゃが、よろしく頼むのじゃ）
なんだか、少し引っかかる言い方だったが…俺は頷いた
紅玉が言ったように、朽木姉は屋上にいたが…結局逃げられた…

放課後
「あの馬鹿…腹が減ってるくせに…無理しやがって…」
「まったくだ…私もお腹が減っているが…皆で食わんと美味しくない」
俺達はぶつくさ言いながら、指導室の前に立っていた

紅玉は、また授業中に外を見てくると言って黙り込んでいる…
まあ、今回はちゃんと名前を呼べば気づくと言っているから、言いと思うが…
「おかしいな…誰も来ないな？」
「ああ、放課後に指導室であると聞いたんだが…容疑者どころか…笹本先生も来ていないな？」
嫌な予感がした…
「ちょっと、この辺を探してくる」
紅玉にまた、周囲の状況を見てもらおうと思い、俺はそう言って舞華から離れた。

俺は男子トイレに入ると
「紅玉…聞こえるか？紅玉…」
ポケットから取り出した紅玉に話しかける…
反応は無い…
声に出して呼べば来るといっていたのに…ああ…肝心な時に！！
（すまぬ、少し遅くなったのじゃ）
名前を呼んで３０秒ほどでやっと反応が返ってきた。
「紅玉！！朽木姉が…見つからない…また昼休みと同じ風に探してくれないか？」
（ふむ…ちょっと待っておれ…）
ほんの少しの時間だったが…俺は不安だった。
俺は、あまり本とか読むほうではないが、たまに読む本で…主人公たちが喧嘩をしたときに、大事件が起きてしまう…そんな予感がした…
（無事だといってくれ…見つかったと…紅玉…）
俺は心の中で祈るが…俺の現実は…作り物の世界と同じだった…
（おかしいぞ…雅春！！この町に朽木姉の意識が無いのじゃ！！気を失っていて見つからないのじゃ！！）

52．囚われ

「うっ…う…ん？」
あれ？いつの間にボクは寝たんだろう？
あれ…体に力が入らない…それに意識が…混濁しているっていうのかな？
自分の状況が上手く解らなかった…
えっ…と…こんなときは…目に映るものを順々に理解していけば良いんだ

ボクは周囲の状況を確認した
「外…真っ暗…ボク…椅子に拘束…目の前にカメラ…ハンディカム？」
訳が解らなかった…なんでボクが椅子に拘束されているんだ？
確か…笹本の授業の準備室に入った筈なんだけど…その後の記憶がない…
とりあえず…いまボクがすべき事は…
「放せ！！この野郎！！ボクを解放しろ！！」
とりあえず、怒鳴っていまのこの理不尽な怒りを発散する事だった。
ボクは大声で怒鳴りながら、ボクを拘束している物を確認する…
縄跳びの紐だった…テープ類じゃないから、このまま怒鳴りながら、暴れれば縄は緩むだろう…縄が緩んだ後は、ボクを拘束した奴がやって来てくるまえに逃げれば良い！！
戦う事を考えたら、ボクの方が不利だからだ…力が無いし…技の効力は後日発揮…
即効性の力が無いからだ…だから、早く縄を解きボクは逃げるんだ！！

だけど…暴れて縄を解くには、一つ問題があった…ボクが縛り付け

られている椅子は…
ボクの足が地面に届かないタイプの椅子だった…
こんな椅子で暴れたら…最悪、転んでしまう！！
この事に気づいたのは、もちろん、転びそうになってからだけど…
何とか転ぶ前に気づいてよかった…ボクはこの作戦が駄目だとわかり、怒鳴るのを止めた。
「お前のような餓鬼なら、転ぶと思ったんだがな～」
その声と共に誰かがこの部屋に入ってきた…
生憎顔を見ようにも、正面は窓側に向けられているせいで、まったく顔が見えない
だけど…聞き覚えがある…えっと…誰だったかな？
「ふん！！ボクが子供じゃなかったから倒れなかったんだろ！！」
なんでこんな状況になったのか解らないけど…下手な態度が自分を苦しめると理解できる。
「はっ、暴れて、倒れそうになって理解するなんて、やっぱ餓鬼だろ？
お前は妹とは違って、馬鹿だからよ」
こんな状況でも…舞華と比較されるの…ボクは…顔を俯けてしまう…
また、ボクは馬鹿にされて…ああ、思い出した
「五月蝿いぞ！！この笹本が！！」
そうだよ！！よく考えれば、ボクを拘束した人物の可能性は、笹本じゃないか！！
この体に力が入らないのも…スタンガンとかで…
「ああ、そうだよ～刹那ちゃんよ！！」
声質が更に下品になって、ボクは思考を一時中断した。
「まったくよ～すぐ気づく筈なんだが～やっぱ子供は、わからないんだよな～」
背後から近づく気配がボクの心に恐怖を与えた…
そして、椅子の背中に…手を置かれる感覚が気持ち悪い…
撫で回すように肩を触る…脂ぎった手が…ボクの肩を触れていると

思うだけで…叫びたかった。
ボクの両肩が掴まれ、勢いよく椅子が反転させられ…眼前に笹本の顔があった…
「まったく、生意気な餓鬼だよな～先生の事を呼び捨てにしてさ～」
臭い息を吐きながら笹本がボクに話しかける…
心が…悲鳴を上げていた…助けてと…泣けと…怖くて…
怯えて泣き叫べば…いくらかマシと…だけど…ボクは…
「うるさい！！臭い息を吐きかけるな！！キモイ！」
そんな弱気な心に素直に従うような肝じゃなかった！！
そして…ボクのこの発言に…笹本は顔を真っ赤にさせた…怒りで…
次の瞬間…ボクの頭に強い衝撃が走ったと思うと…体が…床に叩きつけられた…
ああ、いま…ボクは殴られ…その衝撃で椅子が倒れた…殴られたボクは…その事を理解した。だけど…そんなボクに…笹本が蹴りをいれ始めた…
「うるせ！！餓鬼！！何がキモイだ！！五月蝿いぞ！！餓鬼！！チビ！！出来損ないの片割れが！！」
何度も…笹本がボクを蹴る…顔以外の全身を蹴る…蹴る…
「泣けよ！！叫べよ！！お前は誰からも助けられないんだよ！！」
ボクは蹴られながら…あいつの事を思い出した…
あいつの事を気になり始めた時のあれも…こんな風に…悔しかったっけ…
もう少し素直だったら…あいつとボクは…どうなったんだろう…
「お前を好きになる奴なんて、アブノーマルな奴くらいだよ！！…ハァハァ…」
笹本の足が止まった…
「ふん…自分の立場がわかったか！！餓鬼！！」
荒い鼻息を抑えながら、最後にボクを仰向けにするように椅子を蹴り上げた。
ああ…なんでだろう…とても怖いのに…あいつの顔が浮かぶだけで

…恐怖を感じない…
あいつがボクを助けてくれる…そう信じているから…だから…ボクは…言い返した！！
「はっ！！アブノーマルしか好きにならない？じゃあ、ボクをこんな風に拘束しているお前の方がアブノーマルにしか愛されないだろ？むしろ、ボクの方がお前よりも好かれている！！拘束した奴にしか、抵抗しない奴にしか威張れない…お前は変態にしか好かれないんだろ！！」
ボクはそう言うと、また息を荒くして、笹本がボクを殴ると思って身構えるが…
「ふっ…ふふ…はっは…はははははははは！！！！」
笹本が、狂ったように笑い出した
「好かれない？俺様が好かれないってか？マジで言ってんのか？」
そして、ボクを嘲る様な口調で…ボクに話しかける…
「ああ、そうだよ！！ボクにはボクを好きだと言ってくれて、可愛いと褒めてくれる人がいるよ！！」
昨日…あいつがボクをボクのままで可愛いって言ってくれた。
その事がボクに力を与えてくれて…ボクの舞華に対するコンプレックスを和らげてくれる。
だから、ボクは自信を持ってこう言えた！！
だけど…また、笹本がボクを嘲るように笑い出し…
「お前、馬鹿か？それはお前のためじゃなく、お前に気に入られて、お前の妹と仲良くなろうとしたんだろ？」
「えっ…」
ボクの思考が止まる…
そんなの嘘だと考えたいのに…そんな考えすらも動きを止めた…
そして、ただ…ボクの思考に映る光景は…今朝の二人…
ボクの双子の妹とボクの事を可愛いと言ってくれた奴の…キスをしている姿…
「へっ…その様子じゃ～薄々感じていたんだろ？まあ、どうせ月影

の餓鬼の事好きだったんだろ？だけど、どうせあの餓鬼は、お前よりも妹の方が好きなんだろ？
みんな言っていたぜ～お前は邪魔虫だとよ」
急に…ボクは心の支えを失った…怖くなった…
今のこの瞬間も…あいつは舞華と一緒に居るのかもしれない…
ボクのことを気にせずに、舞華と二人っきりで居るのかもしれない…
互いに好きだと言い合って…頭を撫でたり…頬を撫でられたり…キスをしたりしているのかもしれない…
その二人にとって…ボクは…邪魔で…鬱陶しかったかもしれない…
でも…あの二人は…いい奴だから…そんな事を言わずに、ボクに付き合ってくれたんだろう…
「ふっ…自分が好かれていると思って、調子に乗っているからだ！！この餓鬼が！！
ちなみに、俺様には、俺様を好きだと言ってくれる奴がいるぜ！！
おい！！入って来いよ！！この餓鬼に現実を見せてやる」
笹本がそう言うと…あのとき…笹本が…連れていた同級生の女子が入ってきた…淫らな姿で…
「お前が眼を覚ますまで、仲良くしていたんだ
こいつらは、俺を愛しているんだぜ～初めは照れて、恥ずかしがっていたけどよ～
いまじゃ～素直になって俺の事を好きだと言ってくれるんだぜ～」
笹本がゆっくりと僕に近づく…
気持ち悪い…何を言っているんだ？こいつは…ボクの目には、こいつを好きだという人間の目は…諦め絶望した人間にしか見えなかった…諦め全てを受け入れるしかない人形のような人間…自分の不幸に立ち向かうことも止め…そして、その人間は…次の犠牲者が増える事を…喜んでいる…
自分と同じ仲間が増える事を…そう…ボクがこの後にどうなるかを…語っているようだった…そして、笹本の手がボクの襟首を掴むと…
「そして、お前も俺を好きになるんだよ！！」

ボクの上着は引き千切られた…あいつにも見せたことの無い姿を…
ボクは笹本に見られた…
「やめろ！！ボクに触るな！！」
嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！こんな奴に…あいつじゃない奴に…
ボクは…ボクは…誰か…誰か…助けて…助けて！！
「初めは誰だってそう言うんだ…だけど…すぐに好きになるさ～
それにしても、胸は無いと思ってたけど、まだブラも着けてないなんてさ～
それとも、ノーブラにして、誘っていたのか？」
気持ち悪い…誰か…怖い…嫌だ…
「嫌…止めて…ボクに触らないで！！」
暴れようとするが…椅子に縛られた手足は動かない…
「柔らけ～子供のような肌だ～」
笹本が僕の体を撫でる…胸を…腹を…首を…嫌だ…嫌だ…ボクの初めてが…どんどんこいつに奪われていく…ボクの初めてが失っていく…
「美味そうな唇だ…」奴の顔が荒い鼻息と共に近づいてくる…
嫌だ…なんでボクだけ…なんでボクだけがこんな目に…
だが、寸前で笹本がボクから顔を遠ざけた…そして…
「ああ、安心しろよ…お前だけじゃなく、お前が素直になれば…お前の妹も仲間に入れてやる…あの餓鬼のお下がりだろうけどよ…まあ、すぐに俺のほうが好きになる。
それに、抜け駆けした妹を苦しめることが出来るんだぜ～俺に感謝しろ」
その発言に…ボクは……キレタ…
「ふざけるな…舞華に…手を出すな！！」
ボクは唯一動かせる頭を使い…笹本の顔面に頭突きを喰らわせた
「舞華は…抜け駆けとか出来る子じゃない！！きっと、なにかあって…それでボクには言えなかったんだ…それに…舞華を選んだのは、あいつの…意思だ…

あいつに選ばれなかったからと言って…ボクが舞華を裏切れば…あいつは本気でボクを嫌いになる…それに…ボクが…諦めなかったら…ボクにもまだチャンスはあるんだ！！
だから…ここで諦めない…何があろうと…なにを奪われようとも…ボクはあいつの事が…好きだ！！」
ボクは…息を切らせながら…そう叫んだ…
「ざけんな…この糞餓鬼…俺の口に頭突きをかましたと思えば…諦めない？
なら良いぜ…本気で奪ってやるよ！！それで、おまえの好きな月影にも、そこのカメラで映したものを見せてやるよ！！別の男に犯された餓鬼を好きになる奴はいねぇよ！！」
笹本がボクに近づき、片手で首を絞めながら…ボクのスカートに手を伸ばす…
さっき…あんな事を言ったのに…諦めないと言ったのに…僕の心は…また砕けそうになる…スカートが…破られる…嫌だ…嫌だ…助けて…助けて…
「助けて！！！雅春！！！」
「はっ～来るわけねぇ～だろ～現実は…甘く…なっ…」
なんでだろう…意識が朦朧としてきた…さっきから…笹本に…首を絞められていたから…さっきの大声で…空気が…足りないんだ…でも…手足が…自由になった…感じがした…
「朽木姉！！」
あいつが…ボクの事を呼んでくれる声が聞こえ…これが幻聴でも返事をしたかった
「まて…こから…やめ…けて…」
でも…薄れていく意識の中で…なんだか…あいつが…雅春が…ボクを助けてくれた…そんな気がした…

53．得るという事は失う事

「おい！！この町に居ないってどう言う事だ！！」
（落ち着くのじゃ…意識が無いだけで、まだ近くにいるかもしれないが…この町に娘の意識が無いのじゃ…）
「ちっ…ちくしょ！！」
俺は紅玉をポケットに入れると舞華のところへ走り出す…
指導室の前まで行くと、舞華が俺に話しかけてきた
「雅！！大変だ！！笹本先生は…容疑者の取調べを取りやめていたらしい」
「なに！？」
「他の先生に止められたようだ…だから…刹那はもう帰っているのかもしれない…」
中止で帰った…つまり…いま、あのチビはそれで違う街まで逃げたんだろうか？
「私は、もうしばらくこの辺を探してみる、雅、お前は帰っていて構わない
見つけたらすぐに連絡をする…とりあえず、刹那の教室へ行ってみる。鞄があるかもしれない」
舞華はそう言うと…走って教室へ向かった。
（中止を連絡され…隣町まで逃げたと雅春は考えておったな？）
舞華が完全に見えなくなったところで、紅玉が話しかけてきた。
（ああ、あのチビならやりそうな感じがするが…嫌な予感がする…）
もし、この嫌な予感が的中したら…俺は…
（雅春…再会の力を使わぬか？）
俺は…懐から紅玉を取り出した
（…だが…それは…出来るのか？朽木姉の居場所を特定できなかったのに…）

俺の不安とは裏腹に、紅玉は、自信たっぷりに俺に言った
（あれは、妾たちの特有の能力じゃ、再会の力に比べれば月とすっぽん、大人と赤子の違いじゃ）
藁を掴む思いの俺に…紅玉の言葉は…嬉しかった
（わかった！！紅玉…頼むぜ！！）
だから…俺は紅玉に頼んだ…あの昼休みの…紅玉の隠し事に気づかずに…

俺の周囲に紅い光が現われる…
それは、小さな光だった…無数の小さな光…
だけど、その光は他の光と触れ合うごとにその光は大きさを変えた
（雅春…あの娘のことを頭に思い浮かべるのじゃ！！強く…強くじゃ！！）
俺は紅玉に言われるままに、朽木姉を強くイメージする…
（そうじゃ…もっとじゃ…もっと…）
朽木姉…無事でいろ…朽木姉…俺は紅く輝く紅玉を両手で包み込み…祈るように頭を俯けた…
（雅春…そのまま集中して聞くのじゃ）
紅玉が…さっきとは違う…悲しそうな意思を出す…
（まえに、代償は無いと言っておったな？あれは、嘘じゃ…代償は妾が払うのじゃ）
待て…紅玉…何を言っているんだ？
（妾が力を使えば、妾の記憶が代償で失われる…じゃから、妾はあの人の姿を妾自身を忘れた…）
待てよ…記憶を失う？それは、紅玉がとても大切な人の記憶を失うのか
光が…一つになり…俺の視界が紅い光に覆われる…
（うむ、もう安定した…雅春…安心せい…妾が妾であることには変わりは無いのじゃ
それに、この程度の消費量なら…2日程度の記憶じゃ…お主から貰

った名前を忘れるくらいじゃ…）
ふざけるな！！なんで記憶を失うのを解った上で…俺に願いを使わせるように…
（妾は、紅玉と言う名前を貰った妾は、あの人との再会よりも、御主の事を大切だと思ったのじゃ…そんな事はあっては成らぬのに…大丈夫じゃ…記憶は失っても、妾は雅春に力を貸すのじゃ…）
光が…収まりだす…
（もう、妾とはお別れじゃな～
雅春…妾は御主の事を…あの人の次に好きじゃと思えたのじゃ～）
「助けて！！！雅春！！！」朽木姉が…俺に助けを求める声が聞こえ…
そして…光が消えた…
「はっ～来るわけねぇ～だろ～現実は…甘く…なっ…」
光が消えたそこは…さっきまでいた廊下ではなかった…
そして…俺の足元では…服を破られ…笹本に首を絞められた…朽木姉が…いた…
「なっ…どこから…ひぃ！？」
俺は…笹本の顔面に蹴りをいれ、朽木姉を拘束していた紐を引き千切る
「朽木姉！！」
俺はそう呼びかけるが…返事は無い…だが、呼吸はある…俺は…制服の上着を脱ぐと朽木姉に被せた…抵抗した時に出来たのだろうか…でこから血が流れていた…そして、床で腰を抜かしている笹本を見た…俺が蹴る以前に頭突きでも喰らったんだ…
「お前…覚悟は出来ているか？」
俺は…笹本を破壊する為に歩き出した…昨日…壊しておくべきだった
「ひぃ！！止めてくれ！！助けて！！」
近づく俺に怯え笹本は…教室の入り口にいる…女を盾にして
「来るな！！止めろ！！俺に手を出せば、退学だぞ！！いいのか！！」

そんな詰まらんセリフを吐く…盾にされた女は怯えながら俺を見ている
「はっ～退学ですか～やれるもんならやってみろよ！！」
俺は容赦なく拳を前へ突き出す！！
「ひゃぁ！！」
笹本は女の影に隠れるが…俺は…容赦なく女ごと笹本を吹き飛ばした！！
「けっ…そんな勝手に絶望して、抗うことを止めて、他の犠牲者を増やす奴を助けると思うのか？馬鹿だな、俺は正義の味方じゃないんだぜ？」
俺は容赦なく拳を繰り出す…言葉ではこう言っているが…盾にされている女には威力を落とし…隙間から見えた笹本の体には…容赦なく拳を振るった！！
だが…やはり、本気で拳を振るえず、決定打を与えることが出来ない…
そして…
「ちくしょ！！この！！この！！」
笹本は…盾にした女を俺に突き飛ばしてきた！！しかも…下手に脅しをかけたせいで…女どもは俺に纏わり付いて来やがった！！
「助けて！！助けて！！」
「放しやがれ！！」
俺は何とか女を弾き飛ばしたが…その間に…笹本は…朽木姉を人質に取っていた…
「来るな！！来たらこの餓鬼の首をへし…！！」
俺は容赦なく…迅速に…笹本の顔面を殴った
「汚い手で触るんじゃねぇよ！！」
人質に怯めば、相手も自分も危機に陥る…故に、人質を取って安心した敵ほど、隙だらけなものは無い…親父の教えだ。
その教えは間違いじゃなかった…笹本は、俺の一撃で無様に吹き飛んだ…

「ひぃ！！」
だが、俺の拳は力を失っていて、一撃で沈める事が出来ない…だが…いまはそれで良いんだ…一撃で仕留めるものか…お前の為に…俺は…大切な存在を失った…
光が消えてから…紅玉は何も語らない…
力を使って休んでいるだけなら…どれほど嬉しいか…俺は…窓際へ逃げる笹本にゆっくりと恐怖を植え付けながら…歩いていく…
今のこの記憶さえ…恐怖で忘れ…狂ってしまうまで…追い詰める…そう考えていた…だが…俺は…自分の視界に映った…笹本の背後のあの鈍い光に…反射的に距離を取り…俺の目の前で…笹本の体に…ナイフが突き立てられた！？

54．凶刃再び

俺は目の前の光景に…驚いた…
人が刺されたからじゃない、あの凶刃が人を傷つけた事に…
あれが守護をする存在なら自ら斬り込むのは、守護の任ではない。
それなのに…なぜ…笹本を…刺した…
「ぎゃ！！」
笹本が悲鳴をあげ地面に倒れる…そして…光の中に…それは…入ってきた…
それは…俺が…最近…知り合った人物だった…
「冥乃ちゃん…」
鷲見冥乃…もとい、今は月影冥乃…
それは…俺の家族になった…少女の名前…先輩の妹で…今は俺の妹…
まだ知り合って日は浅いが…普通の人で…人の心配ばかりして…
初めて会った時は、何も話さず…初めて会話したのは、先輩の葬式の時…
そして…そのあと…俺の家族になった…
俺は…彼女を見るが…彼女は俺を見てはいない…ただ…無様に苦しむ笹本を…冷たい目で見ていた…そして…再び笹本を刺す為にナイフを振り上げる！？
「なんで…冥乃ちゃんが！！」
俺は冥乃に飛び掛った…彼女に人を殺させない為に…
なんで彼女がとか今は考えない…彼女のことも今は考えてはいけない
考えれば負ける情を持てば拳が鈍る…心が濁る…
言葉ではそれを理解している…
だけど…なぜ？

彼女が俺から距離を取る…
その目は…葬式の時に見た彼女の瞳…涙を流していないが…あのときに感じた…他の人とは違う雰囲気を感じた…
なぜ…いま…こんな事を考えるのだろう…考えては駄目なのに…考えれば、拳は鈍るのに…
（体は熱く、心は冷静に…ただ、相手を仕留めるのみ）
俺は自分にそう言い聞かせる
でも、拳の迷いは拭えず…攻撃は全て空を切る…
「なぜ邪魔をする？」
彼女が俺の行動を信じられないように口にした…
「なぜ…連子を知っているお前が…邪魔をする？」
なぜ…いま…先輩の名前が？そう疑問に思ってしまった…先輩の名が出てしまって…俺の拳が…体が…動きを止めてしまった…
その瞬間…彼女の動きが…攻撃に転じた
振るわれるナイフ…俺の四肢に…痛みが走る…だが、その痛みが俺の体を動かし、後方に距離を取る…
「峰打ちとはいえ、あの連撃で倒れないか…頑丈な人間だ…」
後ろへ距離を取った俺に…彼女はそう言った…
だが…俺の四肢に与えられた威力は…今後の俺の動きを制限するには充分すぎるダメージを与えていた…もう…攻めても無駄だろう…なら…理由を聞いても…もはや構わないだろう…もう拳が迷おうとも心が苦しもうとも…何も出来ないのだ…だから…俺は彼女に話しかけた。
「なぜ…冥乃ちゃんが…笹本を…」
俺はそれが知りたかった…だが…彼女は俺を無視した…
そして…地面で苦しむ笹本に近づくと…再びナイフを振り上げ…表情を険しくさせ
「ちっ…逃した…」
舌打ちをして…そう言った…そして…窓の方を向くと…そのまま闇の中に消えた…

俺は…彼女が消えた窓へ走るが…もう彼女の姿は見えなかった…
そして…俺は笹本を見る…二度目のナイフの振り上げで失神していたが…その背中に怪我は無かった
「なにが…どうなってんだ…」
周囲は…気を失っている朽木姉と…笹本が刺されたと思って怯え腰を抜かした3人の女がいた。
…俺は…怯えた女に近づくと…全員の側頭部に拳底を叩き込んで失神させた…
これで眼を覚ませば、5分10分の記憶は混乱して失うだろう…
これで、冥乃ちゃんの姿を覚えていないだろう…むしろ、こんな事はあまり喋れない筈だ。
俺は朽木姉を抱き上げると…おそらく笹本が仕掛けたと思われるカメラからテープを抜くと、笹本の懐を調べて携帯を見つけると110番通報をした…そして…俺はそのまま携帯を放置して助けてくれ言って、注意をしながら外へ出た。
あとは、警察が処理してくれる…俺はそれを望んだ

自分の位置はわからないが…一刻も早く此処から去りたかった…
朽木姉を苦しめたくなかった…

55．帰りの夜道

俺は路上地図を見ながら、朽木姉を背中に抱え夜道を歩いた…
途中…朽木姉が…眼を覚まして…少し泣かれた…
「良いか…ボクがお前の前で泣くのは…今だけなんだからな…ボクは…お前なんかに助けを求めたりしないからな…」
泣きながら、俺の背中で朽木姉がそう言うのを、俺は無言で頷いた…
「ああ、お前は強いからな、俺が助けなくても、自分でどうにか出来ただろ？」
俺がそう言うと、朽木姉は…少し黙って…
「そうだよ…このくらいボクは…だから、ボクなんかを助けに来るよりも舞華を…」
「あっ…そうだったな…」
「そうだよ…舞華を…」
このチビに今朝の事を怒鳴り忘れていた
「馬鹿がチビ！！」
「ちっ…チビ！？ボクを馬鹿にするな！！ボクはわかっているんだぞ！！
ボクは実は邪魔者で…いつも二人はボクが邪魔でも…笑って…だから今日の二人でのご飯は美味しくって…」
「喰ってねぇよ」
俺がそう言うと…朽木姉は…えっ…と言って黙り込んだ。
誤解を解くなら今だな
「今朝のあれは事故だ
と言うよりも、お前が蹴り飛ばしたから舞華とキスをしてしまったんだぞ！！
…舞華は初めてだったみたいだから…互いにノーカンとしてだな…」
「事故…ノーカン…えっ…えっ…」

なんか混乱し始めているな…
「だから、誰もお前を邪魔だと思っていない！！むしろ…お前が居ないと…静かで…寂しいだろ…」
俺は気恥ずかしかったが…朽木姉にそう言った…
「ボクが居ないと…寂しい…寂しいんだ♪
ボクの大切さがわかったんだな～ボクは居て良いんだな～」
まったく…さっきまで泣いていたのに…もう笑ってやがる…
「じゃあさ、じゃあさ」
なんか朽木姉が体を上下に揺らしながら興奮して俺に何かを言おうとしているが…
「背中ではしゃぐな！！倒れるだろ！！」
普段なら気にならないが…あの…冥乃ちゃん？に叩かれた四肢はその揺れでも限界に…
朽木姉が急に俺にもたれかかり、俺の顎と頭に手をやると…俺の唇に柔らかい感触がし俺の視界に…朽木姉の顔が…それに…俺の口に…何かが…侵入して…俺は…あまりの事に思考が停止した
「……ぷはっ…これも…事故でボクも初めてだけど…ノーカンだから！！別に…雅春なんて…好き…好きじゃ…好きじゃないんだからな！！」
真っ赤になった朽木姉の顔が見える…俺って…いま…このチビに…キスされた？
事故ではなく…チビが…自分から？ノーカン？えっ…えっ？
チビは何か言うだけ言うと…目が泳いで…急に気を失って、俺の背中から落ちそうになったのを俺は慌てて抱き止めた…
これは…どうとらえれば良い？事故でノーカンと本人が言うならそうだが…
「このチビ…俺の気持ちを考えないで行動しやがって…しかも…舌まで…」
自分で言っておいたなんだが…俺も顔を紅くしてしまった…
（随分とお熱い様じゃな）

そんな時…紅玉が…俺に話しかけてきた
（うるさいな…紅玉…気がついていたんなら、何か言えよな？心配しただろ）
俺は紅玉が眼を覚まし、いままでと変わらない様子に喜ぼうとしたが…
（こう…ぎょ…く？なんじゃ？それは、小僧？）
紅玉は…忘れるといったのは本当だった…
（いや、なんでもない…気にするな…石…）
（変な小僧じゃな？まあいい！！早く最後の一回の願いを言ってもらって、妾はあの人に会うのじゃ！！小僧、願い事があれば、妾に言うのじゃぞ～）
俺は足を止めた…あと一回？そう言えば…こいつが俺に自分の話しをするのは…俺が最後の一回の人物で俺の願いを叶えて、こいつが再会したい者と再会する為だった…。
（あと一回…なのか？）
俺は紅玉に…石に…尋ねた…
（そうなのじゃ！小僧の願いを叶えれば妾は再会できるのじゃ～）
それは…嘘を言っているような声ではなく…本当に次に出会えるという歓びの意思…
ああ…なんて事だ…あいつが…紅玉が、なぜ…俺に願いを早く言わせたかったのか解ってしまった。
あの時の紅玉は…解ってしまったんだ…忘れている事を思い出した紅玉は…
自分のあと一回の後に…何もない事を…だから…それを忘れたかったんだ…いままでと同じ様に…同じ様に、何も知らない自分に…
よく考えれば…こいつは意思を探して移動できる…意識を失った者が探せぬなら、その可能性として、笹本の意識を探せば、その眼に映る朽木姉の事が解る筈だった…
だから、俺に力を使わせようと…そして…俺の考えが正しければ…
（なんじゃ？何も考えずに…ぼーっと出来るなんて器用な奴じゃな

…）
この事に関しての俺の意思をこいつには届かなかった…意識的に拒否しているのだ…
俺は歯を喰いしばって…涙を流した…
（なんじゃ？小僧…涙が出ておるぞ？小僧…どうしたのじゃ？妾には解らぬぞ！！なぜ涙を流しているのじゃ！！）
俺の意識を読んでも解らない事に…俺のこの悲しみを理解できない石は…困惑しか出来なかった…だが…たった一つの事だけが…通じた…
（妾の為に泣かんでくれ！！小僧…お願いじゃ…妾が…小僧に何かしたのか？）
紅玉は言っていた…記憶を失おうとも…妾は妾だと…それに…これは永遠に失われたわけじゃない…あの時の紅玉のように…思い出すかもしれない…
そのときは、この怒りをぶつけてやろう…あの寂しがり屋の紅玉に…だから、それまでは…俺は紅玉との思い出を…ノートに書いて忘れよう…再び紅玉と出会った時に喜べるように…

56．校舎から独り

「舞華か？連絡が遅くなって悪かったな…ああ、おい！！ちゃんと携帯を持ってくれ！
すまねぇないま両手が塞がっていて朽木姉に携帯を持ってもらっているんだが…
話を戻すが、無事とは言い難いが…なんとか救出できた…まあ、経緯は今から道場の方へ行くから…そのときに…」
私は、頷いて携帯を切った…
「無事とは言い難いとは…どう言う事だ…馬鹿姉…私を心配させるな…」
小言で私はそう呟くと校舎の敷地から塀を飛び越える事で脱出した。
警備員から隠れながら、校舎を探していたが…居なくて心配した家に一度帰ったが、刹那は居なかった。
「救出した…か…大変な目に遭っていたのか…刹那…」
私の拳に…力が篭る…
「だから、雅は…刹那を探していたのか？…もしそうなら…私は除け者なのか…」
近所の塀を…殴った…
「違う…そんな筈はない…雅は…雅と刹那は…私の事を見捨てたりしない…あいつらのように…」
昔の事を思い出し、少し気分が悪くなった…昔の事など…どうする事も出来ないのに…
だけど…思い出してしまった…

あの頃の孤独な自分を…

私は…雅と仲良くなるまで、人とあまり付き合う事が無かった。

幼稚園の頃は、普通だったが、それ以降が普通では無かったのが原因だ。

私は小学校ではいじめられっ子と言う存在だった。
いじめの理由は…口調が変という…たぶん爺様と観ていた時代劇の影響だと思うが…
それで変な目で見られる事があった。
でも、少しづつ口調を改め、なんとか仲間に入れてもらおうと考えた矢先に…
当時の担任の先生が
“自分の考えている事をもっと言わないと、仲良くなれない
まずは、自分の事を理解してもらおう！たから、君の事をもっと話さなくちゃ！大事な事だから二回言ってしまった～”
と大事な事を言う事を教えてもらった…
それが…私と周囲の溝を絶壁に変えてしまった…
「私は…人を破壊させるのが大好きだ
どうしたら、効率的に破壊し、二度と悪さが出来ないように出来るか…
私は…壊すのが大好きだ！！大切な事だからもう一度言う…
私は、人を壊すのが楽しい！！」
これも当時の道場での訓練で本気で考えていた事だった
“世の中の悪から、弱者を救おうと思っても、悪はしつこく、手を貸す正義に不意打ちの牙をむく…故に…情け入らない！！悪が二度と悪を成さぬ為に…限りない破壊を常に考えるのだ！！怖い？いや！！楽しいと思え！破壊を好きになれ！”
学生の格闘マンガを読んだ父上がそう言って、私を鍛えた…
だから、私は真面目にそれを実行した…そして、先生が言う自分の考えている事を話して…私は問題児の汚名を受けた…
それから、数日後…私は学校には必要最低限しか行かなくなった…

その分家では、道場で修業した…戦いを想定して動いた…
道場の門下生に戦いを挑み…経験を積んだ

もちろん、勉強はちゃんとして…テストはいつも上位を取っていた。
むしろ、小学校と中学校は義務教育だったから、これで良かった。
こんな私の生活は、父上は良く思わなかったが、私が道場で頑張っているのをみて、なぜか大会で上位に入れたら、何も言わないと言ってくれた。
もちろん、私は勝ったが、周囲が五月蝿いので、ほとんど優勝戦は棄権している。
上位にいれば良いなら、それで良いのだ。
母上の場合は、勉強をしっかりやっているから良かった。
刹那は…病弱だったから、あまり学校には行っていなかったから、私が家に居て喜んでいた。

中学が終わり、私は近くの高校に刹那と一緒に進学した。
私の学力は問題なかったが、刹那が苦労したが、学校に行けると喜んでいた。

高校生活の一年目は…刹那を見守る為に私も学校に通ったが、刹那が、友人が出来たと喜んで、私に紹介してくれた。

それが、連子先輩だった
学校で事件に遭いその怪我のリハビリで道場に通う事になった。
刹那はよく連子先輩について回って、遊んでいた。
私も刹那を見守る為に連子先輩と遊んだ。
でも、それは学校外の事で…

学校では、またいじめられるかもしれないと思って友人は作らなかった

ただ優等生で、冷静に他の世界に干渉しないように…話しかけられないように…気を張っていた。

そんな生活が変わったのは…雅が来てからだった…

雅は連子先輩の友人で、随分変わった奴だった
ギラギラと周囲を警戒し…拒絶したがっていたが…それでも…なにかに期待した…そんな…奴だった…
今ならわかるが、それは、当時の私と同じだったのだろう…

友達…自分の友達がいない…でも友達なんて信じられない…
人なんて信じられない…でも…もしかしたら…信じられる存在が…
信じられる人がいるかもしれない
そう考えていたんだろう…おそらく、当の本人には気づく事の出来ない救いを求める気持ちだろうが…気づいても否定する気持ちだろうが…私と雅は似ていた…

道場で…私は雅を見ていた…気配を消して見ていたのに…
雅は、私に気づいて睨みつけた

ショックだった…気配がばれるなんて…
でも…見つかったんだ…だから…私は、雅に一手申し込んだ！
私の気配に気づくほどの腕前だ良い経験になるそう思ったが
結果は…まあ、私の勝ちだった
理由は…雅の奴…受け流してばかりで殆ど無抵抗だったからだ…
それは、私にとっての侮辱でしかない！！女だから手を抜いているのか！？
私は激怒して、それから何度も雅に勝負を挑んだ
私にとっての初めての経験だった
誰かに、ここまで執着するのは…初めてだった

その結果…雅は女性に対しての喧嘩は駄目だと教育されているせいで戦えないと
それから、私は雅と話をするようになり…私は…また自分の趣味を言ってしまったが、雅は私を否定する事はせず…逆に…
「その場合折るよりも外して捻る方が痛いぞ」
と教えてくれた…初めて私の趣味を否定しないでくれた。

「だから…雅の事が…私は……きなんだろうか…？」
私は自分自身にも聞こえないように…そう呟いた…
その瞬間…私は自分の眼を疑った…私の目の前に…アイツが居た…
「なんで…お前が…此処に…」
私は構えを取ろうとするが…既に…私は…奴の間合いに居た…
普段の私ならそれを避けて、確実に急所を打つ事ができた
普通の敵なら、目の前から私が消え…驚き動きを止めた所をやられていた

でも…私は不意を突かれていて…それは普通の敵ではなかった事から…
私は…腹部に…何かが刺される…感覚を味わった瞬間…チリッ…と音が聞こえたかと思うと…視界が真っ白になって…私は倒れた…

57．道場

俺は電話を切ると、朽木たちの家にある道場へ向かった
「それにしても、どう説明するか…」
俺はまた気を失った朽木姉を見るが…気持ち良さそうに眠ってやがる…
不意に俺の顔が熱くなる

「クソッ…落ち着け…あれは事故だ…他意はない…それに俺の勘違いだったら…
それこそこいつは俺を馬鹿にするじゃねぇか…」
俺は自分にそう言い聞かせると…目の前にある道場の門を見た。

その門は、古い厳格な雰囲気を感じさせるような木製の門
まあ、一般的な道場の門よりも少し小汚いと…いや、厳格だと考えれば良いのだ！

断じて、前に古臭いと言って、舞華たちの親父に何度も組み手をされて言う気が失せたなんてことは…無くはない…

リハビリで道場に着ていた俺に、いろんな技を仕掛けてくるものだから、俺はそれを避ける事しか出来なかったが…本調子なら良い勝負が出来ると思う！

だが、それよりも…舞華は凄かった…
俺は初めて同い年の相手の攻撃を本気で避けたんだからな…

並みの不良なんてドラクエのスライム並みの強さにしか思えないくらいだ

初めの頃は、俺は嫌われていた
もちろん、俺も舞華のことを気に入らなかった…初めて見たときに…無性に腹がたった。

理由は解らないが…たぶん、人との付き合いを拒絶しているような雰囲気だったからか…
まあ、当時の俺も似たようなもんか…

男だったら殴れるのに…と何度も悔やんだ事はあったが…話をしてみると…
俺が組み手のとき避けてばっかりで、攻撃してこないのが不満だったらしい

母さんの英才教育の賜物で本気で攻撃できなかったからな…
確かに見下された感がして、俺も腹がたつな…
まあ、それから先輩と舞華の二人がかりで、今日のようにある程度の力で相手を殴れるようになったが…
表立って「俺は女を殴れるようになった」なんて鬼畜発言を言えるはずが無い
言ったら…きっと両腕を母さんに折られてしまう！！

まあ…そんな事より…
「おっさん！！門を開けてくれ～」
俺はおっさん…舞華たちの父を呼びながら、門を叩いた。
しばらく叩いていると…

「誰じゃ！こんな時間に！！」道場の門を飛び越え独りの男が飛び降りてきた

「ワシの可愛い娘たちがまだ帰ってきておらんのに！！…なんだ…雅春」
相変わらず、ムカつくおっさんだ
「うるせー、ほら、配達ものだ」
俺は背中に背負っている朽木姉をおっさんに見せた…が…
「ワシの可愛い小さい方の娘！！」
変に感極まって…目、鼻、口から汚ぇ液を吐きながら飛びかかってきやがった！！
あまりのキモさに、俺は反撃しようとしたが…それよりも先に…
「誰がチビだ！！」
チビという言葉に反応した朽木姉のカウンターがおっさんの喉に打ち込まれた
「ギョッフー！！！」
そして…汚い花火が…おっさんの口から俺たちの頭上に降り注がれ…俺は慌てずにいつもの様に回避し、足元を見る。

「相変わらず、狂ってんな…」
俺は独り汚く汚れ、地面を転がるおっさんを見てそう思った
「まったく！！父様は！！僕はチビじゃないんだからな！！ただ…可愛いだけなんだからな…もふっ…」
「耳元で怒鳴りながら俺の背中に顔を埋めるな！！」
何を調子に乗っているのか…このチビめ…
「それにしても…遅かったではないか～愛しい小さい方の娘」
そう思っている間に、おっさんはさっきまでのダメージがまるで、嘘のように回復して、俺たちに話しかけてきた。
「それは…」さすがに…言い難かった…
あんたの娘が襲われそうだったのを助けたって言えれば良いけど…
それは、朽木姉のプライドを…
「ボクが暴漢に襲われているところを、こいつが助けてくれたんだ」

このチビ！！恥ずかしいとかないのか！！
いきなり、喋りやがった！！
「ふむ…暴漢とな？」
流石のおっさんも、いまいち事の重大さに気づけずに、聞き返す
「うん…生活指導の笹本が…ボクの服を破って…こいつが助けてくれなかったら…
ボクは…今頃…」
ああ…大丈夫とかじゃなくって…このチビ…怖かった事をさっさと過去の事にしたかったのか…
「生活指導だと！？わしの娘に…ブチ殺！！政春！！その男はどこだ！！わし自ら…ナニを粉砕してくれる！！」
だが…さっさと過去の事にしたいのはわかるが…この怒り狂った…おっさんを静めるのは俺の役割ですか？…そうだよな…
俺はそう自分に言い聞かせ…狂い笑うおっさんを宥めた…拳と蹴りで…

「ふむ…すでに警察を呼んで突き出したか…うぬぬぬ…口惜しい…ワシの父様センサーが完璧ならば…ばらしたところを…口惜し…娘の愛を獲得する機会が…」
まったく…狂ってやがるな
「こんな性格じゃなかったら…ボクも舞華も本心から良い親だと思えるんだけど…あっ…ボクちょっと着替えてくる！！」
朽木姉は、いきなり俺の背中を蹴ると、俺が渡した上着で前を隠す…
そう言えば、笹本の糞野郎に、服を破かれたんだったな。
「ああ、着替え終わったら、上着を返すから…待っていろよ！！」
顔を紅くして、朽木姉は家の方へと走って行った…
「まあ、政春、わしはお前と拳で語りたい気分がするが…今は居間に行こうかの…
こやつが婿養子になれば…わしらの道場も安泰じゃな…」
後半の部分は基本的に聞く気がなかったので、俺の耳には入ってこ

なかった
だって…このおっさんの言うことの9割は戯言なのだから…聞く気になれない。
居間に向かう途中…廊下にある電話が鳴った
「なんじゃ…ちょっとすまんが、政春、電話を取ってくれ、わしは妻に刹那について、少し話す故に、任せたぞ」
ちょい待て！おっさん！！他人に家の電話を取らせるな！！
と言おうと思ったが…おっさんは、俺が何か言う前にスタスタと歩き去った…

俺は舌うち一つすると、電話を取った
「クソッ…はい、朽木ですけど、ご用件は…」
「あの…お宅は、朽木舞華さんのご自宅でしょうか？」
舞華に関する事か？なんだ？声からして男…いったい…何が…
「ああ、そうだが、舞華にようだったら、まだ…」
「いえ、違うんです…わたくし…警察の者ですが…落ち着いて聞いてください…」
警察？なんで警察が舞華に…それに落ち着けって…
「実は……なんです…」
えっ…いま何て言ったんだ…
「すいません…よく聞こえなかったので…もう一度…」
ありえない…内容に…俺の思考は…動きを止めようとしていた…
「わかりました…もう一度…言いますね…朽木舞華さんが…腹を刺され…重体でいま病院にいます…早く来てください」
俺は…受話器を…落した…

５８．病院

ズガン…ズガン…ズガン…
赤いランプの灯された手術室の前で、病院の俺は壁を殴りつけた…
「なんだよ…なんで…舞華が…舞華が！！」
俺がもっとちゃんとしていれば…俺がもっと…強かったら…変に意地を張ったせいで…馬鹿だから…馬鹿だから…なにも…なにも…守れなかっ…
俺は渾身の一撃を…壁に叩きつけようと腕を振り上げて…止められ…
「落ち着いてください！！」
そう怒鳴られた…
俺は…その声の主を見た…舞華のおばさんだった…
目を赤くして…その息は荒い…
「舞華は大丈夫です…私の娘なんです…」
俺よりも叫んで…泣きたいのに…強い…人だ…

「ぎょえ！！！！！！！！！！！！」

それに比べ…おっさんは…外で吼えていた…

「他の患者にご迷惑ですので静かにしてください！！」
そんなおっさんに勇気のある看護師が近づいて注意するが…
「舞華！！！！！！！！！！！」
興奮したおっさんには…意味もなく…
「ちょっと！！静かにしてって…言ってるでしょ！！」
看護師が注射器を懐から取り出し…おっさんの首に突き立てた…
「ハッガファ！？」
その瞬間おっさんは恍惚な表情を浮かべるとそのまま撃沈した。
人というものは、自分よりも狂った人間を見ると正気に戻るものだ…

俺は自分を落ち着かせることができた。
「すいません…俺取り乱して…」
「いいの…貴方が取り乱してくれなかったら…きっと私が取り乱してたわ…
でも…なんで家なのかしら…今日は刹那のことで…悲しいことがあったのに…いったい誰が…」
その瞬間、手術室のランプが消え、中から医者が出てきた。
「先生…舞華は…舞華は無事なんでしょうか？」
舞華のおばさんが…先生に駆け寄ると…医者はマスクを外しながら…首を…

横に振った…

「！！！」
おばさんが…倒れそうになりながらも…踏みとどまる
「すいません…そういう意味ではなく、手術自体は成功しています…ですが…意識が…意識がないのです…長年医者をやってきていますが…こんなことは初めてです…」

「無事でも意識がない…」
おばさんがそう呟いた…
「何が原因なんだ？先生…何が舞華を…ここまで傷つけたんだ？」
「んっ…一応…鋭い刃物と思うのだが…おそらく…果物ナイフのような大きさだと思うんだが…」
俺の質問に…医者は両腕を軽く広げ…そのサイズを教えてくれた…
それは…冥乃ちゃんが…ついさっき…あの場所で見た冥乃ちゃんが持っていたものと同じサイズのものだった…

俺は…すぐさま…病院を抜け出し…外へ走り出した…
おそらく家にいる冥乃のところへ…

59．辻褄

家は静かだった…
いや…いつも通りの賑やかさだったが…俺がそれを壊した
「なんで…舞華を刺した！？」
俺は冥乃の襟首を掴み…眼前に引き寄せるとそう怒鳴りつけた。
信じたくはなかった…あの場所での冥乃の姿を…
舞華が刺されなければ、俺はあの出来事を忘れて接しようとさえ、考えていたのに…
「政春さん、どうしたんです？」
それなのに…彼女は…笑顔で…俺にそう言った…
こんな状況で…いつもの笑顔で彼女はそう言ったのだ…
「舞華さんが…どうかしたんですか？」
いや…いつもの笑顔ではない…今まで気づかなかったのか、それとも…あの冥乃を見たためか…彼女の笑顔の…微妙な違和感に気がついた…

彼女の眼に感情が籠ってなかった…

俺は、乱暴に冥乃を突き放すと
「政春！？なにやってんのよ！！」
母さんが俺を怒鳴る…なんで…怒鳴るんだ？
母さん達なら…冥乃を止められたかもしれないのに…
そもそも、冥乃が家に来たのは、それを阻止するためだったんだろ？
俺はそんな怒りを込めた眼で母さんを見るが…母さんは俺のこの気持ちに動揺することはなく…俺の目を見てこう言った
「あんた…何か勘違いしているようだから言うけど…冥乃ちゃんはずっと家に居たわ」

・
・・
・・・
・・・・

その眼に偽りは無かった…でも…俺は…俺も…冥乃を信じたかったが…

「政春…落ち着こう…」

親父が…そう俺を諭すように…微笑む…だけど…だけど…

俺は…家から飛び出した…

走った…走った…がむしゃらに…走った…走った…

理由なんてわからない…でも…走った…あのとき見た冥乃が俺の見た現実とは違うのではないのかと信じたかった…

それに…冥乃って…いったい何なんだ…先輩の妹…

先輩の妹なのは分かるが…違和感があった…普通じゃない違和感…

俺が見たあの冥乃は…偽りではなく、幻ではなく事実だという気持ち…

気がつけば…俺は…公園に…足を踏み入れていた…

暗い公園は…街灯に照らされ…一見、この薄暗さはロマンティックな気分になると知られた有名な公園だった。

だが、先輩の事件が原因で、この薄暗さは…不気味だった…

先輩が倒れていた場所は…白い線で描かれ…俺は…その場所にまだ先輩がいるのではないのかと…ゆっくりと…ゆっくりと近づいた…

そして…膝を折ると…俺は…

「やあ～こんな処でまたまた奇遇だね」

急に声をかけられ、俺はその声の方向を見る…桜庭だった

この不気味な中で…まさかこいつに出会うなんて…何かを感じた…

ここの雰囲気が不気味なのは、周囲ではなく…この男なのではないのかと…そう思ってしまった。

60．先輩が殺された公園

「一応…まだ、事件の検証が済んでいないから、あまりここには来ない方がいいんだけどね」
桜庭が俺にそう言ったが…俺は…なぜ、奴が俺の行く先々に居るのかが気になった。
だが、そんなことよりも、俺が知りたいことは別にある。
「別に…良いじゃねぇか…そんな事より、聞きたい事があるんだけど…良いか？」
「そんな事って…まったく…わがままだね、まあ、いいよ　何が聞きたいのかな？」
「先輩の家族について何か知らないか？」
もし、冥乃が石と同じような存在なら…なにかしらの不審な点が存在するはずだ。
戸籍等の問題がきっと…
「鷲見君の家族…両親は交通事故で死んでしまっているから…保護者の伯父さんだけしかいないんだけど…いや…妹がいるって…聞いたことが…」
はっきりしない答えに、俺は頭に手をやった…だが…おそらく、冥乃は…人間じゃない…
だから…その確証の為に…俺はいま先輩の妹が俺の家にいることを話した。
「鷲見君の妹の事を？別にかまわないけど…」
「ああ、ありがとう」

「だけど…なんで、君はこういく先々で、僕と出会うのかな？」
缶コーヒーを手渡しながら、桜庭は俺に聞いてきた。

「別に、俺が先回りしているんじゃなくって、桜庭さんの方が、俺のあとに現れると思うんだけどな」
俺は、この不気味な感覚を感じながら、桜庭を見た…
この不気味な感覚はどこから来るのかを警戒しながら、桜庭を調べた…
「んっ？そのお守り…」
俺は桜庭の首にかけられているお守りに気がついた。
朱色のお守りから感じる不気味な気配に…俺は気付くことができた。
「このお守り？羅刹さんがくれたお守りなんだよ、僕が今の記者になった時に、“これを掛けておけば安心だ”って言って僕にくれたんだよ」
その言葉で理解できた。この男は、あの店長に守られているということに…
おそらく、あの不気味な気配に、手出しできなくしているんだろう。
そう考えれば、あの時…冥乃が逃げた理由も…
待て…まだ決まっていないのに…俺はあの刃物を持ったものを冥乃と決めつけて…
馬鹿な…まだ…俺はあいつを信じようとしているのか？
舞華を殺そうとした奴を…俺はまだ庇おうとしているのか？
信じる信じないも確証がどうかって…俺は何を考えているんだ！！
冥乃は舞華を殺そうとした…それが事実で良いではないか！！
俺は…拳に力を込める…
「尾田君の場所がわかったんだよ」
「はぁ？」
あまりの唐突な言葉に、俺は無様な返事をした。

61．尾田

「尾田の居場所が分かったって…」
「もちろん、この情報は有力な筋から得た情報で、まだ警察にも手に入れていない情報なんだよ」
真偽は定かではないが…有力な情報らしい…
まだ警察も手に入れていない情報…舞華の事件とは別に…先輩の事の手がかり…
「なんで…俺にその話をするんだよ？別に…一人で勝手に行っても…」
俺はすぐにその情報を聞きたかったが、考えてみれば…おかしい…
何で俺にそれを教えようとするのか…俺に言ったところで…
何か…条件があるはずだ…
「もちろん、ただじゃない」
やはり…交換条件があったか…

「僕を護衛して欲しいんだ」

・・・・・・
・・・・・
・・・
・

「はぁ？護衛？」
「当たり前だろ！！相手は…前に会った事があるけどさ…脱走して、追い詰められているんだよ…取材しても…万が一のことがあったら…」

なんだ…自分の身を守りたくって…俺を誘ったのか？

「もし…万が一のことがあったら…誰も彼を庇えなくなるじゃないか！！」

予想外の答えだった…庇えなくなるって…なんだよこの男…

守りたいのは自分じゃなくって…尾田ってことかよ…

「まあ…その言葉が嘘か本当かわからないが…良いぜ…」

まあ…どの道…先輩の事を知らなきゃいけない…どっちの事件であれ…尾田は冥乃の事も知っているはずだ…

そして…先輩の死因も…なぜ…先輩を殺そうとしたのか？

「ありがとう！！助かったよ」

俺の返事に桜庭は小躍りしながら、メモを俺に書き渡した。

「とりあえず、明日の１０時にホロウで落ち合おう」

桜庭はそう言うと、公園から走り去ろうとして、立ち止まると

「頼まれたこともしっかり調べとくから、明日よろしく！」

走り去った。

62．過去の虚像

「来るな！！来るな！！」
ビルで…俺は…怯えていた
無様に頭を抱え…鈍く光る刃物の幻覚に怯えていた…

奴が俺を殺しに来る…
奴が俺を殺そうとしている…

俺は悪くないのに…俺のせいじゃない
俺が…俺が殺したんじゃない！！

俺が危害を加えたわけじゃない…

悪いのは…あの女だ…あの女が…あの女が忘れるから…忘れるから
いけないんだ！！

俺は…幻覚と分かっているのに…そのナイフの先を見た…

「俺は、彼女の事を忘れた事なんてない！！なのに…なぜ俺を…俺
を追い詰めるんだ！！
俺を拒絶するんだ…」俺は…地面を叩く…叩く…

「俺は…死にたくない！！死にたくない！！あの女が生きているの
に…」
幻覚が…俺に言葉を紡ぐ…
「あの女が…先輩が…死んだ…死んだ…」
気が狂いそうだった…先輩が死ぬなんて…信じられなかった…

「死んだ？殺した？誰が？俺が？お前が？えっ？えっ？えっ？えっ…」
公園で…死んだ…その話は…彼女と同じ…

「誰が…誰が…罪を償う前に死ぬなんて許せない！！誰が殺した！！誰が殺した！！」
恐れが怒りに飲み尽される…恐れが狂気に染まっていく…

「殺す…殺す…殺す！！ブチ殺す！！誰だ！！誰が殺したんだ！！誰が！！」
俺は吠えた！！そして…幻覚を睨みつけると…俺は…手を伸ばした…
「力だ…力が欲しい…先輩を殺した奴に復讐する力を…彼女を殺した奴らに復讐する力を…」
俺は…幻覚に…手を伸ばす…幻覚のナイフに…
「だから…復讐の力を…寄こせ…寄こせ！！」
俺の手は…幻覚である筈のナイフを…掴んだ…そして…掴めたと思った…一瞬後…ナイフは消え…

俺の脳裏に…過去の…あの幸せだったあの時代が見えた…
先輩と彼女…そして、俺がいた…
先輩は、いつも無理難題を俺に命令していた…
町の都市伝説を探せ、謎の組織を見つけろ、など子供みたいに、笑いながら、俺と彼女を引っ張り回した…
授業とかもお構い無しで、遊びまくっていた…

だから、一度先輩を注意しようとした
「先輩！！いい加減にしてください！！これ以上授業を放棄したら…俺と同じ学年になりますよ！！」
「はぁ～ありえねぇ事だな」
それなのに、先輩は、俺の注意を聞こうともせず、のほほんと受け

流した。
「だから！！そんな悠長なことを言っていると…」
「だー！！うるさいな！！おい！！司！！俺の試験の点数をこの馬鹿に教えてやれ！！」
先輩が彼女…司先輩が、紙を取り出した
「４４４点」五教科の合計点がそう書かれていた…が…その点数を口に出した瞬間、司先輩は、急に顔を真っ赤にさせて、その紙を懐に収め…
「ごめん、これ私の…」と恥ずかしそうに言った。
そして、今度こそ、先輩のテストを見せてもらった…
名前なしに付き…０点だったが…そのテストは…５００点に横棒で０点となっていた。
「見たか！！馬鹿後輩！！俺はここまで完ぺきなんだぜ！」
そう先輩は俺に笑った…

思い出は終わったのに、
俺の目の前に先輩の姿が見えた…胸にナイフが…突き刺さった姿が…俺には見えた…
俺は先輩の胸に刺さったナイフに触れる…冷たく硬い…俺はナイフを掴み引き抜こうと…
先輩の体に手で触れようとしたが、俺の手は…先輩…幻影をすり抜け…先輩の姿が消えた…そして、ただ…そのナイフの重みが…俺の腕に残った…
「おい尾田…尾田史一…俺は…復讐する力を手に入れた…復讐する権利を得た…
俺は…俺は…俺の復讐を邪魔するものを殺す…」
俺は…ナイフを片手に笑った…これで復讐ができると…嗤った

63．厄日の始まり

「なんじゃ…店の前で…」
手に、なぜか冬なのに打ち水用のひしゃくを俺に向けながらそう呟いた…
「それが、水をぶっかけた奴に対して言うことか？」
冬のこの寒空に頭から水をかけられた俺はそう答えた…

午前９時３０分…俺は桜庭の頼みを聞く為に、俺はホロウの前で待っていたが…
店内からふらふらとあの古い言葉を使っていた従業員が手にバケツを持って出てくると…いきなり、打ち水を開始しやがった！？

本来、打ち水とは、夏の暑い日に撒くものであるはずなのに…まさかこんな冬に…
俺は、慌てて水を避けようとしたが…
スッパン！！ピシピシ！！
あまりの手首の捻りの力で、俺の反応速度よりも圧倒的に早く痛い水しぶきが俺の頭に叩きつけられ…
「なんじゃ…店の前で…」と冒頭に戻る…

店内に案内された俺は、拭くものを借りて、頭を拭いた
「すまぬ…小僧…昨日は、鏡（かがみ）が妾を寝かせてくれなくて…」
鏡？…この場合は人の名前か？それに…寝かしてもらえなかったって…
「彼氏といちゃついて、寝不足か？まったく、お熱い事だな」
まったく…俺と同じくらいでもう彼氏とそんな事してんのかよ…
世間はお盛んで、早いな！！
俺は、そんな事を考えたが…

「違うのじゃ！！別に、鏡は、彼氏とか…そう言った者ではなくてのう…」
「そう言った者じゃなくても、そう言った事が出来るのかよ！？」
俺は、このウェートレスの発言に驚いたが…ふと考えると…こいつの口調…石と同じ…
だよな？

「お主！！何を考えておるか分らんが！！やましい事はしておらんぞ！！」
「やましい事をしていないって言われても…普通はそうとしか捉えられないんだが…」
俺がそう言いかけた時…俺の視界から…ウェートレスが消えた！？
“トスッ”
「虚けが…妾をこれ以上怒らせれば…刺す…」
その声は、俺の背後から聞こえ…首筋に尖った何かが刺さっている感覚がした…
…まて…刺さっている感覚？ちょっ…！？
「待て！！刺さっている！！俺の首に何かが刺さって…」

「ふむ？…ぬぅ！？少し刺してしまったのじゃ！？寝不足が原因じゃな…」
やれやれ感が感じられる言葉が背後から！？まて、こんな事して、やれやれで済むのか！？
首の後ろから、血が流れる感覚が！？

「美味しそうな匂いだ～」
店の奥から不気味な気配が…この感じは店長だ！？
「うむむ！？この状況を見られればヤバいのじゃ！？」
背後であの女が慌てる気配がしたと思うと…急に気配が消えた！？
俺は慌てて、背後を見ると、そこには誰もいなかった…そして…足

元には…
血で濡れた爪楊枝が…落ちていた

「あの女…これで刺しやがったのか！！」
飲食店なら、どこにでもあるこんな物で…首を刺された俺は…少しイラっときたが…
“ベチャ…ベチャ…”
「……！？」
俺の血が出ている首を舐められる感覚で声に出ない悲鳴をだした！？
いや…悲鳴を出そうとしたが…口に指を入れられ…叫ぶに叫べなかった…
「旨いの…我の舌を唸らせる一品じゃ」
背後から…あの店長の声が俺の背筋に悪寒を走らせる！！
「うぐっ…！！」
俺は何とか暴れて、抜け出そうと考えたが…片腕で動きを封じられた…

「暴れるな…すぐに気持ち良くなるぞ…」
店長が…俺の耳に息を吹きかけながら…俺に話しかける…
感じたことも無い感覚…に…俺は…震えた

“ベチャ…ベチャ…”
また…首を舐められる…そして…俺の口の中で…店長の指が…蠕るように動く…くねくねと…俺の舌を弄ぶ…意識してはいけない…この指を…意識してはいけないと思った…
だが…その指は甘かった…ケーキの様に…甘く…痺れる感覚…待て…何を考えている俺…
「……！！！！！」
首筋が…舐められている所が熱くなる…
止めろ！！やめろ！！やめてくれ！！俺は…この感覚に耐えられな

いと思った時
「くはっ…はぁはぁ…」解放された
俺は…地面に片膝を着き…荒く息を吐いた

「どうだ？」
「はぁはぁ…どうだって…はぁはぁ…何が…だ…はぁはぁ…」

「首の血だ…もう完治したと思うのだが…」
俺は、店長の言葉に…首に手を触れる…ぬちょり…と店長の舐めた所は唾液で濡れていたが…傷が無かった…爪楊枝で刺されたはずの所の傷が消えていた…

「！？」
俺は混乱した…えっ？えっ？あまりの事に、呼吸が正常さを取り戻す
「なんだ？我がこんな事が出来て不思議か？」
「当たり前だ！！普通に考えて不可能だろ！！」
舐められて怪我が治るって…普通…

「童…我が普通でないことは、祭に渡したお守りで、もう理解していると思ったが…我の買いかぶりすぎであったか？」
サングラスに隠された朱色の目が…俺を見つめる
昨日の事を知っているのか！？

「あれは、我の目であり、耳でもある。故に、我には全てわかる」
どうやら…人ではないものは…意外と居るようだ…と俺は考えてしまった…

「やぁ～月影君！！はやいね～」
何も知らないのん気な男が…今、待ち合わせ場所にやってきて…

「どうしたんだい？顔が赤いよ？」
変な事を言ってきた…

64．尾田遭遇

「あはは、羅刹さんにからかわれたんだね」
店を出て、何で顔が赤かったのかをしつこく聞いてくるものだから、俺は割愛して答えてやった。（指を咥えさせられたとか、首を舐められた事は内緒にしたぞ）

「まったく…朝から疲れた…」
俺は両肩を下げる…
「なんだい！！これからが本番なんだから！！今から、尾田君に会うんだよ！！」
そんな俺に喝を入れるように、桜庭は俺の背中を叩く…
内心ウザイと思った。

俺は桜庭の案内で廃ビルの前に着いた。
「ここは三年前に経営不振で倒産して、それから、新しい企業が入るたびに潰れる魔のビル」
桜庭が、まるで肝試しをするかの様に俺に話しかける。
俺は、そうか、そうか、と相槌うちながら俺は、廃ビルに入る

「待ってよー！！まだ合図してないんだから！！」
桜庭はそう言うと、石を足元から拾うと、ビルの窓ガラスに投げて…

ガシャン！！

窓ガラスは割れた！？

「おい！！何するんだ！！逃げるだろうが！！」

俺は桜庭慌てて近づく
「まあまあ、これが合図なんだから～普通にこんな派手な音がして入る人はいないから、確認はするさ」
確かに、下手に静かに誰かが侵入するよりも、音をたてて、入ることを教えていれば、警戒は少しは和らぐだろう…逃げなければだが…
「さあ、近所の住人が何かする前に、インタビューして脱出だよ～」
・
・・
・・・
「待て…それって…」
俺は桜庭に話を聞こうとしたが
「合図としての役割もあるけど、これやれば、近所の人警察呼ぶでしょ？」
嵌められた…俺はそう思った…
近所の住人に俺の姿は見られている
なぜここに来たのかを尋ねられれば…容疑者に会おうとしていた事になるし…
それを言って信じられなくても…廃ビルと言う誰かが所有する施設を傷つけたのだ
それなりの軽犯罪だ…
「さあ、どんどん行くよ～」

桜庭が俺の目の前をどんどん進んでいく…

まあ、捕まらなければ良い話だ

俺は自分にそう言い聞かせ、桜庭のあとをついて歩…

「待て！！」

俺は桜庭の襟首をつかむ！！

「げぼっ…いきなり何するんだよ～」

「護衛で来てんだから、無防備に先に行くな」

俺はそう言いながら、しゃがむと人差し指で足首の高さ辺りを指で弾く…

ピーン…

糸が弾かれ…端のピンが引き抜け…隣のドアから太い木釘の刺さったベッドが強い勢いで飛び出てきた

ズゴン…壁にぶつかったベッドを見た桜庭は…青い顔をしていた…

「止めないで欲しかったか？」

俺は冗談めいた顔でそう言うと…

桜庭は、顔を横に力一杯振った

「簡単に会えそうにねぇな」

俺は肩をコキコキと鳴らす…まあ、そう簡単に済むとは思ってなかったし…俺は桜庭を肩に背負うと…

「えっ…あ…どっ…どうするのかな…急に僕を担いで…」

もし、こんな罠をほかにも準備しているなら…いや、している！！

こんな罠を準備しているということは…いつ逃げ出してもおかしくない！！
「生きていたかったら、ジタバタするなよ」
俺は桜庭にそう言うと、足に力を込めた！！
「ちょっ…怖っ！！」
俺は的確に、罠を見抜き、それを回避して進む…だが、それでも、いくつかの手動の罠もあり…正確には、回避するのに手間のかかるものもあったので、それは、発動させながら、俺は奴を追い詰めた…
俺はここに居る
俺はここに居るぞ

俺はもうすぐお前のもとに手が届く…
罠の発動する位置が、お前を追い詰める者のいる位置だ…
音がしないと思っても…急に先の罠が動く恐怖…
さあ…尾田…話を聞こうか…
俺は…人が部屋に閉じこもる音を聞いた…
「そこにいるのか…」
「ふぇ？尾田君？」
無意識に、口が動いたらしい…

「ああ、たぶん、そうだろうよ、良いと言うまで少し黙っていろ」
桜庭にそう命令した俺は、最後まで気を抜かず、奴が閉じこもっているドアの前に立つ…

そして…俺は…その扉の隣の部屋へと歩き…桜庭がそっちの部屋じゃないと目で訴えたが、俺は隣の部屋の扉を蹴り破る！！
そこはただの空き部屋、誰もいない…
隣の部屋では、慌てる音が聞こえるが、すぐに静かになる…

まだ大丈夫だと考えているのか？
お笑い草だな…俺は、奴がいる部屋の壁に手で触れると…一気に反転して、蹴りを壁に叩きこむ！！

ドカッー！！！俺の蹴りは、壁に人が通れる穴を作った
「あっ…」
俺の方で桜庭が間抜けな声を出す…

「壁を壊した…だと…」
壁の向こうから尾田と思われる声が聞こえた
暗室らしく…窓のない暗い部屋だった…

「さあ、ご対面といこうじゃねーか」
俺は、部屋の中へと入って行った。

65．対話（拳）

暗い部屋…だが、俺は足下から壊れた壁の破片を掴むと、入口にめがけて投げる…

カチッ

暗室のスイッチが作動する音が鳴り、薄赤い光が部屋を照らした。

赤い光の下に壁にもたれかかっている男が居た。

男は、白い患者の服のような物を着ていた。

「あんたが、尾田か？」

俺の言葉に、その男は身を縮める

ビンゴだ…この男が尾田史一だ

念のために、桜庭の方を見る

「君なの…尾田君…やつれたね…」

桜庭が尾田に話しかけるが…

「なんだよ…何しに来たんだ！！」

尾田は、俺に掴みかかってきた

抵抗しようとしたが、危険な感じがしなかったから、そのまま隣の部屋に投げた。

「うわぁ！！」

桜庭が飛んできた尾田を避けるために距離をとり、尾田は、無様に

地面を転がった。

「ちくしょう！！」
尾田が体勢を立て直し、立ち上がる
俺は立ち上がった、尾田の足を払って倒す！！

「どうした？無様に倒れるだけか？」
俺は相手を見下しながら挑発した。

先輩を傷つけた奴だ、ただ会話するなんて、もともと考えてはいない。
むしろ、あんな罠を仕掛けていて、殴る口実が出来て、感謝すらしている。

「クソ！！」
尾田が、滑稽に後ろに転がりながら立ち上がり、ドアから逃げようとしたが、

「遅い」
奴が立ち上がった時には、既に俺はドアに前に居た。

「どうした？あんな罠を仕掛けていたくらいなら、罠を突破されたら、こうなる事ぐらい想像できただろ？」
俺は、また隣の部屋へ逃げ出させるように追い詰める

さあ、もとの穴倉に逃げろ…逃げて…選択しろ…
尾田が隣に部屋へ走り出し、俺も追い詰めるように、歩き出すが、
そんな俺に腕を、
無様に床に腰を着いていた桜庭が、掴んだ
「落ち着いてよ！！二人とも！！月影君！！僕らは会話に来たんだ

！！捕まえるために来たんじゃないんだよ！！」

俺は、桜庭の言葉に、内心舌打ちをした。

「はいはい、俺はただの護衛だったな～」

俺は、さぞ、思い出したかのような口調で言うと、

「だからこそ、今、奴を痛めている」

感情を消した声で言い放った。

66．不発の罠

「奴は、追い詰められながら、俺たちに最後の罠を仕掛けてたんだよ」
俺は、いまいち状況の読めていない桜庭の襟首を手首にひっかけ、赤い点灯が灯る隣の部屋に入った。

「うぉぉぉ！！」
部屋に入った瞬間、尾田が雄たけびを上げながら、木の板を俺に振りおろしてきたが、俺は軽く半身避けると、尾田の顎と足に拳を叩きこんで、地面に転がすと桜庭をこの部屋の入口に軽く突き飛ばした。

「うわぁ！？なんで穴が！？」
急に投げられた上に、目の前の床に穴があいている事に悲鳴を上げた。

「簡単に説明するぞ、この部屋は、都合良く穴が開いていたと考えるのが一番だろう、
暗室で足元も暗い」
桜庭は、腰を抜かしながらも、俺の話を聞く

「つまり、この部屋に不用心に足を踏み出せばその穴から落ちる」
俺が、この事に気づいたのは、実を言うと、この部屋の電灯をつけた時だ。
ただの感が、俺にこのドアを開けさせなかった。

「そして、もし普通に開けようとしたであるなら…あれを見ろ」

俺は、内側に開くドアに結ばれている紐を指さす
「あれは？」
「おそらく、外側のドアを普通に開けようとしたら、勢いよく開くようになっていたんだろ？」
そうなれば、バランスを崩して、前に出た瞬間に、穴へダイブすることになる。
「わかったか？」
俺は桜庭に手を貸しながら、聞いたが…
「それじゃ…どうやって、尾田君は奥に居たの！？」
俺はため息を吐きながら、足元にある木の板を指さした…

「あんた…推理力も想像力ももっと養えよ…」
俺は頭に手をやった。
「ちょっと、驚いて考える事が出来なかっただけだよ」
俺の言葉にショックを受けた桜庭は、目をふるふるとさせていた…

天然パーマの男が小動物のように震えても…

「キモ！！」
俺はそういうしかなかった。

67．過去の事件の話

「いい加減に、起きろ！」
俺は、打撃で意識を失った尾田に蹴りを入れる

「ぐっ・・・」
ニ、三発蹴りを入れた所で、尾田が目を開ける…

「月影君…そんなに乱暴にしなくても…」
俺の行動に桜庭は意見したが、これでも生ぬるいくらいだ。
いや、むしろ、生ぬるすぎる！！こいつは、先輩の目を…先輩に牙をむいた奴だ！！

「俺はこいつが嫌いなんだよ！！先輩を傷つけたこいつが！！」
本来なら…全ての筋を切り裂いて…関節を砕ききっても、文句は言えない！！
いや、絶対に言わせない！！

「せ…先輩？…ああ…お前…あの女の後輩か…」
俺の言葉に、地面で苦しそうに横たわる尾田が、俺に話し掛けてきた。

俺は…先輩をあの女扱いする、尾田の腕を踏みつけた

「ああ、俺は鷲見先輩の後輩だ！今から俺は、お前に質問する…
返事は全てＹＥＳか肯定で答えろ」

「……」

尾田が俺をにらみつける…

「抵抗はしないか？」

尾田が首を縦に振る…が、抵抗の牙はまだへし折れていない…
隙を見せれば、即座に襲い掛かるだろう

だから、俺はこいつの反抗する質問をすることにした。
反旗を翻す気など起こさせぬように…
「ただ頷くしか出来ない、弱者…俺の質問に正直に答えるか？」

尾田が俺をにらみつけ…そして、馬鹿にするような顔をすると…首を横に…

俺はその瞬間容赦なく、尾田の顎を蹴り上げた！！

「言っただろ？ＹＥＳか肯定の意で解答しろと…」
口から血をこぼす、尾田の頭に、俺は足を置き…

ミシミシ…！！

「！！！！！！」

尾田が苦悶の表情を惜しみなく曝け出す…
だが…その眼には…まだ俺に対する反逆を諦めてはいない

「逆らえば…砕…！！」
俺は反射的に体が動こうとして…
俺たちは…次の声に動きを止めた！！

「いい加減にしろ！！！！」
俺の言葉を桜庭が遮る！！
「僕は尋問をしに着たんじゃない！！僕は取材しに着たんだ！！」
俺は本来の目的に、歯を食いしばり、そっぽをむいた
「それに！！尾田君！！君も反抗しすぎだよ！！
気が立っている人を怒らせて余計な怪我をしたらどうするの！！
ほら！！ハンカチ渡すから、これで口を拭いて！！」
尾田にハンカチを手渡す桜庭を横目に…俺は腕を摩る…
鳥肌が少し立っていた…
足に力を篭める瞬間…反射的に、俺は後ろへ逃げようとしていた
もし…あの時桜庭の声が無ければ…何が起こったのだろうか…
（妾も…驚いた…なんじゃ…さっきの気は…）
今までも黙っていた石が喋りだした。
（どうしたんだ？…今まで黙っていて…それに…お前も何か感じたのか？）
（うむ…最近よく意識が飛んでいる気がするのじゃ…じゃが、それよりも、あの…狂った…感じがしたのじゃ…が…あれは…）
石がなにかを伝えかけようとしたと瞬間…
俺は腕を引かれる感覚に反応してその方向を見ると…
桜庭が携帯を片手に、俺の腕を引いていた
「尾田君が話をしてくれるって！僕は後からで良いから、月影君の聞きたい事を先に聞きなよ」

「別に良いけどよ…なにかあったのか？」
「うん、君に頼まれていた事の中間報告が来たんだよ…ごめん、急ぐから！！」
桜庭はそう言って、部屋から出て行った…

頼んでいた事？
ああ、家族の事を調べてもらっていたな…

俺はそう納得し尾田と向かい合う椅子の前に座ろうとして…
（おい、さっきは何を言いかけたんだ？）
俺は石にそう語りかけたが…石は何も答えなかった…

まあいい…俺は尾田を見る…
「質問に答える前に…ひとつ教えてくれ…」

尾田が…俺にそう話しかけてきた…
その眼には俺を怯える様子はなく、対等に扱われているという自信に溢れていた…
気に食わない…

「ああ、何が知りたいんだ？」
俺がそう言うと…尾田は、寄り目に力をこめて…
「あの女…鷲見連子が死んだって…殺されたって…本当なのか？」
俺は…その言葉に…無様に口をあけてしまった…

68．先輩を殺したのは？

「それは…どういう意味だ？」
俺は…口を動かし…やっとそれだけを言えた
俺は…先輩を殺したのはこいつだと思っていた…
だが…こいつは…俺に先輩が死んだのかと聞く…つまり…自分は先輩を殺してないと言っている事と同じなのだ。
「俺は鷲見を確かに憎しんでいたが…俺は殺してない…殺していると思われているが、俺じゃない！！」
「信じられるか…なら、お前はなんで脱走したんだ？復讐するために脱走したんだろ？」
そうだ…こいつは施設を脱走してまで…
「俺が自分の力で脱走した訳じゃない…俺はこの街に連れて来られたんだと…思う…」
連れて来られた？と思う？いったい…何の話だ？
「そんな話信じられると思うのか！！じゃあ…なんで先輩を恨んで…」
俺がそう言うと、奴は少し黙って…顔をうつむけた…
「俺は…あの女を殺したかったんじゃない…あの女に償わせたかった…」
償わせる？先輩に何を？
「あんな都市伝説なんて信じたから…あの女は…霧摩先輩を忘れた

んだ…
紅い石の伝説なんて信じるから！！」
俺は…反射的に、石を入れているポケットに手を入れた。
（どういう事だ！！なぜお前のせいで人を忘れたと…）
（わからぬ…）
石は本当に知らない素振りだが…

「あの女だけじゃない…霧摩先輩を忘れた全てが憎い！！
俺は霧摩先輩を殺した奴も…霧摩先輩の存在を忘れて殺した奴らも
許せない！！」
忘却…それは…石の代償の力…もし…先輩が…この石を手に入れて
いたら…それが…この石の再会の能力を超える願いだったとしたら…

例えば…死者…死人との再会…

それは…店長が言っていた…“死者との再会を望むな”
あの警告がなければ…俺は石に先輩との再会を望んでいた。

「それに…霧摩先輩のあの妹にも…復讐してやる！！
あの女より憎い！！自分の姉を守れなかったあの女の家で暮らして
いたあの女が！！」

先輩の家に？暮らした…霧摩先輩の妹…それって…
「普通…自分が守れなかった大切な人の妹が居たら忘れないはずだ
ろ！！
何で忘れることが出来るんだよ！！忘れたら、お前が思い出させろ
よ！！
何の為に家に居るんだよ！！復讐の為だろ！！クソッ！！」
尾田は興奮して地面を蹴り、喋り続ける…だが・・・俺には、そん
な些細なことはどうでも良かった

つまり…先輩を殺す理由があるのは…

「月影君！！鷲見君の妹が…じゃなくって…鷲見君の家族だけど…叔父さん以外に司ちゃんの妹も居たんだよ！！」

電話でちょうど俺が考えていた事を聞いた桜庭が慌てて走ってくる。

「今は何処にいるか調査中だけど…もう少しこの妹について調べたくなったから！！尾田君の話を聞いたら、メモ取ってね！！」

俺は…走り去る…桜庭を見て…尾田に顔を向ける

「だそうだ…次は俺の話を聞いてもらおうか…」

「はぁ…はぁ…なんだよ…まだ話しているのに…」

話を途中で止められた尾田が不服そうに、俺を見るが…

「なに…簡単なことだ、霧摩先輩の妹についてだが…」

「ああ…あいつが…どうしたんだ？」

俺は、落ち着かせ…たった一言…尋ねた

「その妹の名前は…冥乃か？」

「なんで知っているんだ？」

尾田の言葉に…俺は…

69．過去の話の前に…

「それは、彼女は今、俺の家に居て、俺の妹になっているからだ」
俺がそう言うと、尾田は…さっきの俺みたいに口をだらしなく開けていた。

「司先輩の妹が…あんたの所に…？」
確かに、普通に考えたら、わからないだろうが…
「ああ、親父たちが先輩の伯父さんから勝ち取ったと言っていたけど…どんな意味があるか考えていたが…」
俺は頭に手をやる…日常を壊す可能性のある存在を監視するために取り入れたんだろうが…娘とか言って…警戒なんてして…いたのか？
あれは全て…演技だったのか？大切な娘と言いながら…その内心…疑いの目で…

「…おい…」
尾田が俺に話しかけてきた
「まだ自己紹介をしてなかったな…」
俺は眉をひそめる
「急に自己紹介とか…どういうつもりなんだ？」
こいつと仲良くするつもりはないが、情報が手に入る。

「協力関係になるんだから、これくらいはしないと」
「月影雅春だ、あんたの通っていた学校の後輩だが、あんたの事を先輩とは呼ばねぇぞ」
別に自己紹介をしたくない訳ではない…それに自己紹介をした仲なら…こいつが嘘を付いていても…確実に、再会して…償いをさせてやる。

「生意気な後輩だな…俺の名は…尾田…ふっ…史一だ。あの女と霧摩先輩とは…幼馴染で…子供のころからよく知っている」
少し噛んだ気がするが…尾田は自己紹介をした
「先輩の子供の頃か…」
俺は少し気になった…見た目や体つきは、女の子らしいのに、行動や性格は男と言うよりも漢な先輩は…子供の頃から…あの性格だったんだろうか？
むしろ、子供の時の方が、内面と外見に差が無く、バランスが取れているのかもしれない。
「今、あの女の過去が、気になっただろうが…俺の話を聞け」
尾田の顔が冷静に何かを俺に伝えようとしていた。
「霧摩先輩の妹は…実の妹じゃない」
それは…俺にとって…彼女を…冥乃が、人間ではない…可能性を増やす…要因でしかなかった…
「冥乃は…小学校の頃に、急に先輩の家に居た。
先輩があの女の遊びに付き合って、木から落ちて足を折った事が原因でだが…」
先輩…やはり昔から…
「それで、何度か見舞いに俺とあの女は言ったんだが…その時に…急に妹と紹介された」
今は、そんな事よりも…冥乃の事に集中だ。
「急に？霧摩の両親は？ふつうは、お家事情とかあるんじゃ？」
尾田は、顔を二、三度横に振ると…

「知らない…そんときは子供だったから…新しい友達が出来た事に浮かれていた。
それに…あの頃の事を考えると…霧摩先輩がとても…幸せそうにしていたから、俺はそれが嬉しかった。」
俺はそう言って…微笑む…尾田を見て…不意に…似ていると考えてしまった…

俺自身に…

俺も…先輩が楽しそうにしていたら…それを…眺めていたい

「少し話がそれたな…でも…それまで。ただ楽しんでいた日々は…急に終わりを告げたんだ」
終わり？

「3人で…仲良くしていた日々は…霧摩先輩が入院してから…あの女が…甲斐甲斐しく、世話を始めてから変わった」

70．過去の話

石が…急に気を利かせ…尾田の記憶を俺に念写した

俺の意識に見えるのは…白い病室…とても…悲しい感情…喪失感…無力感とも思える雰囲気…

映像と…声が聞こえた…

「俺が馬鹿なことにお前を付き合わせたから…こんな事になった…」

あの女が…霧摩先輩に土下座をして謝るのを…あの頃の僕は見ていた…

「べっ…別に…気にしなくて良いよ！連子ちゃんが…危ないって言ってくれたのに…無理してついてきた私が悪いんだから…」

それは…僕が鷲見先輩を木登りに誘って…僕が言った一言が原因なのに…

「霧摩先輩は駄目だよ！これは男の遊びなんだから！女の子は座って、僕と鷲見先輩のどっちが勝つか見ていてよ！」

他愛な子供の言葉…

「おいおい、俺も女だぜ？後輩？」

鼻で笑いながらも先輩は僕との勝負に乗り気だった…

この頃僕は…小学二年生で…先輩達は三年生だった。

当時は男女間に気恥ずかしさを考えるような年齢で、女の子らしくない先輩の方が気軽に話すことが出来て、それもライバルのような関係で勝負出来たが、女の子らしい霧摩先輩とは少し話し難い関係だった。

だからこそ…僕は鷲見先輩によく勝負を挑んで、コテンパンに負かされていた。

3人ではなく2人で遊んでいるような近状に…ついに…霧摩先輩は…

「ずるいよ…連子ちゃんばかり…」

拗ねる…この頃の霧摩先輩は…僕たちの中でもまともだった…だから…だから…

自分も仲間に入れてもらいたくて…僕たちの木登りに…後から上りだしたんだ…

僕は…鷲見先輩に勝ちたい事しか考えず…木を登った…

全力で登った…一生懸命上った…でも…

先輩は僕の一歩先を楽勝と言いたげに上っていたが…

「…っ！！…」

そんな声が聞こえたかと思った時に…先輩は急に手足を止め…僕はその隙に先輩を抜かした…その時の先輩の顔は…今でも覚えている…驚愕…僕に負ける事に表した表情だと思っていたのに…

「馬鹿！！何やっているんだ！！」

先輩が…急に…木を降りはじめたが…僕は…木を登り…下を見て…

そこには…木の枝に片手でしがみついている…先輩と…

「腕に掴まれ！！」

木の枝から…懸命に手をのばして…先輩に助けを求めている

「駄目…もう…げんか…」

霧摩先輩だった…あの声は…霧摩先輩で…先輩はそれに気づいて…

僕との勝負を捨てて助けに行った…

でも…

バキィ！！

枝が耐え切れず折れ…

先輩の手は彼女には届かず…霧摩先輩は…地面へ落ちていく…

そして…先輩は…自ら…手を離し…霧摩先輩を掴むと…ポキン…と小枝が折れる音がして…

先輩と霧摩先輩は抱き合うように地面に落ちた…

慌てて降りた僕は…すぐに近所の大人を呼んだ…

そして、二人はすぐに病院へと行った。

先輩は無傷だったが…霧摩先輩は…足を骨折してしまい…先輩は一応脳波を調べるために検査入院で霧摩先輩は、足の手術で入院が決まった。

そして、目覚めた先輩が…初めに行った事が…霧摩先輩に土下座だった

でも…本当の事件は…この後に起きた…

71．どうしようもない事実

霧摩先輩の両親が…運転を誤って…先輩の両親を殺してしまった。

いや、それだけじゃない…霧摩先輩の両親もその事故で死んでしまった。

急な両親との別れ…それは…霧摩先輩には耐えきれないものだった…先輩も…はじめは…霧摩先輩を慰めるように傍に居た…自分の両親も死んだのに…先輩は霧摩先輩を励まして、それで悲しみを堪えているように僕には思えた。

それでも霧摩先輩には…それが唯一の支えで…でも…病院の見舞いと称して来たマスコミに…告げられた…先輩の両親を殺した娘をどう思っているか聞かれたとき…

先輩は…目を見開いて…霧摩先輩を見ていた…

霧摩先輩は…そんな先輩を見て…怯え…泣き出し気を失った…

そんな事が起きて、看護師や医者がすぐに駆けつけてきて、マスコミを追い出すと…同じ病室だった先輩を…別の病室に分けた…。

それから…霧摩先輩とは、しばらく会えなかった

でも…僕は…霧摩先輩に会いたかったから…先輩が支えられない今こそ…僕が支えてあげるべきだと思って…僕は…病室に入った…

そこには…呼吸器をつけて眠る…霧摩先輩がいて…
口が微かに動いていた…眠りながら何かを呟いていた…僕は…それが気になって…顔を近づけると…

ごめんなさい…ごめんなさい…連子ちゃん…ごめんなさい…
許して…許して…ごめんなさい…嫌いにならないで…ごめんなさい…

僕は顔を一気に遠ざけた…

僕は怖いと思った…僕だけが独りではないのかと…そう考えて…しまったから…僕は病室を逃げるように飛び出た。

それから…霧摩先輩が目を覚ましたことを聞き…僕は再び会いに行った…
先輩は来ていなかった。
「ん…史一ちゃん…来たんだ…」
そこには…生きる意志のない…人形のような霧摩先輩がいた…

僕は…先輩が来られない分も霧摩先輩を支えようと思っていたから、それから、しばらく、僕はお見舞いに通う事にした。

その間に、先輩は退院したが、霧摩先輩のお見舞いには来なかった。

僕だけが…支えになれる…そう考えていた時に…冥乃が現れた…

「この子、私の妹なんだよ」
霧摩先輩がそう言った…僕はどういう意味かわからなかった
霧摩先輩に妹がいたなんて知らなかったから…僕が霧摩先輩の家に行かなくなって忘れていたのだろうと考えた。

待て…これはどういう事だ！

俺は…石が見せる映像を見て驚いた…

（ふむ…この小僧の意思は…気にしてないようじゃが…これは…あの娘なのじゃ…）

そこには…明らかに…この頃の尾田たちよりも年上で…現在の冥乃と姿が同じだった…

（ここに…守護する存在の…素が…ある…）

どこの病院かわからなかったが…後から聞けば良い…

俺はそう考え…意識をまた過去の映像に集中させた。

72．先輩と彼女

僕は…彼女に疑問を覚えながらも…先輩の代わりに、霧摩先輩を励ます事の使命感で頭がいっぱいだった。

それでも、挨拶ぐらいはしておかないと…

「よろしく、えっと…ごめん…名前…なんだったっけ？」

そう考えたのは良いけど、僕はこの人の名前を思い出せなかった。

「め…冥乃…」

彼女は一言そう言うと…そっぽを向いた

「こら～、冥乃ちゃん！！史一ちゃんの方がお兄ちゃんなんだから！そんな風じゃ駄目だよ！」

僕と彼女のやりとりを見ていた先輩が体を起こし、冥乃ちゃんに注意する…

冥乃ちゃんは、霧摩先輩に叱られて、しゅん…と顔を俯ける

そして、霧摩先輩が今度は俺の方を向き…

「ごめんね、冥乃ちゃんは人見知りが激しいんだから…」

申し訳なさそうに…いつもと同じ表情で俺に接していた…

嫌な予感がした…一人置いて行かれるどころか…自分の立場を失っていく予感が…

でも…

「ごめんなさい…」

彼女のこの一言に…俺は…なぜか、今さっきの不安を打ち消された…

そう…仲良し三人組じゃなくても…４人組で良いんじゃないのかと、そう思えた。

「いいよ～それより、今度から…よろしく！」

俯いている彼女に僕がそう言うと、霧摩先輩が嬉しそうな顔をした。

僕だけで霧摩先輩を立ち直らせたかったが、どうやら、霧摩先輩はこの子を拠り所に立ち直ってくれたようだった。

僕はその事はもう良いと思った…だけど…

それから数日が過ぎ…

「史一さん…こんにちは…」

冥乃ちゃんが僕に挨拶をしてくれるようになった…

まだ少しぎこちないが、初めよりはマシだった。

「いま、花瓶に水を入れてくるので…姉さんと話をしていてください」

彼女はそう言うと、僕の横を通り、いつもの様に、僕は先輩のベッドの隣の椅子に座る。

霧摩先輩は…眠っている…安らかに…気持ち良さそうに眠っていた…

話をしていてって…寝ているのに…まだ、僕の事を警戒してあんな事を言ったのかな？

「んっ…史一ちゃん…？…！！」
そう考えながら、寝顔を見ていたら、目を覚ました先輩は、慌てて顔を隠す…
「別に涎も垂らしてないから、安心して良いよ」
僕がそう言うと、顔を真っ赤にさせた霧摩先輩が何かを言おうとしたが…僕には聞こえなかった
眼が覚めたから、僕は彼女が言っていたように、お喋りを始めた
今日、学校であった事、給食の話、勉強の事、思いつく事を手当たり次第に話していて…
ふと、霧摩先輩の顔を見ると…
霧摩先輩は、入口の方に目をやっていて…寂しそうにしていた…
「霧摩先輩？」
僕が呼ぶと、慌てて、僕の方を見た。
「えっ、あっ…ごめんなさい…なに？」
そんな先輩を見て僕は…
「別に良いよ、いつも僕ばかり話していて…少し飽きるよね…」
僕は…本当は違う理由だと思ったが…この事が口に出た…
「そっ…そんな事ないよ！！史一ちゃんは、私のお見舞いに、ちゃんと来てくれるんだよ！」
霧摩先輩は大声で僕に話しかけ…僕の目をしっかりと見る…

「飽きてなんかいない…私は、まだ学校に行けないから…その事を話してくれるだけでとても嬉しいんだよ！！」

霧摩先輩がそう言ってくれて…僕は…

「うわぁ！？史一ちゃん！！泣いている！？ごっ…ごめんね！！急に怒鳴ってごめんね！！」

いつの間にか泣いていた俺に慌ててドタバタして…

「びっくりしただけで泣くなんて…子供…」

いつの間にか、花瓶を持った冥乃ちゃんに…鼻で笑われた…

泣いてない…くらいは…言わせてほしかった…

73．花の言葉

霧摩先輩は…先輩の事を待っている…

僕はそう思った…

でも…僕だけでも…先輩が居なくても…大丈夫なように…

そう考えていた僕の眼に…ベットの傍にある花瓶が目に入った。

紫一色の花瓶

「そういえば、この花いつも変っているけど…冥乃ちゃんが変えているの？」

僕がそう聞くと、冥乃ちゃんは首を振った

「いつも、入口に置かれているので…花を変えています」

いつも入口に？

「それって、この病室の花なの？」

隣の病室に渡される花を持ってきていないか心配になったが…

「宛名に霧摩と書かれていた…」

送り主は誰なんだろう…僕はそう思った…不意に先輩の姿が脳裏に過った…

なんでこんな事を考えるんだ…先輩じゃないかもしれないじゃないか…

学校で先輩は外を見て…僕がいくら誘っても…先輩は…

“行かねぇ…”

そう呟いて僕の目を見なかった…

「花言葉って…わかります？」

考え込んでいた僕に…冥乃ちゃんがそう聞いてきた…

「知らないけど…急にどうしたの？」

花言葉なんて僕は知らない…むしろ知っているほうがおかしいと思う…男が花言葉なんて…

多分先輩でも、知るか！の一言で済ませるだろう

「フウロソウ、シザンス、ムラサキケマン」

そう呟くと、彼女は花瓶に近づいた

そして…

紫の花を冥乃ちゃんは僕に見せた
「フウロソウの花言葉は変わらぬ信頼、慰める…
次に薄紫の白っぽい小さな花を見せながら…
「シザンスの花言葉は、良きパートナー、貴方と一緒に、」
そして、最後に…また紫色の細長い花がたくさん付いているものを…
「ムラサキケマン…これは…あなたの助けになる」
その意味は…知らなければただの花…
知ってしまえば…意味が…現れ…僕は…先輩の代わりに頑張っている事を…先輩は…
そう考えた時…僕は冥乃ちゃんを見て…
「次来るとき絶対に先輩を連れてくるから！霧摩先輩を笑顔にしようね！」
一人欠けてはだめだなんて…初めから知っていたはずなのに…
僕って馬鹿だ…
「お願いします…その人が誰か私は知りませんので…」
冥乃ちゃんは僕に頭を下げた

７４．世の中の裏

僕は先輩を連れて行こうと…そう決めていた…

二人を仲直りさせる事が…僕が今すべきことだと思っていた…それなのに…

「ごめん…先輩を見つける事が出来なかった…」

前回から一週間後…僕は先輩を連れていこうと思ったのに…先輩はその日に限って姿を見せなかった…

だから…しぶしぶと…悔やむ気持ちで独り冥乃ちゃんに頭を下げた…

「良いんですよ…人の運命なんて…わからないんですから…」

冥乃ちゃんは…力無く笑って、俺を慰めたが…

「僕がもっとしっかりしていたら先輩を捕まえる事が…」

「良いんですから…本当に…そこまでしてくれて…ありがとう…」

冥乃ちゃんが…僕に頭を下げた…

今度こそは…絶対に…そう思った時…

「あっ…正義の味方さん…」

顔を上げた冥乃ちゃんが…急にそんな言葉を言って…

「やべぇ！？」

聞き覚えのある声が…僕の背後から聞こえた…

僕が後ろを振り向いたときには…その人物は見当たらず…ただ…壁を横切る…長い黒髪だけが見えた…

「なんで…逃げたんでしょう…？」

冥乃ちゃんが…不思議そうに首をかしげ…僕はそんな彼女に尋ねた

「冥乃ちゃんさっきの人…」

「正義の…味方…です…本人がそう言ってました…」

本人いわく、冥乃ちゃんに絡んできた入院見舞？に来ていた不良から、彼女を助けた人物らしい…

だけど…あの声は…先輩だった…

先輩は…もしかしたら…すぐ近くまで来て…帰っている？

そう考えるとあの花束も…先輩と考えられた…

「なあ…省略して要点だけ、わからねぇか？」

俺はあまりの回想の長さに我慢が出来なくなった

「そうじゃな…これはあまりにも長すぎる…妾が要点だけをまとめて見せよう」

石がそういうと…

映像が早送りされ…意識的に…先輩が霧摩と呼ばれる女性と仲直りした映像が流れた…

「つまりじゃ、初めから鷲見という女は、あの霧摩を憎んだわけではなかった。

少し驚いて、それを言うタイミングを失っていたんじゃ」

「つまり…冥乃は…それに力を貸していた…」

「小僧、この病院に向かってみるのじゃ…何かわかるかもしれん…」

俺は石の提案を受け、意識を外に戻した。

「おい…もう話は良い…その病院はどこにあるんだ？」

「なんだよ…良いところだったのに…まあいい…時間がないからな…すぐそこの病院だよ…この街で唯一残った病院だから、わかるだろ？」

そう言われ…俺は…焦った…その病院は…

舞華のいる病院……だった…

75．病院

いつの間にか夕方になっていた…

俺は夕暮れの中を…走った…走り続けた…親父に…冥乃の様子を聞く為に電話すると…

あいつは…舞華の見舞いに行ったと言っていた…

クソッ…間に合え…間に合えよ…

冥乃が舞華のとどめを刺しに行ったと考えた俺は、焦っていた。

「朽木の姉が入院している病院が…まさか…あの因縁の病院なんて…

おい…少し…速い…月影…スピード…落として…くれ…」

うるさいな…舞華が入院しているところが…あの行った時…尾田が俺に着いていくと言った

「うるさい、もっと速度を上げるぞ…それに…舞華は、妹の方だ」

俺はそう言うと、さらに速度を上げた…

「待て！！くそ…俺って…指名手配されて…いる…かも…しれないのに…これは…危ないんじゃないのかな～」

そう言えば、こいつは容疑者だったな…

俺はすぐに足を止めて…右拳を軽く握ると…後ろから追ってきている尾田の顔めがけて…

拳を振った！！

ズガン！！

速度×力×握力＝破壊力　ある喧嘩屋の考えだ！

まあ…速度と力が優れているが握力不足で、緩和されるはずだ…

そう思ったが…尾田は縦に半回転して…地面に顔を擦るように回転して、地面に倒れた…

（なにをしているのじゃ！！）

懐の石が、俺の行いに動揺したが…

（なに…顔を破損させれば…ばれないだろ？）

そういうと…

（そうじゃな…それもそうじゃ…じゃが、それだけでもないのじゃ！）

石の言葉に俺は…尋ねた

「いてぇ…なにするんだ…マジ痛い…」

（この怪我じゃ、救急車の出番じゃ）

俺は石のこの発言に笑みを浮かべ…携帯をいじると

「もしもし…怪我人がいるんです…顔面から血を…ああ、すぐに来てくれるんですね…

場所は…●●の●●▼です」

俺は丁寧にそう言うと、救急車をすぐに手配してくれた

「すまねぇな…これですぐに行けるぞ！」

１０分後…救急車が到着し…俺と尾田は、それに乗り込んだ…

まあ、尾田は搬送されたが正しい

それから尾田は、簡単な手当てを受けるために診察室へ入っていき…

俺は舞華のいる病室へ急いだ…

「なんじゃ、雅春…血相を変えて…大きいほうの娘はまだ意識は目覚めておらんが…容体は安定しておる…あふぅ～」

俺が途中で見たのは…首に点滴を突き刺さって…悦と真面目顔を切り替えているおっさんがいた…

「この患者さんは、新薬の精神安定剤を打たないとすぐに暴れだすんですよ」

御丁寧に教えてくれた看護師に俺はお礼を言うと…舞華の状況を再び訪ねた。

「ああ、舞華さんの病室は面会謝絶だけど…」
面会謝絶…ああ…念のために保護している段階だろうか…

「さすがに、御見舞いとかも入れられないからね…それにしても…さっき来た女の子にも悪い事をしたな…」

「女の子？誰か来たんですか？もしかして…」
俺は簡単に冥乃の容姿を説明した

「え～と…」
看護師が答えようとした時…
「ちょっと、新草（あらくさ）さん、なにサボっているんですか？」
どうやら、仕事中にお喋りしてたから先輩と思われるおばさんが、話しかけてきた。

「婦長！？ごめんなさい、仕事があるから、あとはあの人に聞いてね」
そう言って…新草さんは去って行った…

７６．…冥乃…（前書き）

これは修正版です
前回の７６では納得できなかったので作りなおしましたが
更新がうまく反映されておらず、分らなくなった事と存じますので
ここでお詫び申し上げます

76．…冥乃…

婦長と呼ばれた看護師に、冥乃と特徴を話しているとき…看護師の目が…俺の背後に…

「あら？その方だったら…」

看護師がそう言った瞬間、俺は横へ跳んだ！

そして反転すると…なるべく自然体で後ろを見た

「こら！暴れちゃいけないでしょ！」

俺の動きに看護師が怒るが…俺の眼には、俺の背後で手を伸ばそうとしていた状態の冥乃を見た…

その顔には…怯えたような…怯えているのに無理やり笑顔を作った彼女が居た。

「あの…雅春く…」

俺は…冥乃を睨みつける…

「あの…あの…どうして…私を…睨むの…」

白々しい…人である真似をしている…

今すぐにでも、飛びかかりたかった…だが、人の目があるこの場所では出来ない…

「別に睨んではいない…それより、話がある」

俺は警戒しつつ、後ろを向くと、看護師に礼を言った。

「見つかりました、ありがとうございます」

看護師は、病院では静かにと、もう一度俺に注意をすると、去って行った。

これで邪魔者は居なくなった。
俺は再び冥乃を見ると…
「雅春君…ごめんなさい…」
冥乃は謝っていた…

「なにを謝っているんだ？なにを考えているんだ？」
気を許すな…気を許せば、この存在はきっと俺に牙をむく…俺を排除しようと…

「私が何か雅春君を怒らせるような事をしたから…でも、考えても、なにもわからなくて…でも、雅春君が、あんなに怒る事だから…なにか…なにか…私はとても大変な事を…」
イラつく…石が言っていた…表の人格は知らないという奴か？

「雅春君のとても大切なものを傷つけたみたいで…」
知らなければ、知る前に全てを終わらせる…そう考えようとしたが…この言葉を聞き…俺の我慢は…俺の怒りは抑える事が出来なかった…

「傷つけたみたい？傷つけたみたいだと…ふざけるな！」
急に切れた俺の様子に冥乃は戸惑い、後ずさる…

「俺の大切な人を傷つけたくせに！俺の大切な人たちを殺そうとしたくせに！
俺の大好きな…先輩を…殺したくせに！！お前が狂って…殺したくせに！！」

（歯止めが利かない…悪意が…抑えきれない…なぜだ？なぜ俺は…）
そして、俺は…きっと…最大の禁句を言ってしまった…

「化物め…消えてしまえ…」
自分の口から出たものとは信じられなかった…

その言葉が出た後で…俺の言葉は止まり…急に冷静になっていく…
なぜ彼女が舞華にとどめを刺しに動くのか？
彼女の技量なら…心臓一突き…それに…初撃を仕留め損なっても…
そのまま、二手三手で仕留められる…

それなのに…なぜ俺は…冷静さを取り戻した意思が…冥乃を見る…

顔を俯けている…表情が見えない…

俺は…そんな…彼女に手を…伸ばそうとして…

『化物…消えろ…化物…消えろ…』
俺の鼓膜を揺らす多重の声に、その手を引いた！

彼女が不自然に片方の肩を落とすと…壊れかけのマリオネットのように…不気味に…首をかしげながら顔を上げる…

その眼には…生気は感じられず…ただありのままを聞き流した人形…

人の形をした…何かがそこに居ただけだった…

77．バケモノ…キエロ…

人形が…俺を見る…

『化物…消えろ…化物…消えろ…』

さっきの声がまた重複する…

『バケモノ…バケモノ…キエロ…キエロ…』

人形の虚ろな目が…俺を捉える…

『バケモノは…存在してはいけない？バケモノは…居ちゃいけない？』

人形が…俺に…近づいてくる…

『なら…なぜ…なぜ…私は…私たちは…生まれてきたの…』

そう人形が呟いた瞬間…その眼は…

「め…めい…冥乃…」

彼女の…眼だった…いま俺を見ている眼は…初めて会った時の…彼女だった…

『バケモノは…殺されなければならない…バケモノは何も護れない…』

彼女はそうつぶやくと…

『バケモノを殺すなら…殺せ…バケモノは…バケモノとしての本質

を…示そう…』
狂った人形の眼になった彼女が…窓を突き破って…外へ出た…
俺は慌てて…彼女の出た窓に近づくが…もう…彼女の姿は見えなかった…
狂っている…確かに彼女は狂っているが…あれは…完全に狂っているのか？
あれは…本当に手遅れなのか？
あの言葉は…あれは彼女の悲鳴なのか？
（わからぬ…じゃが…あやつの気持ちを考えると…妾も悲しい…）
それはどう言う事か聞こうと思ったが…
そう言われ考えて…俺は…理解した…
化物…バケモノ…そう言われる事の悲しさを…
苦しみを…バケモノは人間と仲良く出来ない…人は脆く…人は頑丈…
殺そうと思って殺せるものでもなく、殺すつもりがなくても死んでしまう…
殺意無き殺害を…人は恐れ…
人間に無い力を…多くの無き人間は恐れ…
その恐れを増長し憎しみを生むかのように…人を害し…人に恐れられている

そう…彼女が言う…化物の本質は…人を害する…

ガチャーン！！
病院のどこかで何かが壊れる音…

それは…舞華の居る病室から聞こえた…

俺は慌てて…舞華の病室に走る…面会謝絶のかかっていた扉は…破壊されて…病室の中は鋭利な刃物で切り裂かれていた…
幸いなことに…舞華の姿がない…この場でとどめを刺されてはいない…
切り裂かれた点滴器具を見ても…この切れ味は…鋭すぎる…

俺は窓に近づき、外を見るが…そこに…怪しい存在は無く…地上に砕けたガラスが落ちているだけだった…

78．追跡

病室には、舞華は居ない…現状を察するに、さらわれたと考えるべきだろう…

この状況に、俺の後に走りこんできた舞華のおっさんは、取り乱し新草さんに注射を打たれ、いま別の場所で拘束されていて、おばさんと刹那は、警察に向かった…

「これを…冥乃がやったのかよ…」

俺は手掛かりがないか、病院から出て、ガラスの散らばっている窓の下に行こうとしたが、既に警察が進入禁止のテープを張っている事と、野次馬が邪魔で調べることは出来なかった…

冥乃は化物の本質と言っていた…それは…人を害し…滅ぼされること…

未知の存在を恐れ…バケモノと呼び…人は滅ぼしてきた…

自分よりも強きものを…人間は倒した…

まるで…化物は…滅びる運命だと言わんばかりに…

つまり、冥乃は…俺に滅ぼされたいと言っているのか？

滅ぼされる為に、害すると言うのか？

考え事をしていると…石が…

（のぅ…尾田はどうしておるのじゃ？）
すっかり忘れていた事を告げた…
俺は周囲を見る…警察だらけ…病院内に警察が…多数…
俺は…病院の方を見ると…両手を合わせて…
合掌！！
（そうか…見捨てるのじゃな…）
俺の行動を理解した石はそう言うと…
（あのような足手まとい、居ない方が、楽に動けるのう…それに、あれじゃ、顔がつぶれておるなら、気付かれにくいじゃろ）
石は、まあ、別に良いんじゃね～的な感覚で、そう言うと…
（誰かが、小僧を探しておるぞ？病院の入り口の方からじゃ）
誰かが俺を探している事を告げてくれた。
俺がその場所に向かうと…
「あっ、居た居た！君！さっきの顔面を潰した患者の知り合いだよね？」
それは、尾田を診ていた医者だとおもう…
「いえ、知りませんが？」
尾田が捕まっていたとしたら、俺は共犯になるから、問答無用で尾田を見捨てることにした…が…

「そんな…あの人診察代も払わずに、居なくなるし…どうしたら…」
どうやら尾田は、逃げたようだが…

「そのくらい自分で立て替えれば良いんじゃないんですか？下手に騒ぐと、もっとやばくなると思うけど…」
そう言うと…医者は少し間をおいて…

「それもそうだ…君さっきの話は気にしなくて良いよ！それじゃ！！（カルテを細工しないと！）」
そう言うと、彼は急ぎ足で、診察室へと戻った。

尾田の奴は捕まっていないようだが…近くに隠れているかもしれないと考えた俺は病院の外に出て怪しい動きがないか調べ…

そこで俺は…足元のシミの様な点に…気がついた…そして、その点は、病院の敷地の外へと…続いていた…

これは…水…おそらく、点滴の液体…そして…血…

舞華の傷口が開いたのだ…

早く追わないと…手遅れになる！ちくしょう！！

俺は走り出した…大切な人を救うために…そして…大切だった者を…

ああ…化物の性分に決着をつける為に…覚悟を決めた…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1250f/

都市伝説“モトメルモノ”

2010年10月21日08時17分発行